

ひがし ご り た
東五里田遺跡

長野県佐久市野沢字東五里田遺跡発掘調査報告書
(弥生前期・奈良・中・近世)

2004. 3

佐 久 市
佐 久 市 教 育 委 員 会

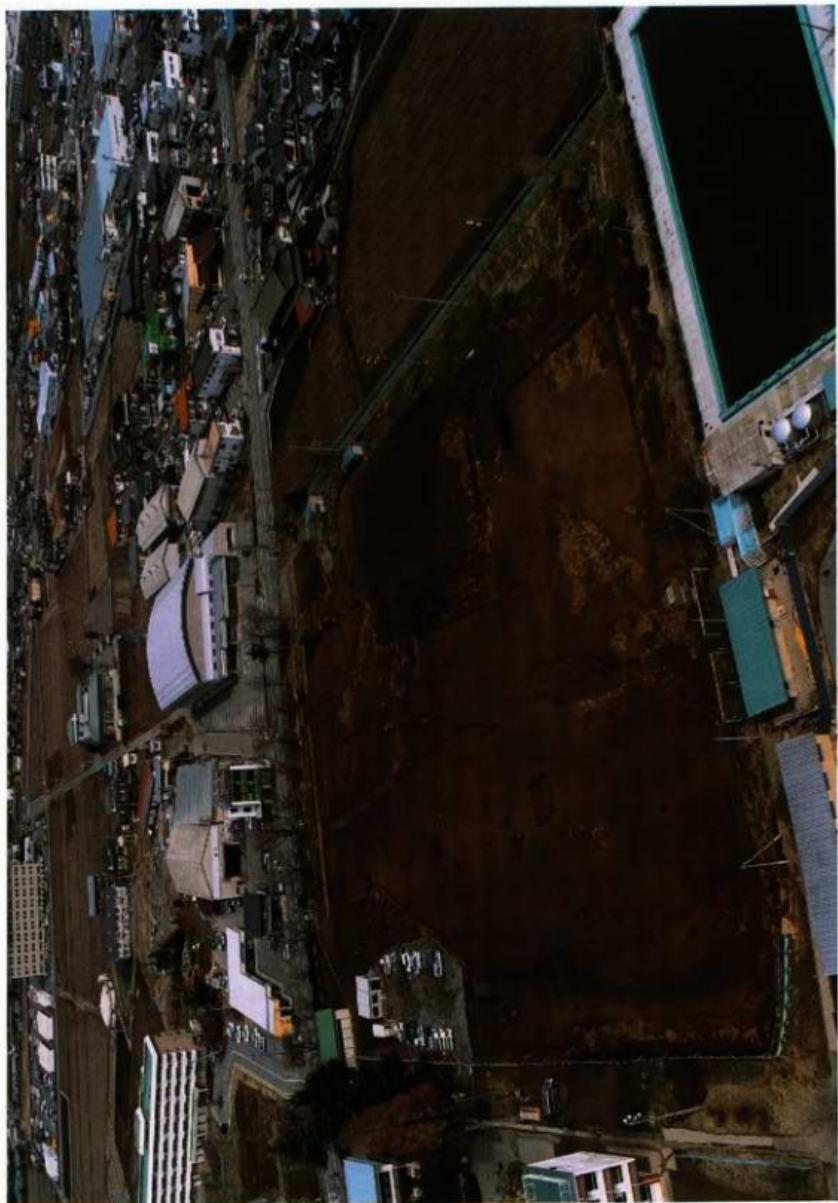
ひがし ご り た
東五里田遺跡

長野県佐久市野沢字東五里田遺跡発掘調査報告書
(弥生前期・奈良・中・近世)

2004. 3

佐 久 市
佐 久 市 教 育 委 員 会

東五里田漁港丘陵（南より）





東五里田遺跡遠景（南より）



東五里田遺跡遠景（手前が東）



東五里田遺跡全景（手前が南）



東五里田遺跡北側全景（手前が南）



東五里田遺跡南側全景（手前が南）



1, H. 2 2~13, D. 7号土坑 14~29, D. 8号土坑 30~33, D. 11号土坑 34~36, D. 14号土坑(齐家中期)

齐家前期土器群



弥生前期石器・剥片群



H 1 - 1 須恵器壺と内容物



- 1-3. 出口形 中厚 11C後半~12C前半
 4. 白底黑(口)形 中厚 12C後半~14C
 5. 白底黑中形 中厚 13C 壓ね足
 6. 灰白底小帶子形 中厚 13C~14C前半
 7. 灰白底輪廓形 中厚 13C~14C前半
 8~10. 井字網狀文鏡 壓ね足 12C後半
 11~15. 井字網狀文鏡 壓ね足 13C
 16~23. 井字網狀文鏡 壓ね足 13C~14C前半
- 24~30. 青釉蓋井文鏡 壓ね足 13C後半
 41. 青釉鏡 壓ね足 13C末~14C前半
 42. 青釉蓋井文鏡 壓ね足 13C
 43. 青釉鏡 壓ね足 13C前半
 44~45. 井字網 壓ね足 中厚
 47. 青釉井字網鏡 壓ね足 14C中頃
 48~50. 青釉井字網鏡 壓ね足 14C
 51~53. 青釉井字網鏡 壓ね足 14C
 56~58. 青釉井字網鏡 壓ね足 14C
 59~60. 山形鏡 壓ね足 中厚
 61. 墓・井 文鏡 14C
 62~64. 墓・井 文鏡 中厚
- 65~67. 墓・井 文鏡 14C

M 1号溝出土中世陶磁器



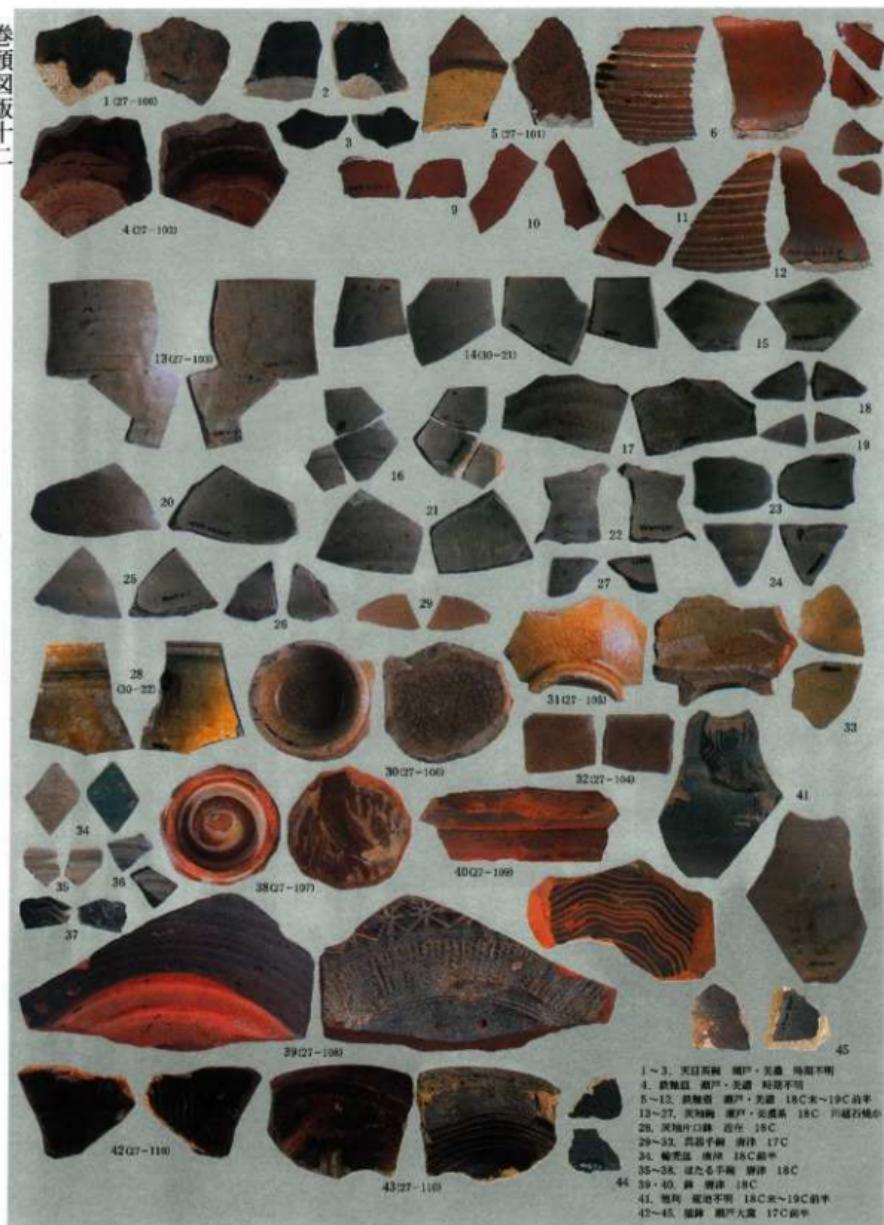
M 1 号溝址出土近世陶磁器(1)



M 1 号溝址出土近世陶磁器 (2)



M 1号溝出土近世陶磁器(3)



M 1 号溝址出土近世陶器(4)

例　　言

- 本書は平成14年度の佐久市立野沢中学校管理特別教室・普通教室・屋内運動場の改築工事に伴う発掘調査の報告書である。
- 発掘調査は、佐久市教育委員会文化財課が実施した。
- 本書に掲載した地図は、佐久市発行の基本図（1:2,500）を使用した。第1図地質図は1988佐久市志刊行会『佐久市志　自然編』付図より許可を得て転載した。
- 発掘調査は富沢一明が担当し、本書の執筆・撮影は森泉かよ子が行い、校閲を富沢一明が行った。
- 第IV章第4節「弥生前期出土土器」・第V章第3節「弥生前期の遺物について」は中沢道彦氏に原稿を贈った。
- 黒曜石の産地推定は望月明彦氏、須恵器壺の内容物については（財）元興寺文化財研究所に分析を委託した。また第IV章第3節「佐久市東五里田跡から出土した弥生前期の石器群について」は、株式会社アルカに挿図・原稿を委託した。
- 弥生前期の土器及び石器群については、適切なご指導ご助言を百瀬長秀氏、陶磁器の分類・年代については長野県埋蔵文化財センター　市川隆之氏にご指導して戴きました。また長野県埋蔵文化財センター　町田勝則・大竹憲昭氏にはご教示を賜りました。記して感謝いたします。
- 航空写真は（株）協同測量社に委託し、それを使用している。
- 本遺跡の遺物等の資料は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　　例

1. 遺構の略号は次の通りである。

- H—竪穴住居址、F—掘立柱建物址、D—土坑、P—單孔ピット、M—溝址
2. 掘図中の遺構の縮尺は原則として1/80である。異なる場合は図中に明記してある。
3. 掘図中の遺物の縮尺は1/4である。異なる場合は図中に明記してある。
4. 掘図中のスクリーントーンは以下のことを示す。

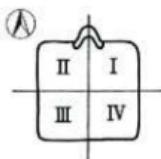
遺構

地山断面		燒	土		粘	土	
柱痕		壠	方				

遺物

須恵器断面		黑色處理		穢	
牠					

5. 竪穴住居址の出土地点は下図の分割によるものである。



6. 遺物一覧表の（ ）は推定、〈 〉は残、一は計測不能を表している。蓋の計測値は上から口径、つまみ径、器高を測っている。

目 次

巻頭図版
例 言
凡 例
目 次

第Ⅰ章 発掘調査の概要.....	1
第1節 調査の経緯.....	1
第2節 調査組織.....	2
第3節 調査日誌.....	2
第4節 検出遺構・遺物の概要.....	3
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境.....	5
第Ⅲ章 基本層序.....	8
第IV章 遺構と遺物.....	11
第1節 整穴住居址.....	11
第2節 挖立柱建物址.....	17
第3節 単独ピット.....	26
第4節 土 坑.....	27
第5節 溝 址.....	41
第6節 グリット・表採・試掘出土遺物.....	50
第V章 総 括.....	51
引用参考文献.....	53・54
付 表.....	55
付 編.....	57
佐久市内遺跡出土黒曜石產地推定結果 沼津工業高等専門学校 望月 明彦.....	57
東五里田出土土器の内容物の調査・分析 (財) 元興寺文化財研究所.....	69

写真図版

挿 図 目 次

第1図 東五里田遺跡位置及び地質図 (1 : 50,000)	1
第2図 東五里田遺跡発掘区設定図 (1 : 10,000)	3
第3図 東五里田遺跡造構配置図 (1 : 2,000)	4
第4図 千山川概念図	5
第5図 周辺遺跡分布図 (1 : 30,000)	7
第6図 基本層序模式図	8
第7図 東五里田遺跡全体図 (1 : 500)	9
第8図 H 1号住居址 (1)	12
第9図 H 1号住居址 (2)	13
第10図 H 1号住居址 (3)	14
第11図 H 2号住居址	16
第12図 F 2・F 3・F 7号掘立柱建物址	20
第13図 F 4・F 5・F 14号掘立柱建物址	21
第14図 F 8・F 9・F 13号掘立柱建物址	22
第15図 F 10・F 12・F 15・F 20号掘立柱建物址	23
第16図 F 1・F 6・F 17号掘立柱建物址	24
第17図 F 16・F 18・F 19・F 21号掘立柱建物址	25
第18図 ピット群 (み～や・27～30グリット) (1 : 125)	26
第19図 単独ピット出土遺物	26
第20図 D 1～D 6・D 12～D 14号土坑	27
第21図 D 7・D 9・D 10号土坑	29
第22図 D 8・D 11号土坑	30
第23図 D 15・D 16号土坑	31
第24図 弥生前期石器実測図 (1)	37
第25図 弥生前期石器実測図 (2)	38
第26図 M 1号溝址 (1)	43
第27図 M 1号溝址 (2)	44
第28図 M 1号溝址 (3)	45
第29図 M 2号溝址	49
第30図 グリッド・表採・試掘出土遺物	50
第31図 積穴住居址と掘立柱建物址の配置	52
第32図 弥生前期遺物分布図 (D 7・D 8号土坑)	54

表 目 次

本文中目次

第1表 周辺遺跡一覧表	6
第2表 H 1号住居址出土遺物一覧表	11
第3表 H 2号住居址出土遺物一覧表	15
第4表 掘立柱建物址出土遺物一覧表	19
第5表 単独ピット出土遺物一覧表	26
第6表 D 2・D 7・D 8・D 11・D 14号土坑出土遺物一覧表	32
第7表 D 16号土坑出土遺物一覧表	33
第8表 東五里田石器觀察表	39
第9表 遺跡別黒曜石産地組成	40
第10表 M 1号溝址出土遺物一覧表	42
第11表 グリッド・表採・試掘出土遺物一覧表	50

付表目次	
竪穴住居址一覧表	55
掘立柱建物址一覧表	55
土坑一覧表	55
溝址一覧表	55
単独ピット一覧表	56

図 版 目 次

卷頭図版一	東五里田遺跡近景
卷頭図版二	東五里田遺跡遠景・東五里田遺跡遠景
卷頭図版三	東五里田遺跡全景
卷頭図版四	東五里田遺跡北側全景・東五里田遺跡南側全景
卷頭図版五	弥生前期上器群
卷頭図版六	弥生前期石器・剥片群
卷頭図版七	H 1 - 1 須恵器壺と内容物
卷頭図版八	M 1 号溝址出土中世陶磁器
卷頭図版九	M 1 号溝址出土近世陶磁器 (1)
卷頭図版十	M 1 号溝址出土近世陶磁器 (2)
卷頭図版十一	M 1 号溝址出土近世陶磁器 (3)
卷頭図版十二	M 1 号溝址出土近世陶磁器 (4)

図版一	H 1 号住居址
図版二	H 2 号住居址
図版三	F 1 ~ F 7 号掘立柱建物址
図版四	F 8 ~ F 15号掘立柱建物址
図版五	F 16 ~ F 21号掘立柱建物址・D 1 - D 2 号土坑
図版六	D 3 ~ D 7 号土坑
図版七	D 8 ~ D 10号土坑
図版八	D 11 ~ D 16号土坑
図版九	M 1 · M 2 号溝址・ピット群
図版十	H 1 · H 2 号住居址出土遺物
図版十一	掘立柱建物址・単独ピット・土坑・溝址出土遺物
図版十二	溝址・グリット・表採・試掘出土遺物

第Ⅰ章 発掘調査の概要

第1節 調査の経緯

東五里田遺跡は佐久市の南部、佐久平の南側にあたる佐久市野沢地区に所在する。千曲川左岸にあり、千曲川により形成された沖積地に立地し、標高673mを測る。

今回、佐久市立野沢中学校管理特別教室棟・普通教室棟・屋内運動場の改築工事が行われ、現在校庭として使用されている地点に建設されることとなり、試掘調査をした。その結果、遺構・遺物が検出され、改築工事により、これらの遺構・遺物の破壊が余儀なく、記録保存を目的とする発掘調査をすることとなった。

調査は、佐久市教育委員会文化財課が実施した。

遺跡名 東五里田（ひがしごりた）遺跡（略号 NHG）

所在地 佐久市大字野沢字東五里田335-1

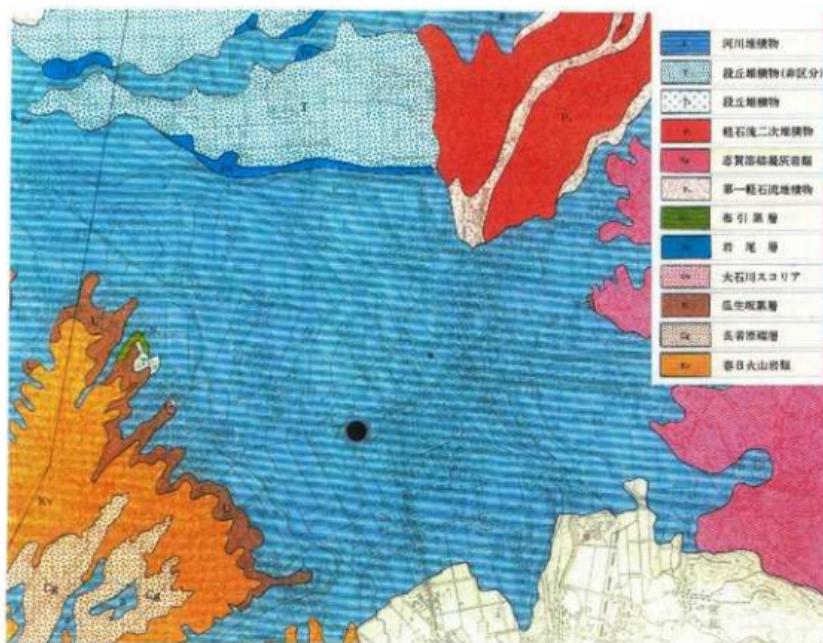
調査原因者 佐久市教育委員会学校教育課

開発事業 野沢中学校管理特別教室棟・普通教室・屋内運動場8700m²の改築工事

発掘調査期間 平成15年2月11日～平成15年4月4日

整理調査期間 平成15年4月～平成16年3月

調査面積 7,586m²（調査対象面積16,940m²）



第1図 東五里田遺跡位置及び地質図（1：50,000）『佐久市志 自然編』より転載

第2節 調査組織

調査主体者 佐久市教育委員会 教育長 高柳 勉
事務局 教育次長 黒沢 俊彦（平成14年度）赤羽根 寿文（平成15年度）
文化財課長 鳩崎 節夫
文化財係長 森角 吉晴（平成14年度）高村 博文（平成15年度）
文化財係 林 幸彦 三石 宗一 須藤 雅司 小林 真寿 富沢 一明 上原 学
山本 秀典（平成14年度）赤羽根 太郎（平成15年度）出澤 力

調査体制

調査担当者 富沢一明 森泉 かよ子

調査副担当者 塙 益子

調査員

浅沼ノブ江	荒井ふみ子	市川 昭	岩下 友子	上原 幸子	柏木 義雄	柏木 真夫
柏原 松枝	木内 節夫	菊池 喜重	神津ツネヨ	小林よしみ	小林百合子	小山 功
桜井 洋倫	佐々木正	佐々木久子	佐藤 爰子	島田 幹子	鷲崎 清一	横濱 勝子
橋詰 信子	中嶋フクジ	中嶋 良造	中條 悅子	成澤 富子	林 美智子	細谷 秀子
堀尾みさと	真嶋 保子	宮川百合子	山村 容子	柳澤千賀子	和久井義男	渡辺 長子

第3節 調査日誌

平成14年度（2003）

- 2月12日 重機により表土剥ぎを開始。
2月13日 標準杭設定開始。
2月25日 本日より調査員により遺構検出作業開始。
2月26日 M1より掘り下げに入る。
3月 3日 標準杭設定。
3月 5日 H1号住居址掘り下げ、順次遺構調査を進める。
3月31日 航空撮影のため本日より3日間清掃作業。



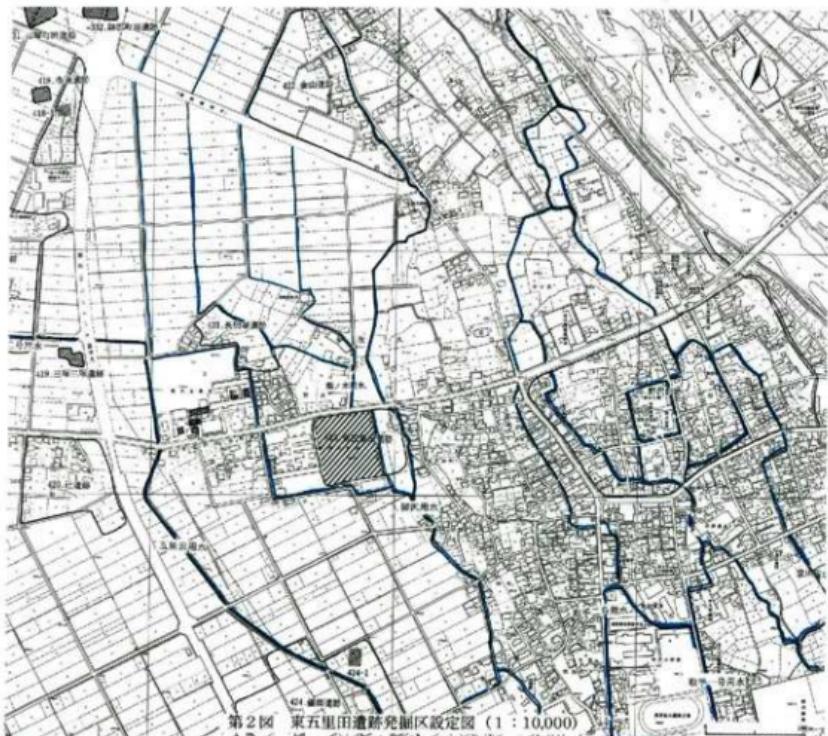
平成15年度（2003～2004）

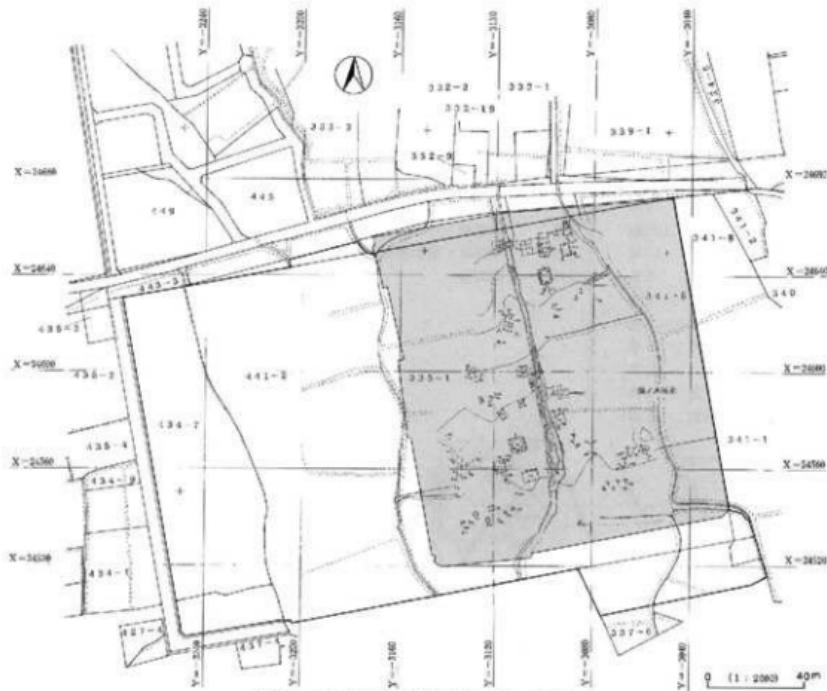
- 4月 3日 ラジコンにより航空撮影。
4月 4日 現場での作業終了。機材撤収。
4月 7日 重機・ダンプにより埋め戻し開始。
4月17日 重機・ダンプによる埋め戻し終了。
4月 7日～12月26日
室内にて整理作業開始。
土器洗浄・注記・図面修正・写真整理・土器接合・
石膏復元・土器実測・石器実測・遺構図トレース・
遺物図トレースを行う。
1月 5日 掘載図作成・掲載写真撮影・報告書の編集・原稿執筆作業開始。
3月31日 報告書を刊行する。



第4節 検出遺構・遺物の概要

遺構	遺物
堅穴住居址	2棟
奈良時代	2棟
掘立柱建物址	21棟
奈良時代	11棟
中世	6棟
不 明	4棟
単独ピット	122個
土坑	16基
弥生前期	5基
奈 良	1基
中 世	1基
不 明	9基
溝	2本
奈 良	1本
中世・近世	1本





第3図 東五里田遺跡遺構配置図 (1 : 2,000)

東五里田遺跡では、縄文時代・弥生時代・奈良時代・中世・近世の遺構・遺物が検出されている。

奈良時代は整穴住居址と掘立柱建物址がある。これらはほぼ同期とみられ、2棟の整穴住居址は大型の住居址である。また周囲には奈良時代に帰属するであろう掘立柱建物址があり、①1間×1間の側柱式、②2間×2間側柱式、③2間×3間側柱式の3種類がある。これらの①～③の掘立柱建物址が大型住居址に併し、大型住居址と数棟の掘立柱建物址がセットで營まれていたようである。

中世・近世では遺跡中央を南北に貫く溝と掘立柱建物址・ピット群がある。溝は流路として中世～近世にかけてのもので、中世の出土遺物には土師質皿・中国産磁器(白磁、青白磁、青磁)・国産の古瀬戸・在地の幅鉢・渡来鉄・板碑があり、遺物の少ない中世としては多くの遺物が出土している。時代は14c～15c頃に集中している。中世に帰属するであろう掘立柱建物址は6棟あり、2ヶ所にまとまった配置から屋敷地であったであろうか。

また、同じ溝からは近世の陶磁器が多量に出土している。近世の遺構は溝とピット群かと推測され、このあたりに近世の人々が居住していたようである。

縄文時代の遺物は前期・中期・後期の土器片、打製石斧・石鏃などである。

本遺跡で注目されたのはD7・D8号土坑上層から弥生前周の土器群と石器類が出土したことである。変形工字文を持つ浅鉢は米II式という小諸市水遺跡を標準とする土器の様式で、弥生時代前期に位置づけされる。遺跡・遺物ともに少ない時期で、本遺跡の資料は混入のない良好なものである。土器とともに出土した石鏡・石鏃など一括の資料として注目される。

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 自然環境

佐久市野沢のこの付近が佐久平のほぼ中心である。この佐久平の中央を南から北へ多くの支流を集めて千曲川が貢流している。

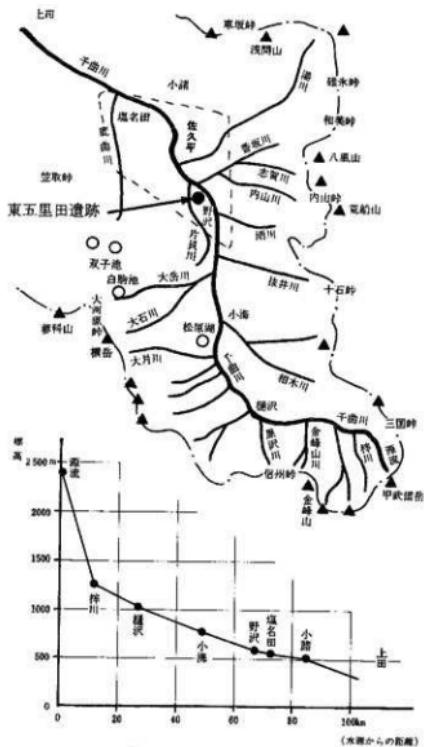
地形構造の上から佐久平は①浅間火山の噴出物の堆積する北東部・小諸・岩村田地域、②佐久山地古期岩層周辺の頸部地域南佐久東半部、③千曲川より西の八ヶ岳蓼科山麓部分の南佐久郡西部と北佐久郡川西地方の浅科村・望月町・立科町地域に大別区分される。その境界は南北で、ほぼ千曲川の流路であり、①と②境界は内山川と志賀川が合流して千曲川に注ぐ滑津川の示している東西線で旧南佐久と北佐久郡の境界の断崖線でもある。(第4図)

③は北佐久郡御牧村、小諸市の一部、望月町、立科町、浅科村、佐久市西部、南佐久郡白田町、佐久町の西半部地域の八ヶ岳蓼科火山山麓地で、火山基盤の集塊岩は佐久平周辺まで到達し、洪積層と合わせて台地状地形を作っている部分もあるが火山溶岩の露出ではなく、山麓傾斜面は厚いローム層に覆われている部分が多い。縄文遺跡が発見されているものもこの段丘台地面で佐久平周辺部は耕作適地土壤に恵まれている。

遺跡はこの千曲川以西、佐久市南部の佐久平中心部に位置し、千曲川本流より、約1km西の冲積地の帶状微高地、自然堤防上にある。標高674.00-673.00を測り、この付近は佐久平中心部の沖積氾濫源の堆積地帯で、自然状態の遺構確認以下の地層は上部から黄褐色の砂質細粒粘土層が40cm内外の厚さで堆積している。この堆積層状態から氾濫静水の沈殿層と観察された。その下部は大小の凹穂を多数に含む砂礫層が観察され、50cm以下は確認することができなかったが数メートルの厚層であることは付近の古井戸から推定される。これらをあわせて堆積状況と大小の凹穂の交差から、長期の洪水氾濫堆積によるものと考えられる。大小の凹穂を岩質別に多いものから列記すると、安山岩・集塊岩(八ヶ岳火山系)・チャート・硬砂岩・砂岩・粘板岩・輝綠凝灰岩・石英閃綠岩・流紋岩・その他(佐久山地古期岩層地帯)であって、量の多い八ヶ岳火山系のものの数が多く大型で、佐久山地のものは小型で数も少ない傾向は佐久市内を流れている千曲川原の現河床とほとんど同率で大差は認められない。(1988白倉『蔚沢』より一部抜粋)

第2節 歴史的環境

今回調査された東五里田遺跡は野沢の市街地の西にあり、中世からの歴史を持つ県史跡の野沢館跡から約600mほど西に当たる。また、この地点は千曲川の左岸にあり、西の山地にいたる間は2kmほどにわたって千曲川氾濫によ



第4図 千曲川概念図
(一部改変して掲載)

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	調査年度	検出遺構・出土遺物等
1	東五里田遺跡	野尻半田山田	平成14年度	本報告書、住居址2(奈良2)、獨立社跡地、土坑、溝
2	前沢跡I・II	豊津字前沢	昭和62年度	住居址6(奈良2・平安4)、土坑4
3	前沢跡	豊津字前沢	昭和65年度	住居址4(奈良1・平安1)、土坑9
4-1	市道遺跡	三塚字市道	昭和69年度	住居址10(大塚1中塚1)・古墳後期7・平安1・不明1)、糞堆遺構5
4-2	市道遺跡II	三塚字市道	平成10年度	住居址5(古墳後期2・奈良3)、獨立社跡地4、土坑10、溝3
5	二千米跡群古墳遺跡	三塚字吉澤	平成11年度	住居址4(古墳中期2・古墳後期1・奈良2)、前方後圓2(中塚)、獨立社跡地1(中塚)、土坑3(内塚1・平安1)、ビット30
6	三千石跡群分離遺跡	三塚字寺地	平成6年度	住居址29(古墳中期3・古墳後期12・奈良3・不明11)、獨立社跡地6、井戸址4(平成2)、土坑3、西塚1
7	二塚跡古墳群	二塚字越田	昭和60年度	住居址4(平安)、土坑3
8	和泉小学校巷地遺跡	三塚字一町田	昭和60年度	住居址7(奈良・平安)、奈良1、墓1(瓶)
9-1	中道遺跡	前山字中道	昭和66年度	住居址7(奈良・平安)、奈良1、墓1(瓶)
9-2	中沢遺跡II	前山字中道	平成11-13年度	住居址17(伴生後期1)・古墳中期3・古墳後期2)
10	野沢細縄繩文・IV	野沢字武屋敷	平成13-14年度	住居址31(中塚・近塚)、井戸址152(山腹・丘陵)、特殊陶器1
11	勝部町古道跡	勝部字平田	平成11年度	12-11勝部町田道跡立と合わせて住居址86(古塚・宇室)
12	勝部町古道跡	勝部字平田	昭和50年度	住居址5(古塚)、土坑2、溝1
13	三塚古川遺跡	三塚字町原	昭和19年度	住居址6(古塚)、製穴式柱構1、土坑、溝
14	上桜井北遺跡	桜井字桜林	昭和27年度	住居址18(古墳・水窪)、糞堆遺構10
15	穂の下遺跡	前山字下	平成2年春	住居址3(繩文後期)、伴生1、中1
16	前山城跡	小宮山字城山・伴野城	中世	住居址5(奈良)、奈良1
17	後沢遺跡	小宮山字後沢	昭和51-52年度	住居址50(繩文前期6・伴生後期35・古墳8・平安1)
18	西裏・竹田峯遺跡	伴野字西裏・伴野字竹田	昭和60年度	住居址26(伴生中期1-後期21・古墳3・奈良1・平安1) ビット 特殊遺構4、周塚3、土坑26、溝7
19	中村遺跡	桜井字中村	昭和57年度	住居址16(繩文中期)、土坑5(繩文・古墳)、溝1
20	興月1号・山陰駆除B遺跡	桜井字興月・山陰駆除	平成4-5年度	住居址5(中塚3・高床廻転1・平安1)、繩文柱構物4、製穴式柱構2、土坑10、溝
21	裕名平・坪の下遺跡群名平遺跡	桜井字樺木・坪の内	平成5-6年度	住居址122(繩文前期12・伴生中期8・伴生後期29・古墳中期10・奈良1・平安63)、 柱構物30(伴生1・古墳3・奈良1・平安12・中世、近世14)、土坑(範文78、伴生15・奈良半径60・中世土壤65)、古墳2基、ほか
22	休石遺跡	伴野字休石	昭和33年度	大墓羣
23	施作道跡	脇原字施作	昭和66年度	住居址6(伴生後期13・古墳・平安47)、獨立柱構物4、土坑15
24	小合ノ遺跡	櫛原字小合	昭和56年度	住居址3(範文1)・奈良1・平安1)、土坑
25	立・遺跡	櫛原字立	昭和56年度	土坑
26	川越古墳	示山字川越	昭和53年度	近世陶器2

て形成された沖積地である。かつて微高地は畠地として耕作されていたが、現在は圃場整備事業により水田とされ、旧の微地形は失われ推測しがたい状況となっている。本遺跡はその沖積地中程にあたり、帶状微高地、自然堤防上の遺跡である。

この自然堤防上に連なる一連の遺跡は、一覧表の2. 薫沢遺跡から14. 上桜井北遺跡まで13遺跡が部分的ながら発掘調査がなされており、その遺跡の概要を類推できるものである。これらの調査で住居址の時代的初見は5. 宮添遺跡に1棟ある古墳前期後平からである。そして間がありて古墳中期後半・古墳後期・奈良・平安時代。そして中世と統いでいる。この沖積地中程から千曲川本流までの間は繩文・弥生・古墳前期前半の住居址は発見されていない。今回、東五里田遺跡からは弥生前期の遺跡が出土し、貴重な資料である。この地点より西の山地に近い9中道遺跡では弥生後期の土器と住居址があり、片貝川沿いには弥生後期の遺跡がみられる。また中道遺跡では古墳中期後業から奈良の住居址もみられ、ここでは昭和46年の調査時に奈良二彩の蓋が出土している。21. 榎名平遺跡からも奈良二彩蓋が出土しており、この三彩の出土地点は、官衙跡・寺院跡・墳墓・祭祀跡・焦塗跡などが多く、それらの遺跡はその地域の中心的地位を持ち得るものや交通の要所にあたる所であることが多いといふ。東五里田遺跡は奈良時代の住居址が2棟あり、すぐ北の薰沢遺跡にも奈良時代の住居址2棟がある。さらに北に統いて市道・宮添・寺添遺跡、南では豊田遺跡と奈良時代の住居址が分布している。

中道遺跡の西を北流する片貝川沿いには古墳・弥生の遺跡の存在が確認されていたが、圃場整備により現在詳細はわからっていない。の中でも貞祥寺の東にある弥生後期の遺物が川土した大門下遺跡が知られている。

千曲川から西に2km地点は低地上に望む段丘台地であり、蓼科山北山麓が利川に浸食され、数多くの谷と尾根が形成され、その尾根や南斜面には遺跡が残されている。低地上に望む台地上部には繩文と弥生の遺跡が多くみられ、ことに弥生後期の集落である17.後沢遺跡、18.西裏・竹田峯遺跡があげられる。後沢遺跡は宅地造成にともない昭和51・52年度に調査され、繩文前期・弥生後期・古墳後期・平安の住居址が発見され、弥生後期の住居址は35棟を数える。その北に続く西裏・竹田峯遺跡では弥生中期から後期の住居址が21棟あり、弥生時代の集落が台地上にみられる。

繩文時代は後沢遺跡で繩文前期の住居址6棟が検出され、南に続く山地では繩文土器を表すことができる遺跡が多い。15. 薫の下遺跡では本遺跡より若干古い弥生前期の水口末から氷ニ式の土器断片と弥生中期前半の土器が出土している。

1000m

第5図 地盤断面図(1:30,000)



五里田遺跡から600m東にある野沢館跡は、鎌倉時代以来伴野氏の居館跡として知られており、昭和40年に『伴野城跡』として長野県史跡に指定されている。平成11年度に薬師寺本堂の改修（野沢館跡Ⅱ）、平成13年度にマンション建設（野沢館跡Ⅲ）、平成14年度には町作り総合支援事業城山公園整備事業（野沢館跡Ⅳ）にともなう造構確認調査が行われた。北東土塁の一部切断により、現状土塁の表面層である昭和51～54年の改修層、その下層は大きく2期にわたる構築層があった。昭和の改修層下の土塁からは中世の遺物である常滑窯、石臼、上鍋片を出土する層があり、さらに下層には土盛りの側壁両側に石積みをしている土塁が残っていた。また南の館跡入り口には土橋が構築され、塙の線は現伴野神社の拝殿前と一致するなどが判明し、土塁外方の基部幅で南北約100m東西80mの長方形プランであることが確認された。出土遺物は室町時代14c以降のものが出土する。

伴野氏は小笠原長清が文治元年（1185）に伴野莊・大井莊の地頭に任命され、六郎時長に伴野莊を知行させたことに始まる。これ以前には野沢氏がすでにこの地に居住し、野沢館が成立されていたと推定されている。13c前半伴野氏は鎌倉の有力御家人として幕府の要職につき活躍していた。弘安8年（1285）の霜月騒動により、領地は一部を除き没収される。建武～正平年間（1335～1353）伴野長房により再興され、大徳寺頼伴野莊を支配する。16.前山城は文明年間（1471～）頃、大沢の荒山城跡が支城として整備された。天文9年（1540）には武田氏の侵入により、伴野氏は武田氏に帰属する。天正10年（1582）依田信蕃により、攻略され、伴野氏は滅亡する。『佐久市志・歴史編』より

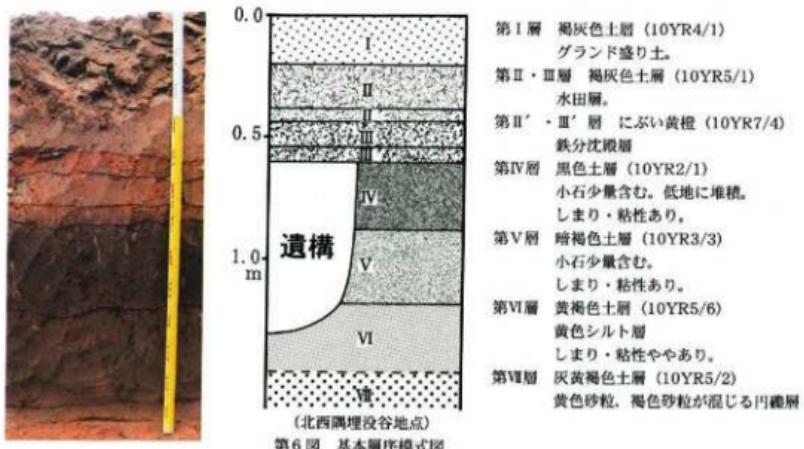
本東五里田遺跡のM1号溝跡から中世の青磁や陶器片が出土している。これらは13～14c頃の龍泉窯系の青磁窯、古瀬戸の陶器であり、伴野氏が再興した室町時代に関連するものであろうか。21.株名平遺跡において同時期の青磁窯が出土しており、鎌倉とのつながりを指摘している。近世・近代の陶磁器がM1号溝跡と重なる暗渠から出土しており、近代まで集落が周囲にあったことが窺える。

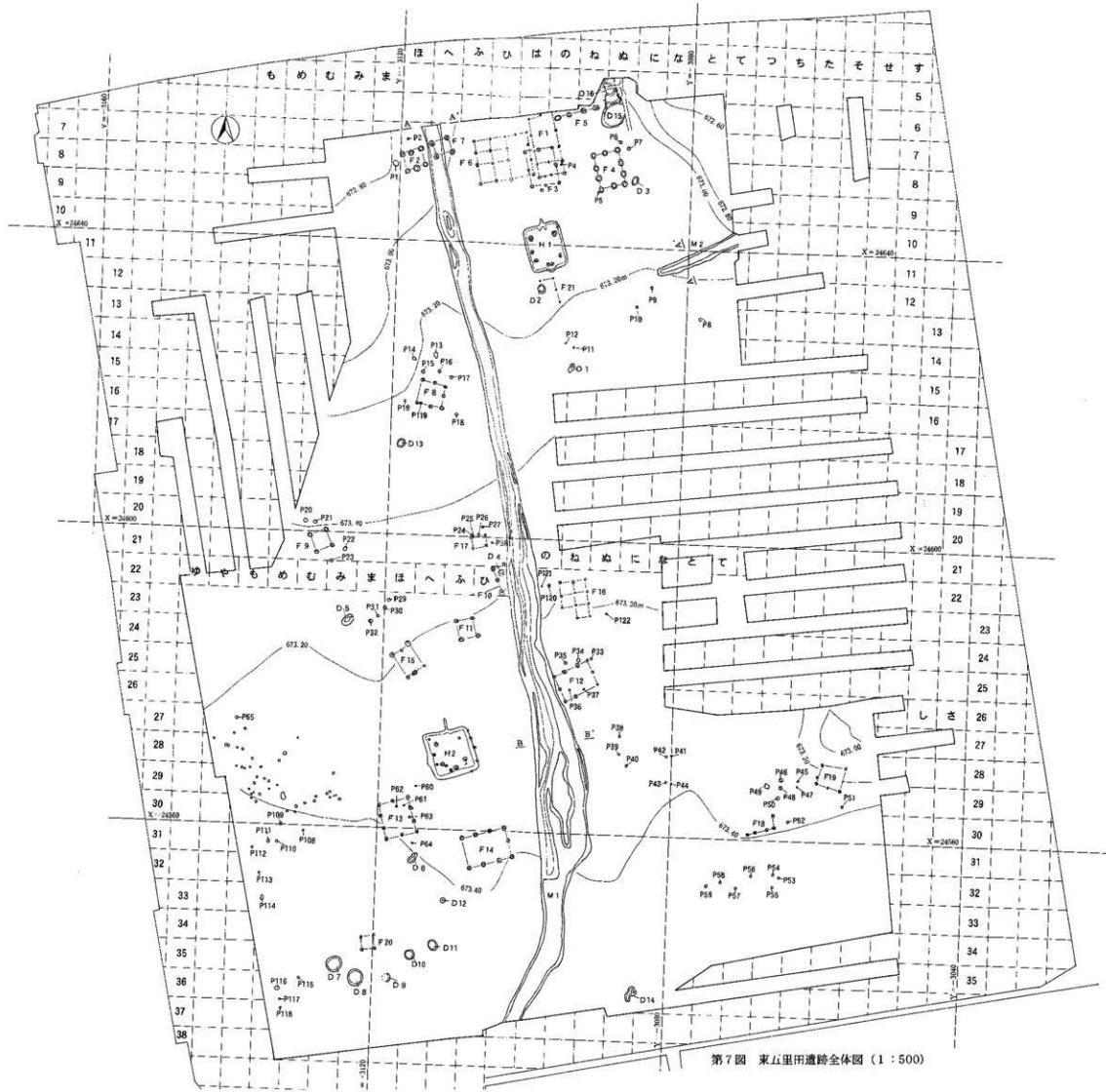
第III章 基本層序

東五里田遺跡は千曲川の左岸、片貝川と千曲川に挟まれた中間地点に位置している。調査区の検出面の標高は674.00～672.80mと北東に向かって標高を下げている。北東方向に台地が張り出し、調査区北西側は谷が入り込んでいる。

造構検出面は第VI層黄色シルト層であり、低い所では暗褐色土層の堆積がみられた。しかし千曲川氾濫原であるため、黄色シルトなどの堆積がないまま円礫層となる地点もある。上面水田耕作層は、図示したように2回にわたる水田が構築されている所と、一面の所とがあり、その上に校庭グランド盛り土がみられた。

造構は第IV層黒色土層・第V層暗褐色土層、大半は第VI層黄色シルト層を切り込んで構築されている。





第7図 東みづか遺跡全体図 (1:500)

第IV章 遺構と遺物

第1節 積穴住居址

1) H1号住居址 (第8-9図、巻頭図版七・四版) · · ·

調査区の北側の10グリッドで検出された。南北長572cm、東西長478cmの長方形を呈し、北側にカマド、南側には44cmの出入り口の張り出しを持つ。床面積は27.3m²を測る。カマドは北壁中央にあり、主軸方位はN-18°-Wを指し、西に傾いている。

カマドは川原石を芯材として両袖と煙道入り口に置き、黄色シルトを含む粘質土で固めている。カマド河床部には焼土範囲がみられ、西側の支脚石が使用状態で残り、東は痕跡のビットがあった。煙道部が84cmほど北壁から突出している。

主柱穴はP 1~P 4の四本とみられ、P 1・P 2は径60~72cmの円形壙方ビットの中に径16~20cm、深さ21~32cmの柱痕がある。P 1は底面に根石が置かれていた。南のP 3・P 4はやや規模が小さく径44~52cm、深さ38cmの壙方に、わずかに柱痕がみられる。南北間にあるP 5・P 6は補助的なビットであろう。南側中央には径32cm、深さ8~24cmの円形を呈す出入り口のビットがある。壁下には周溝が巡り、床面は堅緻である。堤方は壁側が深く掘り込まれ中央部が高い。ことに北側で顕著である。

遺物の分布はカマドから11・13・16の土師器甕、カマド東脇から9の小型甕、北東隅から10の土師器小型甕が出土している。この小型甕は底部が欠損したものを正位に置いて再利用していた。南出入り口からは1の須恵器短縦甕、2・4の須恵器杯、14の土師器甕が出土している。

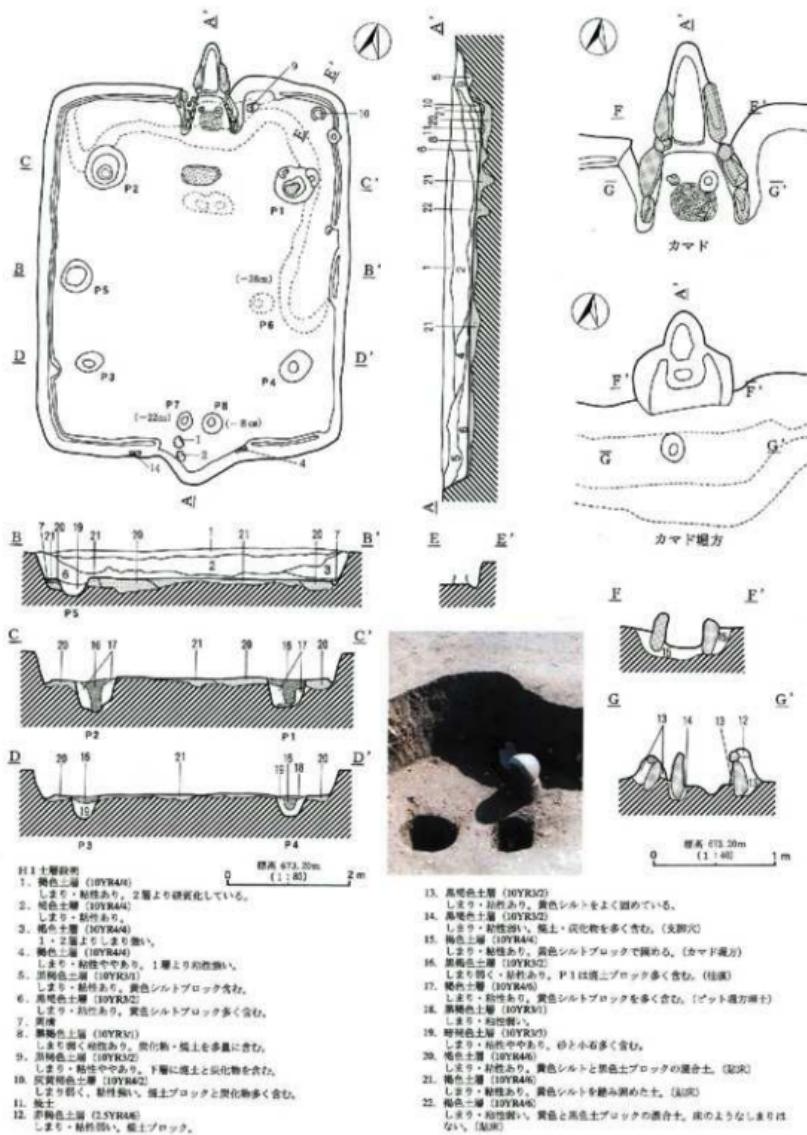
出土遺物には須恵器甕・壺・杯、土師器杯・小型甕・壺、スリ石、編物石がある。混入品として、繩文土器片がある。繩文前期の有尾・黒底式であろうか。1は須恵器の短縦甕で有機物を含む内容物が残されていた。2~5の須恵器甕は底部が丸みのある半底で、2はヘラケズリされ、他是ハラ切り離しの後わずかなヘラナデでヘラ切り痕が残る。須恵器甕は口縁が強く外反する器形であろうか。19は小形の甕で高台はハの字を呈し、高台外側が底に接続している。38の柄本に示したものは外周平行タキ、内面にハケ目が残る。横瓶であろうか。7の土師器杯の外面は口縁部横ナナメ、底部ヘラケズリされ、丸底を呈すようである。土師器小型甕は9・10の厚みのあるものと、8の薄手のものがある。土師器甕は11~15・17が武藏甕で口縁部形状はいずれも「く」字形を呈し、肩上部外面は斜方角のヘラケズリがなされる。16の土師器甕は口縁部が強く外反し、胴部外面が縦方向にヘラケズリされる。占墳後期の様相を持つ厚手の甕破片である。

これらより本住居址は奈良時代に歸属するであろうか。1の須恵器甕の内容物については後出する付録「東五里田出土土器の内容物の調査・分析」を参照されたい。

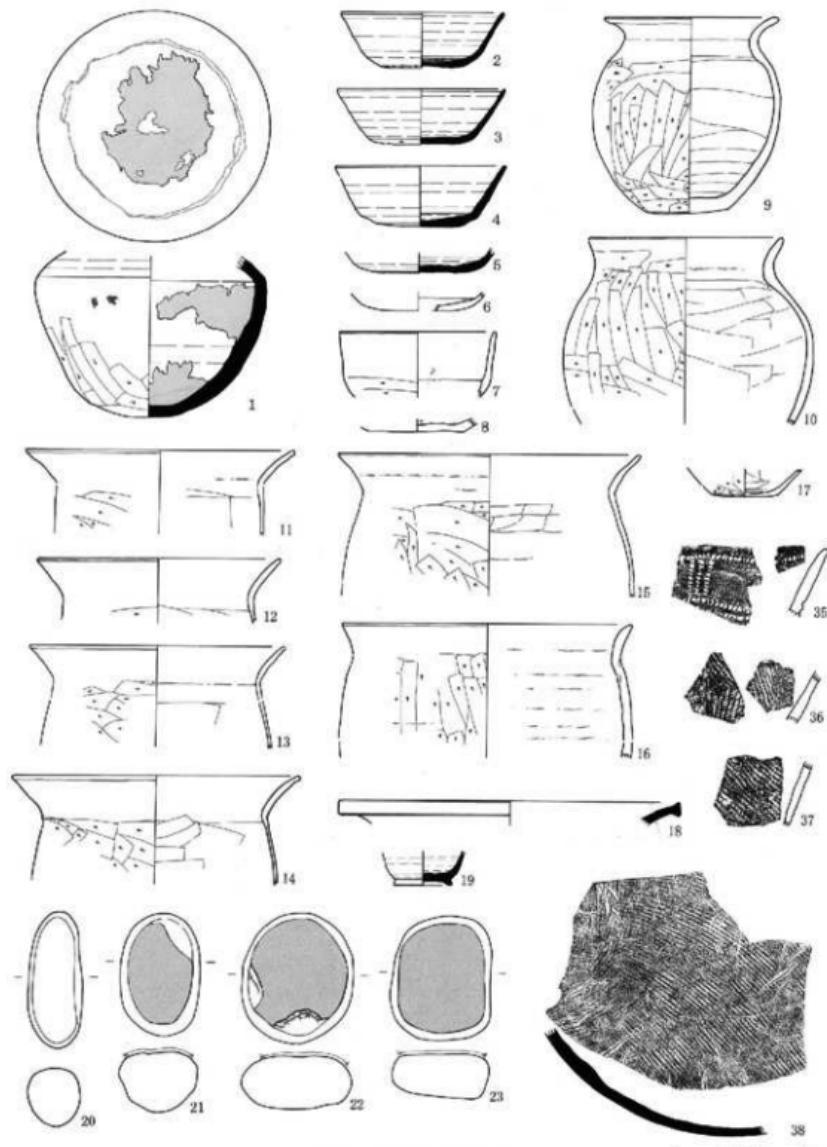
第2表 H1号住居址出土遺物一覧表

()内定・(-)既設、法規は上から口徑・类型・層高

番号	遺構	法規	内 容	寸 寸 寸 寸 寸		記述・形 状・性 質	断面・他 特徴	出土位置
				径	厚			
1	須恵器 甕	(13.7)	口クロナナメ 内青物付 引削頭付	16(4.5) 11(5.1)	2.5(6.6) 2.2(5.5)	ヘラナデ・斜面下剥離	縦石+1mm以下の長石・黒色含む	N.4
2	須恵器 杯	(8.6)	口クロナナメ 丸底	13(4.4) 15(4.6)	1.5(6.6) 1.5(6.0)	ヘラナデ・斜面下剥離	縦石+1mm以下の長石・黒色含む	N.3
3	須恵器 甕	(6.8)	口クロナナメ 丸底	13(4.8) 14(5.2)	1.5(6.1) 1.5(6.1)	ヘラナデ・斜面下剥離	縦石+1mm以下の長石・黒色含む	カマド I区北端 II・III区
4	須恵器 杯	(7.3)	口クロナナメ 丸底	13(6.9) 14(6.8)	1.5(7.1) 1.5(6.8)	ヘラナデ・斜面下剥離	縦石+1mm以下の長石・黒色含む	N.7~IVK
5	須恵器 甕	(8.0)	口クロナナメ 丸底	13(7.2) (2.2)	1.5(7.1) 1.5(7.1)	ヘラナデ・斜面下剥離	縦石+1mm以下の長石・黒色含む	III区
6	土師器 杯	(6.2)	口クロナナメ 丸底	13(7.5) (1.6)	1.5(7.1) 1.5(7.1)	ヘラナデ・斜面下剥離	縦石+1mm以下の長石・黒色含む	P.1
7	土師器 甕	(5.4)	口クロナナメ 丸底	13(7.8) (2.0)	1.5(7.4) 1.5(7.4)	ヘラナデ・斜面下剥離	縦石+1mm以下の長石・黒色含む	III区 IV区南端



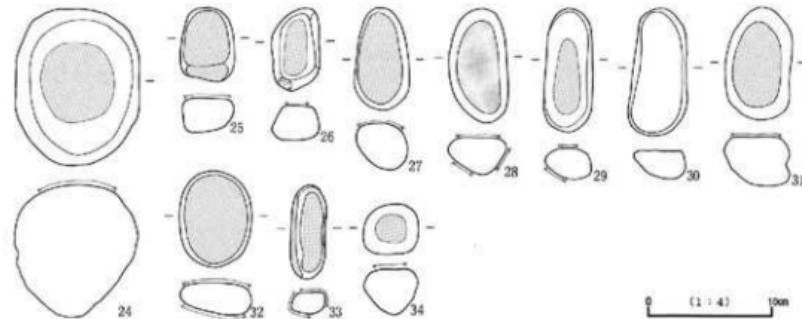
第8図 H1号住居址 (1)



第9図 H1号住居址(2)

-13-

0 (1:4) 10mm



第10図 H1号住居址 (3)

番号	土加厚 小型便	ヘラナナ(黒丸)	制御・底層ヘラナナ(黒丸)	1mmの石英・黑色粒子・赤色粒子を含み、0.5mmの長石少量 含む。 底部均存	IV区
8	7.6 (1.1)	17.4 (6.6) - (16.3)	17.4 (6.6) - (16.3)	17.4 (6.6) - (16.3)	17.4 (6.6) - (16.3)
9	14.4 (6.6) - (16.3)	17.5 (7.5) - (15.3)	17.5 (7.5) - (15.3)	17.5 (7.5) - (15.3)	17.5 (7.5) - (15.3)
10	16.1 (15.3) (22.2)	17.5 (7.5) - (15.3)	17.5 (7.5) - (15.3)	17.5 (7.5) - (15.3)	17.5 (7.5) - (15.3)
11	ナメル 裏	17.9 (2.5) - (7.5)	17.9 (2.5) - (7.5)	17.9 (2.5) - (7.5)	17.9 (2.5) - (7.5)
12	土加厚 裏	20.0 (5.4)	17.5 (5.4)	17.5 (5.4)	17.5 (5.4)
13	土加厚 裏	21.1 (8.3)	17.5 (8.3)	17.5 (8.3)	17.5 (8.3)
14	ナメル 裏	23.6 (9.0) (24.9)	17.5 (7.5) - (7.5)	17.5 (7.5) - (7.5)	17.5 (7.5) - (7.5)
15	ナメル 裏	23.8 (11.9)	17.5 (5.4)	17.5 (5.4)	17.5 (5.4)
16	土加厚 裏	23.8 (11.1)	17.5 (7.5) - (7.5)	17.5 (7.5) - (7.5)	17.5 (7.5) - (7.5)
17	ナメル 裏	2.4 (2.3)	17.5 (5.4)	17.5 (5.4)	17.5 (5.4)
18	表面 裏	28.0 (1.9)	ロクナナ - (4.8)	ロクナナ - 自然無着付	ロクナナ - 自然無着付
番号	種類 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
20	動物石	11.2	4.5	4.9	340 宝山石・スリ面3-上面に打痕あり 全体に剥離するが剥落ではない。
31	動物石	10.1	6.6	5.0	460 宝山石・スリ面1-切妻なし II区
22	スリ石	10.7	9.1	4.3	180 宝山石・スリ面1-表面に打痕なし IV区
23	動物石	10.3	8.3	3.7	590 宝山石・スリ面1-上面に打痕あり 動物石に貼る。 I区
24	スリ石	12.9	10.3	10.9	1200 宝山石・スリ面1-打痕上端にあり 動物石に貼る。 IV区
25	動物石	9.0	4.5	2.9	120 神砂石・スリ面1-切妻なし IV区
26	動物石	6.7	4.1	2.8	113 神砂石・スリ面1-表面に打痕あり IV区
27	動物石	8.4	4.5	3.8	190 宝山石・スリ面2-打痕なし 動物石に貼る。 IV区
28	動物石	9.3	5.0	3.0	180 宝山石・スリ面2-打痕あり IV区
29	動物石	10.3	4.1	2.8	179 神砂石・スリ面2-打痕あり スリ面剥離。 IV区
30	動物石	10.1	4.9	2.8	179 チャート・全体に剥離 IV区
31	動物石	9.3	5.6	4.0	280 宝山石・スリ面1-打痕なし IV区
32	スリ石	8.0	5.9	2.7	150 宝山石・スリ面2-打痕なし IV区
33	動物石	7.8	3.0	1.8	70 チャート・スリ面3-前面に打痕あり IV区
34	スリ石	4.2	4.5	3.3	110 宝山石・スリ面2-打痕なし IV区

2) H 2 号住居址 (第11図、図版二・十)

測量は南北、ふたグリットにあり、南北580cm、東西565cmの方形を呈す住居址である。壁残高は32~44cm、床面積は32.8m²を測る。カマドは北壁にあり、主軸方位はN-20°-Wで西に振れる。カマドは両袖基部と煙道が残されていたが袖・天井部は崩壊していた。煙道は幅24~26cm、長さ164cmを測り細長く水平にのびている。

主柱穴はP 1 ~ P 4 の4木で、柱穴は堀方を埋め、再構築している。柱穴はほぼ円形で径44~56cm、深さ24~40cmを測る。柱痕は径が大きく浅い。堀方で当初に掘り込んだ柱穴の径は52~64cm、深さは床面から34~52cm掘られている。南壁下中央には径48cm、深さ32cmの円形ピットがある。また壁際にはP 8 ~ 14の円形の小ピットがみられ、径20~22cm、深さ4~14cmを測る。南東の周溝内にはP 19 ~ P 23の小ピット、東西の壁際にもP 24 ~ P 31の小ピットが検出されている。堀方ではP 6・P 7が検出される。

壁下には削溝が巡り、床は締まっていた。

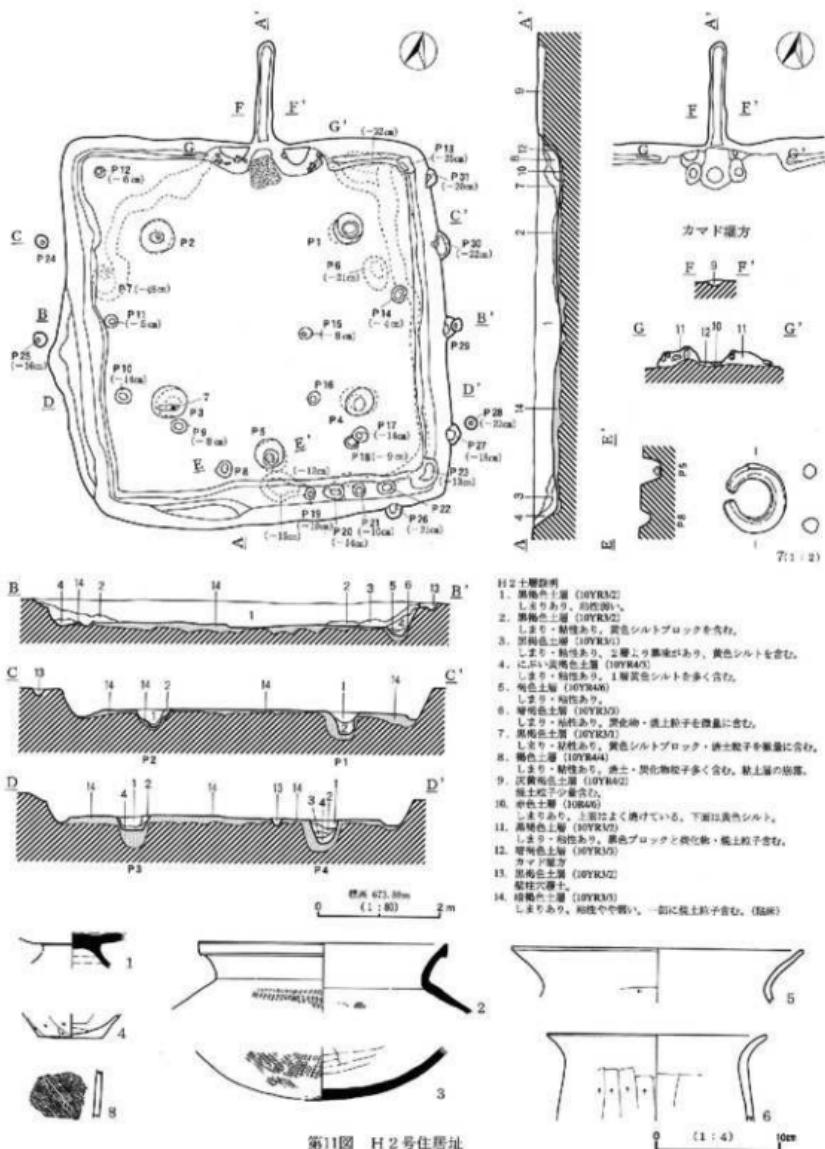
出土遺物はカマド及びカマド付近からは2・3の須恵器甕、4・5の土師器甕が出土し、1の須恵器高杯は南東区より出土している。7の金環はP 3上面で出土した。遺物はぜんたいに少ない。

本住居址より、出土した遺物は須恵器高杯・甕、土師器甕、弥生前期土器片、銅製金環である。1の須恵器高杯は丸底に外反する脚が付いている。2・3の須恵器甕は同一個体であろう。比較的薄手の作りで口縁は外反し端部は口縁帯を作っている。外面肩部には平行タタキ目が施され、内面はナデ調整される。4・5の土師器甕は武藏甕で、5のII縁部形態は「く」字形を呈す。6の土師甕は口縁部が短く外反するもので、副部外面は縦にヘラケズリされる。金環は腐食が激しく、表面に金箔はみられない。長さ2.9cm厚さ0.5cmを測る。

これらより本址は奈良時代の住居址であろうか

第3表 H 2 号住居址出土遺物一覧表

番号	種類	法蓋	内 成形・調査 面	外 色調 面	() 検定・() 残量、法蓋は上から口径・底径・高さ		出土位置
					地 盤 上 部 ・ 中 部 ・ 下 部	地 盤 下 部 ・ 地 盤 上 部 ・ 地 盤 下 部	
1	須恵器 高杯	-	イクリナデ (2.9)	ロクロナダ 灰白色(N 7/0)	掘台央・1mm以下(?)抜け、黒色粒子含む。 底径1/4残存		IV区
2	須恵器 甕	(20.4)	口縁部幅ナダ・底部あ口による 押さえ端情ナダ (5.8)	灰白色(N 7/1) 灰白色(N 7/0)	細石英・0.5mmの長石・黑色粒子を含む。 口縁2/11残存		II区
3	須恵器 甕	-	ヘラナデ (5.4)	タタキ目 灰白色(Y 6/1)	細石英・1mm以下の長石・黑色粒子・褐色粒子含む。 底径1/4残存		I区
4	土師器 甕	(5.2)	ヘルナナデ (2.0)	調脈・底部ヘラケズリ にぶい焼(5 YR 7/4)	細石英・0.5mm以下の長石を含む。 底部完全		カマド
5	土師器 甕	(24.0)	口縁部幅ナダ (4.9)	口縁部幅ナダ・底部ヘラケズリ 焼色(5 YR 7/6)	細石英・0.5mm以下の長石・1mmの赤色粒子 黑色粒子含む。 底径1/4残存		カマド株 II・III区 II盛墳方
6	土師器 甕	-	(18.0)	口縁部幅ナダ・底部ヘラナダ (7.1)	焼色(5 YR 7/6) 口縁部幅ナダ・底部ヘラケズリ にぶい焼色(7.5 YR 7/4)	1mm以下の石英・長石・黑色粒子・赤色粒子含む。 底径1/6残存	I区
7	種類	法蓋	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	出土地點
7	金環	2.9	2.6	0.6	10.5	金剛石、鏡により表面の全見えない。	No.1



第11図 H2号住居址

第2節 挖立柱建物址

1) F 1号掘立柱建物址（第15図、図版二）

の6グリットにあり、4間×2間の南北棟で、間仕切柱の付く側柱式である。東西340cm南北824cmを測り、長方形を呈す。長軸方位はN-13°-Wを指す。桁行き柱間224cm、梁間柱間は170cmを測る。柱穴はほぼ円形を呈し、径16~36cm、深さ8~38cmを測る。小規模なピットで構成される。

出土遺物はないが覆土・規模から中世または以降と推測される。

2) F 2号掘立柱建物址（第12図、図版二）

は7グリットにあり、2間×1間の東西棟で側柱式である。東西272cm南北264cmの方形である。長軸方位N-71°-Eを指す。桁行き柱間136cm、梁間柱間264cmを測る。柱穴は円形を呈し、短径64~70cm、深さ35~63cmを測る。

出土遺物はないが覆土が黒褐色を呈し、規模・覆土などから奈良またはそれ以前であろうと推測される。

3) F 3号掘立柱建物址（第12図、図版三・十一）

の7グリットにあり、2間×2間の南北棟で側柱式である。東西376cm南北492cmの長方形である。長軸方位N-13°-Wを指す。桁行き柱間246cm、梁間柱間188cmを測る。柱穴は円形ないし梢円形を呈し、短径30~46cm、深さ17~57cmを測る。

出土遺物は、P 5から武藏妻胸部破片、P 6上部から須恵器高台付杯が出上している。1の須恵器高台付杯は器高が低く、杯底部は回転ヘラケズリ後低いハの字の高台が付く。

これらより本址は奈良時代であろう。

4) F 4号掘立柱建物址（第13図、図版三）

は7グリットにあり、3間×2間の南北棟で側柱式である。東西344cm、南北480cmの長方形を呈する。長軸方位はN-15°-Wを指す。桁行き柱間152cm、梁間柱間は172cmを測る。柱穴は円形基調で、径56cm~67cm、深さ32~51cmを測る。

出土遺物はないが覆土・規模などから奈良時代であろう。

5) F 5号掘立柱建物址（第13図、図版二）

は6グリットにあり、3間×1の東西棟であろうが北は調査区域外であるため全容はわからない。東西576cmの長方形を呈すと推測され、長軸方位はN-74°-Eを指す。桁行き柱間は180cmと中央間216cmを測り、中央が広くなっている。柱穴は円形を呈し、径40~62cm、深さ32~65cmを測る。

出土遺物はない。奈良時代であろう。

6) F 6号掘立柱建物址（第16図、図版三）

は7グリットにあり、4間×3間の総柱式である。東西744cm南北588cmの東西棟で長軸方位はN-78°-Eを指す。桁行き柱間156・216cm、梁間柱間164・260cmを測る。柱穴は円形を呈し規模はさまざまである。径10~37cm、深さ5~52cmを測る。

出土遺物はないが覆土・規模などから中世または以降であろう。

7) F 7号掘立柱建物址（第12図、図版三）

は7グリットにあり、M 1号溝址に西側の柱列上部が切られている。1間×1間の方形で東西にいくらか長く、長軸方位はN-68°-Eを指す。桁行き柱間220cm梁間柱間204cmを測る。柱穴は円形基調で、径54~65cm、深さ33~63cmを測る。

出土遺物はないが覆土規模より、奈良時代であろう。

8) F 8号掘立柱建物址（第14図、図版四）

へ15グリットにあり、2間×2間の側柱式の東西棟で、長軸方位はN-81°-Wを指す。東西336cm、南北320cmの方形で、桁行き柱間168cm梁間柱間160cmを測る。柱穴は円形基調で、径32~48cm、深さ16~37cmを測る。

出土遺物はない。

9) F 9号掘立柱建物址 (第14図、図版四)

む20グリットにあり、1間×1間で南北にいくらか長く、長軸方位はN-23°-Wを指す。桁行き柱間240cm梁間柱間232cmを測る。柱穴は円形基調で、径46~54cm、深さ15~24cmを測る。

出土遺物はないが覆土・規模より、奈良時代であろうか。

10) F 10号掘立柱建物址 (第15図、図版四)

は21グリットにあり、M 1号溝址に東側の柱列が切られ、検出できなかったため全容はわからない。2間×(1)間の南北棟で、軸方位はN-26°-Wを指す。桁行き柱間176cm梁間柱間156cmを測る。柱穴は円形基調で、径40~56cm、深さ22~35cmを測る。

出土遺物はないが覆土に黒褐色土が入り、規模からも、奈良時代であろうか。

11) F 11号掘立柱建物址 (第15図、図版四)

ひ23グリットにあり、1間×1間で東西にいくらか長く、長軸方位はN-72°-Eを指す。桁行き柱間268cm梁間柱間256cmを測る。柱穴は円形基調で、径48~60cm、深さ25~31cmを測る。

出土遺物はないが覆土は黒褐色土で、規模より、奈良時代であろうか。

12) F 12号掘立柱建物址 (第15図、図版四)

ぬ25グリットにあり、3間×2間の側柱式の東西棟で、長軸方位はN-62°-Eを指す。東西504cm南北360cmの長方形を呈し、桁行き柱間168cm梁間柱間180cmを測る。柱穴は円形基調で、径24~42cm、深さ4~31cmを測る。出土遺物はないが覆土は黒褐色土で、規模より、奈良時代であろうか。

13) F 13号掘立柱建物址 (第14図、図版四)

へ29グリットにあり、3間×2間の側柱式の南北棟で、長軸方位はN-17°-Wを指す。東西480cm、南北416cmの長方形を呈し、桁行き柱間148~184cmで、桁行き中央は幅が広い。梁間柱間は208cmを測る。柱穴は円形基調で、径32~46cm、深さ5~47cmを測る。

出土遺物はP 10より古墳時代後期または次期の胴部外面ハケナデ(桟目)の壊破片が出している。覆土は黒褐色土で、規模などより、奈良時代であろうか。

14) F 14号掘立柱建物址 (第13図、図版四)

は30グリットにあり、3間×2間の側柱式の東西棟で、長軸方位はN-75°-Eを指す。東西600cm、南北416cmの長方形を呈し、桁行き柱間200cm、梁間柱間は208cmを測る。西側列の中央柱穴は検出できなかった。柱穴は円形基調で、径37~51cm、深さ4~16cmを測る。

出土遺物はないが、覆土は黒褐色土で、規模などより、奈良時代であろうか。

15) F 15号掘立柱建物址 (第15図、図版四)

ほ24グリットにあり、1間×2間の側柱式南北棟で、長軸方位はN-38°-Wを指す。東西264cm、南北372cmの長方形を呈し、桁行き柱間372cm、梁間柱間は132cmを測る。柱穴は円形基調で、径30~58cm、深さ9~37cmを測る。

出土遺物はないが、覆土は黒褐色土で、規模などから奈良時代であろうか。

16) F 16号掘立柱建物址 (第16図、図版五)

ね22グリットにあり、3間×2間の総柱式の南北棟で、長軸方位はN-9°-Wを指す。東西360cm、南北492cmの長方形を呈し、桁行き柱間154cm、梁間柱間は180cmを測る。柱穴は円形基調で、径13~28cm、深さ17~37cmを測る。

出土遺物はないが覆土は黒褐色土で、規模などより、中世であろうか。

1 7) F 17号掘立柱建物址 (第16図、図版五)

ひ20グリットにあり、1間×1間の東西棟で、長軸方位はN-75°-Eを指す。東西192cm、南北142cmの長方形を呈す。柱穴は円形基調で、径20~26cm、深さ8~18cmを測る。

出土遺物はないが、覆土は黒褐色土で褐灰色ブロックを含み、規模などにより、中世であろうか。

1 8) F 18号掘立柱建物址 (第17図、図版五)

ち30グリットにあり、3間×(1)間の東西棟であろうと思われるが検出時に北側は削平されたのか全容はあきらかでない。長軸方位はN-76°-Eを指す。東西384cmを測り長方形を呈すものと思われ、桁行き柱間112・160cmで、桁行き中央は幅が広い。梁間柱間は172cmを測る。柱穴は円形基調で、径29~40cm、深さ3~21cmを測る。

出土遺物はないが、覆土は黒褐色土で褐灰色ブロックを含み、規模などにより、中世であろうか。

1 9) F 19号掘立柱建物址 (第17図、図版五・十一)

そ28グリットにあり、2間×1間であろうと思われるが検出時に削平されたのか全容はあきらかでない。長軸方位はN-73°-Wを指す。東西336cm、南北324cmを測り方形を呈すものと思われ、桁行き柱間168cmを測る。柱穴は円形基調で、径20~27cm、深さ7~18cmを測る。

出土遺物はP 1より内外面に火燐のある須恵器杯片が、出土する。しかし覆土は黒褐色上で褐灰色ブロックを含み、規模などにより、中世であろうか。

2 0) F 20号掘立柱建物址 (第15図、図版五)

ほ34グリットにあり、1間×1間、軸方位はN-81°-Eを指す。東西168cm、南北164cmを測り、方形を呈す。柱穴は円形基調で、径15~24cm、深さ8~22cmを測る。

出土遺物はなく、覆土は黒褐色土で、規模はF 11より小規模で、時期不明である。

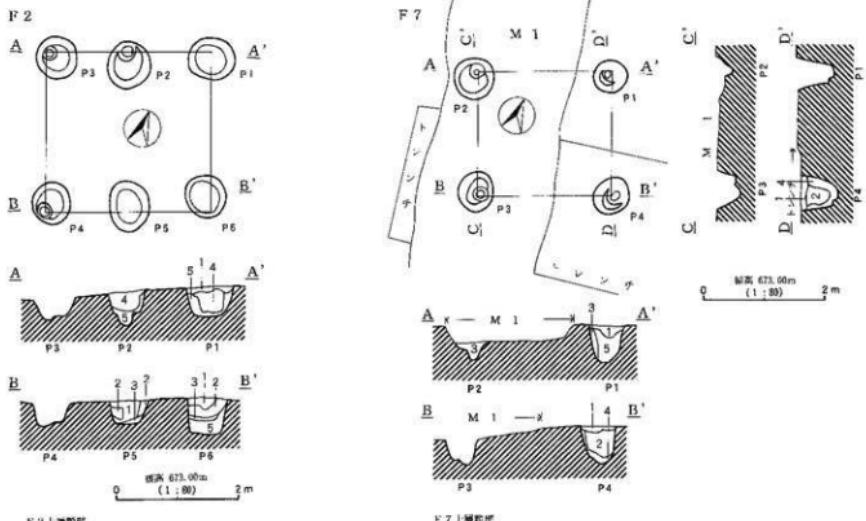
2 1) F 21号掘立柱建物址 (第17図、図版五)

の12グリットにあり、2間×(1)間が検出されたのみで全容は明らかでない。長軸方位はN-16°-Wを指す。南北336cmを測り、桁間柱間168cmで、梁行き柱間は206cmを測る。柱穴は円形基調で、径12~17cm、深さ5~13cmを測る。

出土遺物はないが、覆土は黒褐色土で、規模などにより、中世であろうか。

第4表 掘立柱建物址出土遺物一覧表

番号	種類	法量	成 型・調 整・色 調		（）推定・（）残量・法量は「から口算・底径・面高」	出土位置
			内 面	外 面		
1	須恵器 高台付杯	(14, 9) (10, 9) 3. 8	ロクロナデ 灰色(N 6 / 0)	ロクロナデ→泥瓦切り廻し後 回転ヘラケズリ→高台貼付 灰色(N 6 / 0)	粘土質・1mm以下の中灰・黑色粒子・4mm以下の黄色粒子 含む。 1 / 4塊①	F 3 P 6
2	須恵器 杯	(7, 8) (2, 1)	ロクロナデ 灰色(N 6 / 0)	ロクロナデ 灰色(N 6 / 0)	粘石質・0.5mmの良石・黑色粒子を含む。 火燐あり 底部1 / 8块①	F 19 P 1



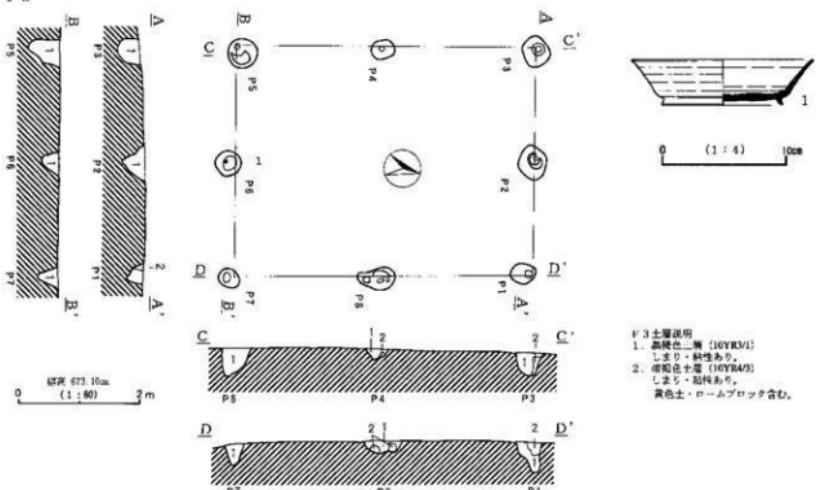
F 2 土層記号

- 褐色土二層 (IOYR3/3)
しまりややあり。P2であり。黄色シルトブロック含む。
- 褐色土層 (IOYR4/6)
しまり強く、粘性あり。褐色土ブロック含む。
- にぶい黃褐色土層 (IOYR4/3)
しまり・粘性弱い。黄色シルトブロック含む。
- 褐色土層 (IOYR4/2)
しまり・粘性弱い。黄色シルトブロック含む。
- 武夷色土層 (IOYR5/5)
しまり・粘性弱い。黄色シルトを含む。

F 7 土層記号

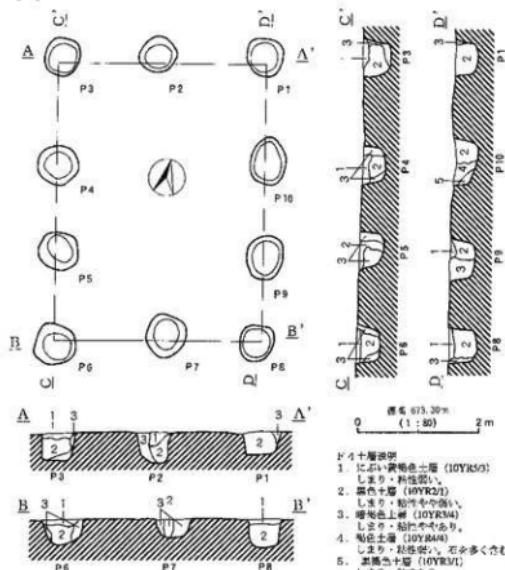
- 褐色色土層 (IOYR3/3)
しまりややあら、粘性弱い。黄色シルトブロック含む。
- 褐色土層 (IOYR4/6)
しまり強く、粘性あり。褐色土ブロック含む。
- 青褐色二層 (IOYR5/6)
しまり・粘性弱い。黄色シルトを含む。
- 灰褐色土層 (IOYR5/2)
しまり・粘性弱い。黄色シルトより黒味がある。
- 基壇色土層 (IOYR3/2)
しまり・粘性あり。黄色シルトブロックを含む。1層よりやや黒い。

F 3

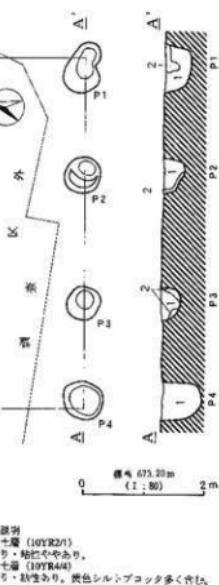


第12図 F 2・F 3・F 7号掘立柱建物址

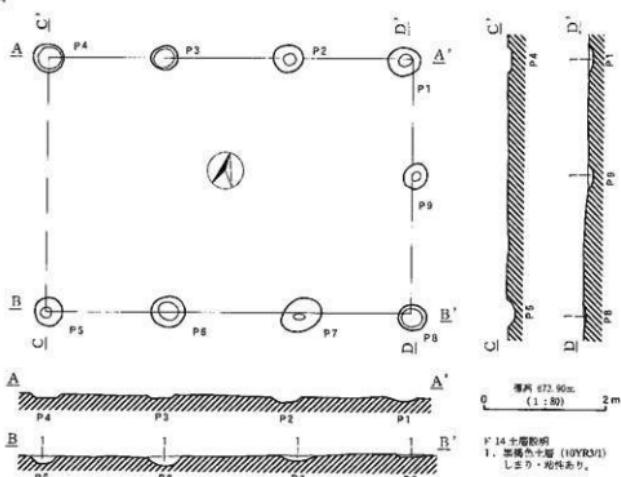
F 4



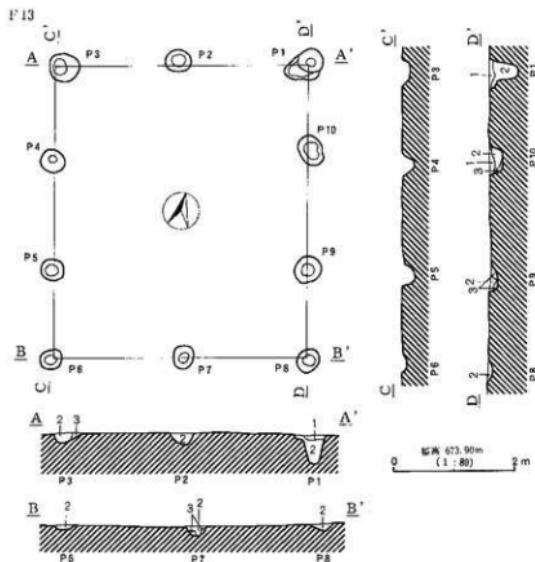
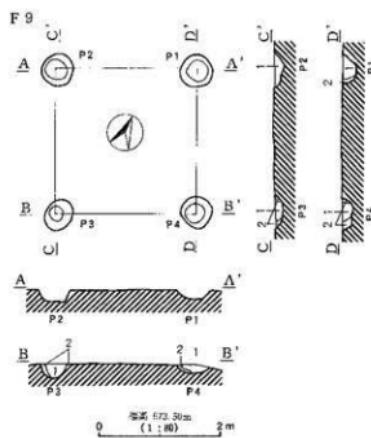
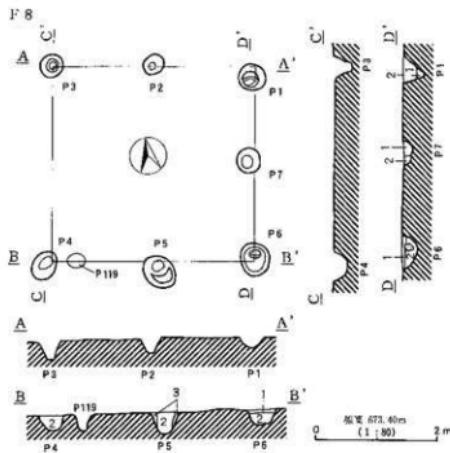
F 5



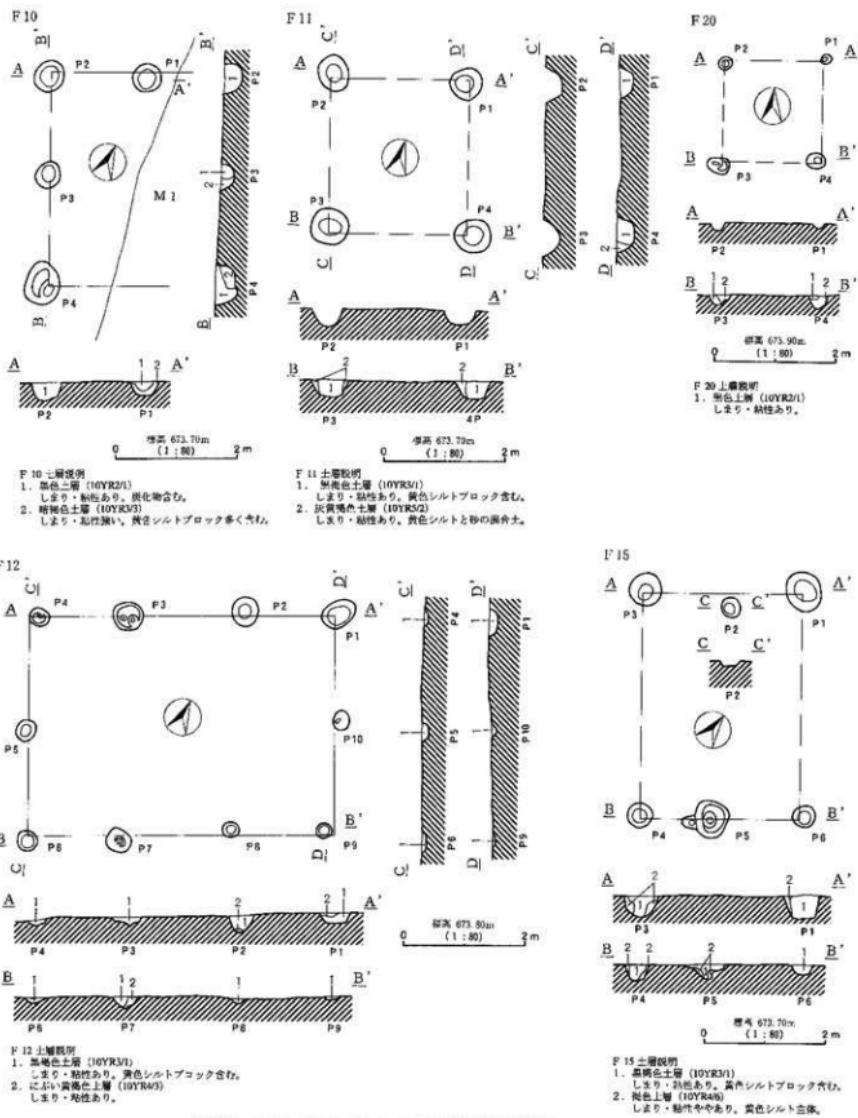
F 14



第13図 F 4・F 5・F 14号掘立柱建物址

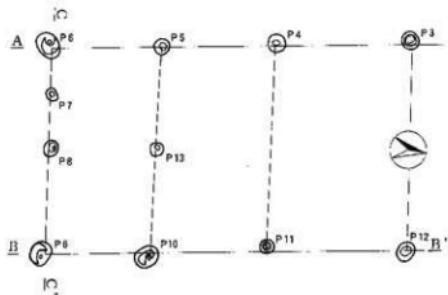


第14図 F 8・F 9・F 13号掘立柱跡物址

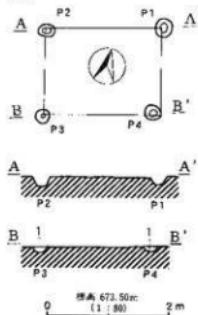
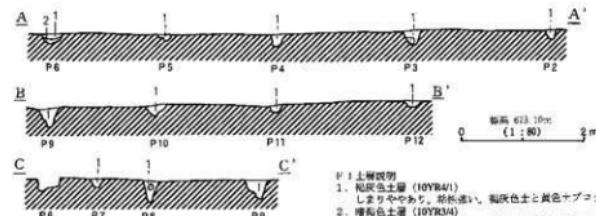


第15図 F 10・F 12・F 15・F 20号掘立柱建物址

F 1



F 17

F 17 土質説明
1. 黄褐色土層 (10YR4/1)
しまりややあり。粘性高い。2. 墓石色土層 (10YR3/4)
しまりやや弱く。粘性低い。褐色土と黄色土がブロック状に混入。

F 1 土質説明

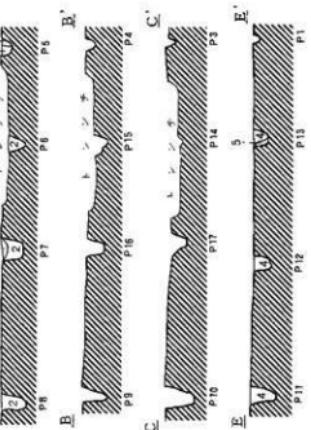
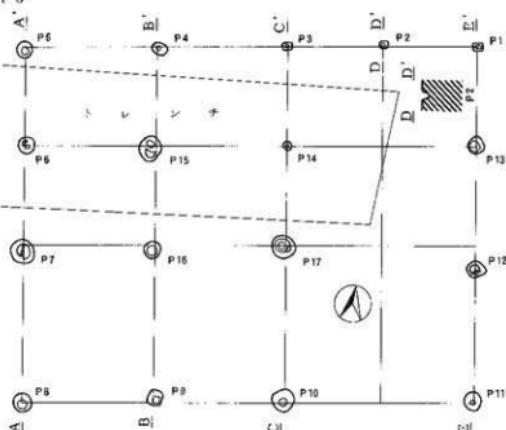
1. 棕灰褐色土層 (10YR4/1)

しまりややあり。粘性高い。褐色土と黄色土ブロック混在。

2. 墓石色土層 (10YR3/4)

しまりやや弱く。粘性低い。褐色土と黄色土がブロック状に混入。

F 6



F 6 土質説明

1. 棕灰褐色土層 (10YR3/2)

しまりやや弱く。粘性高い。

2. 墓石色土層 (10YR3/1)

しまりややあり。水田床やをブロック状に含む。

3. 黄褐色土層 (10YR4/6)

しまり・粘性あり。

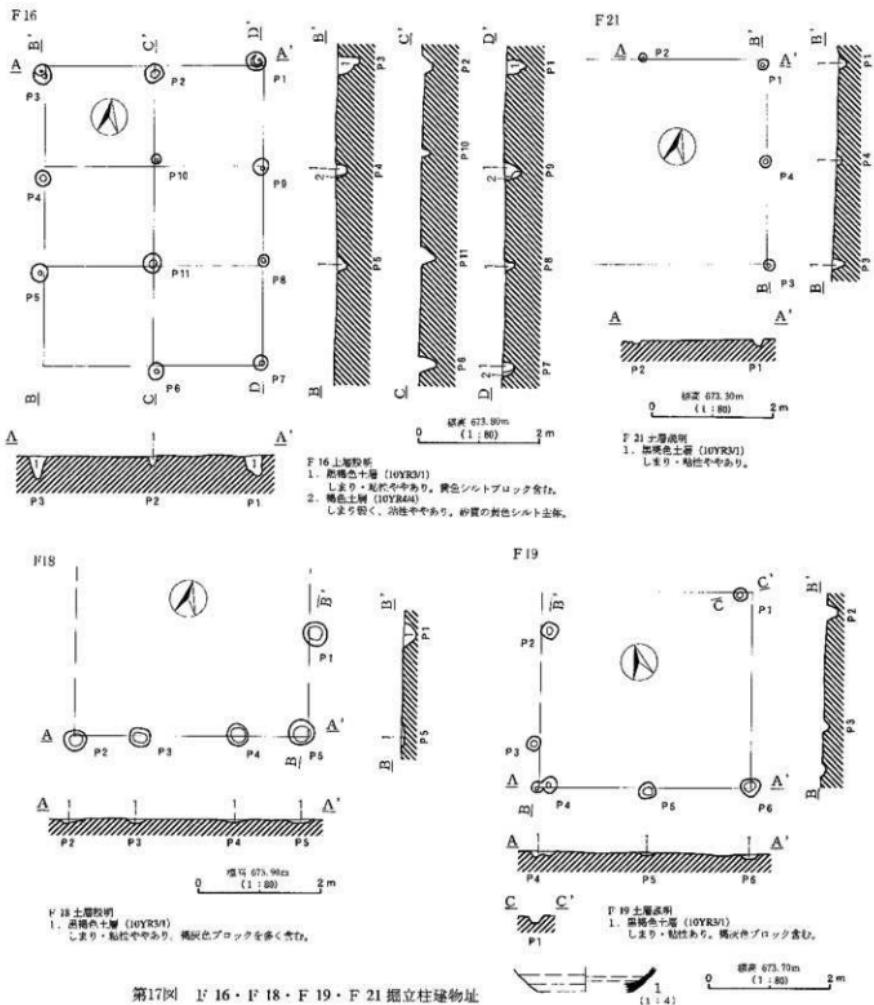
4. 棕灰褐色土層 (10YR4/1)

しまりややあり。粘性高い。褐色土と黄色土ブロック混在。

5. 墓石色土層 (10YR3/4)

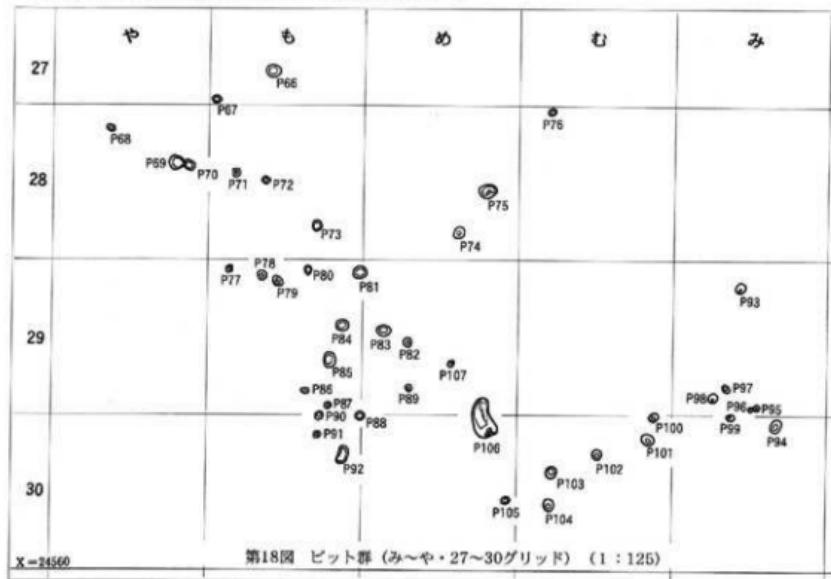
しまりやや弱く。粘性低い。褐色土と黄色土がブロック状に混入。

第16図 F 1・F 6・F 17号掘立柱建物址



第3節 単独ピット (全測図・第18・19図、図版十一)

本調査から122個の単独ピットが検出されている。小規模ピットを径30cm未溝として、数えてみると77個あり、その大半は調査区南の標高673.40mラインに帶状分布している。



第19図 単独ピット出土遺物

第5表 単独ピット出土遺物一覧表

番号	基盤	底面	底さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	(-)推定 (-)検量 出量は上から日復・底復・深溝		出土位置
							石質・スリ面 質	質	
1	無石	(8, 3)	4, 3	3, 0	1, 00	160	凝灰岩・スリ面	4	上端欠損 P13
<hr/>									
番号	基盤	法量	内 底	外 底	色 底	重 量	加工・残存量・他	出土位置	
2	縞文 深溝	— —	に赤い褐色(7, 0 YR 5/4)	に赤い褐色(7, 0 YR 5/4)	—	—	粒子微密 微片	P14	
3	縞文 深溝	(1, 6, 2) —	ナデ (2, 2)	ナデ 褐色(7, 5 YR 4/8)	に赤い褐色(7, 5 YR 5/3)	—	径1mm以下の石英・長石・赤色粒子含む。 口縁1/10	P17	

第4節 土坑（第20～23図、巻頭図版、図版十一）

1) 土坑の規模形態

本調査では16基の土坑が検出された。

1. 不定型な土坑

D1・D3・D5・D6・D14号土坑は楕円形基調ではあるが不定形である。規模は長軸で120cm～206cmを測る。覆土は黒褐色土である。D14からは弥生中期の上器片が出土するが、他の土坑は遺物はない。土坑の性格は人為的なものより、自然的な性格が考えられ馬倒木などであろう。

2. 円形土坑

調査区南西隅にD7～D11の円形土坑がある。これらの土坑の上層より、弥生前中期の土器群と黒曜石・打製石斧・円鏡が出土した。5基の土坑は円形を呈し、断面形は箱形で底面は平坦面を持ち、中央部は径90cm程円形に堅敏な面を持つ。規模は長軸123cm～172cmを測る。底面には硬質範囲がみられた。覆土上層の黒色土が弥生時代前期の遺物を含んでいるが、これら弥生前期の遺物が土坑に伴うというより、低地に堆積した弥生前期の包含層の遺物ととらえている。土坑は弥生前期またはそれ以前に帰属する。



第20図 D1～D6・D12～D14号土坑

この他にD2は径120cmの円形土坑で底面は平坦であるが、覆土は灰黄褐色上を含み、F21号掘立柱建物址の内側に位置し、F21と関連のあるものかと推測された。D12・D13も円形を呈すが底面は平坦でなく、遺物がなく性格はわからない。

3. 穫穴状の土坑

D15・D16号土坑は北東に位置し、南北に並んで検出された。形態は両土坑ともに不定形で、D15上坑がほぼ梢円形、380×280cmを測る。D16号土坑は狭長のみで規模形態はわからない。底面は平坦で、D16号土坑からは須恵器の甕・十師器甕などが出上している。

2) 弥生前期出土土器

D2

D2から無文土器片が1点出土した。外面ナデ。時期不明であるが、胎土、色調から水II式の可能性が高い。

D7

D7では上層部を中心に1~16の土器が出土した。1~16と水II式である。1は整った細密条痕の腹胸部。2はササラ状工具か茎草状工具が原体であろう細密条痕甕。条痕は斜方向である。2はD7とD8出土の破片が接合した。3は上位が無文、下位は横方向、斜方向に細密条痕が施される甕。4はササラ状工具による細密条痕が斜方向に施される。5は内面が内削ぎ状となるII縁部破片。外面は口縁端部底ド、5mm~1cm程度の幅で粘土がかぶる。6は上位僅かに無文部で以下、横方向、斜方向に細密条痕が施される甕。7~11は甕で比較的整った細密条痕が斜方向などに施される。12~16は磨耗著しいが、14~16では僅かに細密条痕が確認される。

D8

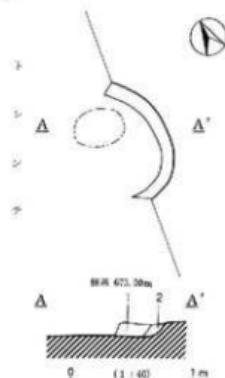
D8では上層部を中心に1~27の上器が出土した。1、2は3段もしくは4段の変形工字文の浅鉢。いずれも幅2mm程度の2本の沈線で描かれ、変形工字文の二角形は扁平気味である。浅鉢は口縁部付近が僅かに内湾気味に開くが、底部付近では直立気味になる器形である。おそらく3段以上となる三角形の変形工字文を描出する2本の沈線は曲線的であり、単位文の交点部分は器皿が挟られて、接する。また交点部分は段ごとに位置をずらす。1、2とも最上段の2本の沈線を見る限り、2本の沈線の起点が引字文状になることはなさそうだ。外面の調整はミガかれ、内面は接合による凸凹が微妙に残存し、ミガキに近いナデ、もしくはナデに近いミガキというべき調整である。1と2は内外面の色調が異なるが、文様、沈線の施用具、内外面の調整、また胎土も類似する。断定はできないが、1と2は同一個体の可能性が高い。なお1はD7とD8出土の資料で接合した。

1、2と比較検討すべき、距離的に最も近い遺跡の変形工字文の資料と言えば、言うまでもなく小諸市水遺跡の著名な変形工字文浅鉢である。水II式は水遺跡2群、3群を基準に設定され(水塙1969他)、1980年代以降は縄文時代晩期ではなく、弥生時代前期に扱われることが一般的であるが、水II式を検討する上での基準であり、常に注目された資料だ。今日では水遺跡例も弥生時代前期と扱われる。1、2の東五里田遺跡例と水遺跡例を比較すると、共通点はいずれも変形工字文であり、三角形が扁平気味である点、多段構成である点、変形工字文の単位文が交点で接する点、交点の位置が段ごとにずれる点などが挙げられる。一方差異では東五里田遺跡例の変形工字文の斜線が2本の沈線である点、変形工字文が3段か4段構成となる点、また器形で口縁部付近が内湾気味、底部付近は直立気味である点に対し、水遺跡例は変形工字文の斜線が1本の沈線による点、変形工字文が2段構成となる点、器形は直線的に開く点が挙げられる。ちなみに水遺跡例は変形工字文の下位にLR単節横方向の縄文が施されるが、東五里田遺跡例は断定できないが、文様がより多段で文様帶の幅が広い分、縄文が施される可能性は低そうだ。ただし基本的には1、2とも水II式の範疇で考えるべき資料といえる。変形工字文が多段化する現象は大洞A式後半~弥生時代前期末併行の時期において、東日本で広く確認されるが、1、2ともその関連で捉えた。

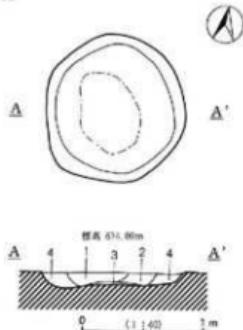
3は肩部に刻印の突起をもつ甕。肩上部は無文、肩下部は縱方向に細密条痕が施される。内面になんらかの圧痕をもつ。4は無文の甕か壺。5~16、20は無文の甕。外表面はケズリの後、ナデられる。5、6は口縁部で、II縁端部の形状、調整から同一個体であろう。4は内面に明瞭な接合痕が確認され、内傾接合と推定される。7~15、20は胎土、色調から同一個体の可能性がある。16は肩部に段をもつ甕。外表面ケズリの後、ナデられる。肩部の段は女鳥羽川式~水I式粗製甕以来の伝統であろう。17は燃糸文しが施され、赤色塗装される。18は磨耗著しいが、僅かに燃糸文らしき痕跡が認められる。19はケズリの後にナデされる無文の甕か壺。21は甕の胴部。整った細密条痕が斜方向に施される。22と25は櫛目状工具か板材による細密条痕が横方向、斜方向に施される甕か壺。原体の幅は1.2cm前後であろうか。条痕、胎土、色調から同一個体であろう。23、24も櫛目状工具か板材による細密条痕が施される。26、27も同様であるが、磨耗著しい。1~27とも弥生時代前期水II式と考えられる。

(中沢道彦)

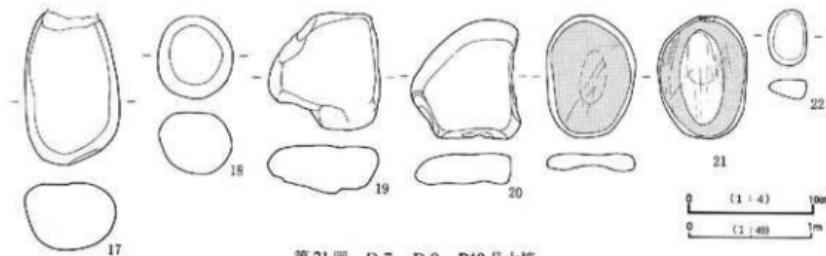
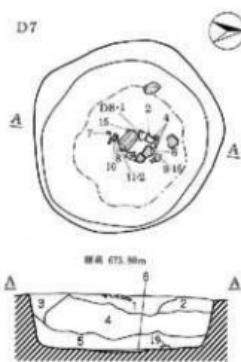
D9



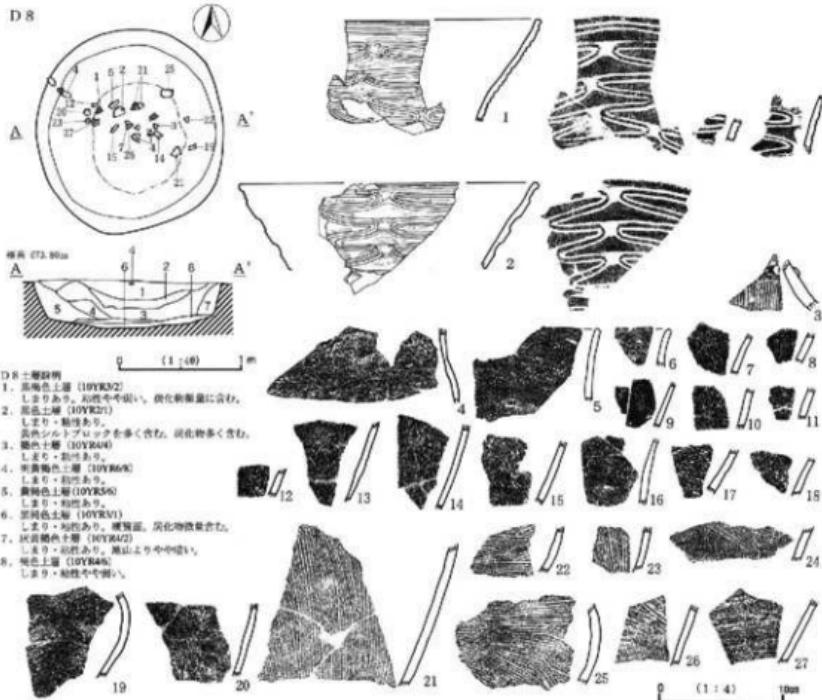
D10



D7



第21図 D7・D9・D10母土坑



第22図 D 8・D 11号土坑

D11

D11から1～6の6点の土器が出土した。1は土器底部。最大径8.8cm。底面はケズリの後、ミガキに近いナデ調整。内面荒くケズラれる。2は確かに焼った細密条痕が確認される。内面はケズリの後ナデ。3は口縁端部に刺突、外面斜方向に繊密条痕の口縁部。4～6は整った細密条痕が縱、斜方向に施される壺の腹部。1～6はいずれも開盤などから弥生時代前期水II式と考えられる。

D14

D14から1～3の3点の土器が出土した。1～3とも壺で地文原体RLの純文、曲線的な沈線が施される。2、3は沈線間を磨消繩文だが、磨消が軽い。順位は純文→沈線→磨消となる。1、3は貼付隆帯に刺突がなされる。1～3は弥生時代中期前半のものであろう。

3) 弥生前期の石器

ここでは伴出した円鏡について述べ、石器、石製鉢については後の 4) 佐久市東五里田遺跡から出土した弥生前期の石器群についてで扱う。

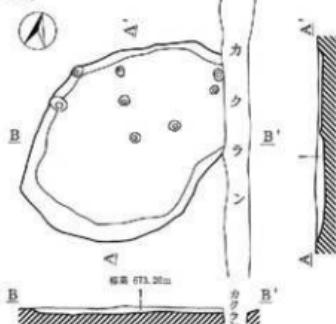
D 7

5個の円鏡と1個体のスリ石が出土し、20・21は1層中で、弥生前期の遺物群に含まれる。21はスリ石としたが、砂岩で裏面の片面は底みいくらかざらついている。平坦面は両面とも滑らかである。17・19は底面より出土し、土坑に伴うものであろう。

D 11

3個の円鏡があり、5層中より出土している。9は砂岩製で砥石である。土坑埋没当初のものであろう。弥生前期の包含層より下層にある。

D 15



D 16

D 16

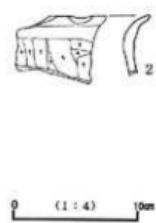
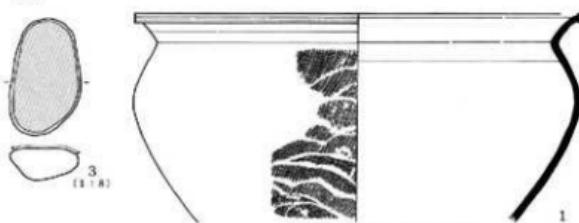


D 15

1. 黒褐色上層 (10YR 4/1)
しまりやや弱く、粘性あり。シルトブロック・炭化物を微量含む。

2. 黑褐色上層 (10YR 4/1)
しまりやや弱く、粘性あり。シルトブロック・炭化物を微量含む。

D 16



第23図 D15・D16号土坑

4) 佐久市東五里田遺跡から出土した弥生前期石器群について

1.はじめに

本稿では佐久市東五里田遺跡から出土した石器群について、主に出土した遺物の出土状況、種類、石材産地を中心に報告する。なお、遺物の出土状況については全て佐久市教育委員会文化財課の所見に基づくものであり、本報告の作成にあたり、写真・図面等のデータの提供を受けた。なお礫石器類の実測図は佐久市文化財課によるものである。

2. 石器群の出土した遺構

今回触れる石器群の大半は、D 7・D 8・D 11号土坑から出土したものである。それぞれの土坑から出土した石器器種の組成についてまず報告する。なお表8に、遺物の出土遺構と製作技術的な特徴等を一覧形式にしたので、合わせて参照していただきたい。

D 7号土坑

実際の土坑の掘り込み口から下がったと考えられるレベルで土坑のプランが確認されたため、土坑の上半は削平された状態である。発掘時の遺構確認段階で、土器片とともに石器がまとまりをもって出土し始めたため、そこで平面図と断面図を採取した。その図が図21である。

図21の遺物平面分布図のまとまりからは、土器片とともに黒曜石製剥片、そして打製石鉋の断片、礫が出土した。発掘担当者の話によれば、出土した土器片は形にはほとんどならず、廃棄物の塊が投棄された状態を示しているのではないかと推定している。遺物の大半は上層段の第一層から出土し、下層に掘り進むに従い遺物の出土はなくなった。上坑の中央付近で遺物がブロック状に出土した状態である。

この上坑からは、石錐及びその断片2点、石鍬製作時の調整剥片と思われる安山岩製剥片3点、粘板岩製剥片1点、黒曜石製剥片2点、砂岩製の磨石1点、自然礫が5点出土した。土坑の時期は弥生前期の水II式段階である。

D 8号土坑

D 7号土坑と同じく実際の土坑の掘り込み口から下がったと考えられるレベルでプランが確認され、土器片とともに石器がまとまりをもって出土し始めたため、そこで平面図と断面図を採取した。その図が図22である。

D 7号土坑と同様に、図22の遺物平面分布図のまとまりからは多数の土器片とともに黒曜石製有茎縁か黒曜石製石器が出土した。遺物の大半は上層段の第一層から出土し、下層からはほとんど出土していない。D 7号土坑と同様に、土坑の中層付近で遺物がブロック状に出土した状態である。土器では第22図-1・2のような弥生前期段階の鉢形土器が出土した。

この上坑からは、黒曜石製石器で有茎縁2点、凹基縁1点、石鍬未成品2点、二次加工剥片1点、両極剥片1点、剥片3点が出土した。他に黒曜石製の小形剥片および製片が4点(0.6g)出土した。

上坑の時期は弥生前期の水II式段階である。

D11号土坑

この土坑からは、黒曜石製石器で石鍬未成品1点、両極剥片およびその断片2点、剥片7点、そして砂岩製剥片1点、粘板岩製剥片1点が出土した。他に黒曜石製の小形剥片と製片が16点(3.2g)、粘板岩製の剥片・製片が3点(1.4g)出土している。ただし、剥片石器の出土層位は不明である。また土坑底面付近より砂岩製砥石が1点、自然礫が2点出土した。この上坑の時期は弥生前期水II式段階である。

3. 出土した石器の特徴

出土した石器群は以下のとおりで、各石器の特徴をここでまとめることにする。

黒曜石石器とその未成品(図24・1~6)

凹基縁が2点、有茎縁が2点、未成品が2点出土した。写真1~5に押圧剥離板の拡大写真を提示し、剥離痕の違いについて触れたいと思う。写真1と2は凹基縁(1・2)の拡大写真であるが、写真3(3)の有茎縁に比べ剥離の開始部(打点部)のバルブの発達が弱く、剥離面が比較的フラットである。1は基部の部分が、茎が折れたように一見見えるが、これは基部を作り出すときに生じた「バリ」である。6も凹基縁の未成品と考えられ、その剥離痕(写真5)は1・2の凹基縁に似ている。有茎縁の場合は基辺の

凹凸が顯著で、若干縦歯状となる。この違いが工具の違いに直に反映するものなのかどうかは実験検証等を経る必要があるが、信州の縄文晩期にみられる小形有茎縫の多くは写真3のような歯歯状の押圧剥離痕をもつ。1の円基縫と3の有茎縫は同じD8土坑から出土しており、水II式段階の同一時期のものであることは動かしがたい。以前角張淳一氏が小諸市氷遺跡の石器を検討するなかで、「三角形のランクをつくり円基縫の要領で基部側に押圧剥離を入れ、茎を作り出す」技法を氷遺跡の黒曜石製有茎縫の特徴としたが(1)、東五里田のD8号土坑での凹基縫と有茎縫の共伴は、この角張氏の指摘を裏付ける事例になるかもしれない。

黒曜石製石錐未成品(図24-7)1点出土した。先端を作り出すや角度のある押圧剥離痕が認められたため、石錐未成品とした。写真6にその押圧剥離痕を掲載した。写真3の有茎縫と同じ状態の剥離痕が認められる。

黒曜石製二次加工剥片(図24-8)二次加工剥片としたが、尖る刃の先端に加工痕が認められ、大形の石錐の未成品とも思われる。

黒曜石製剥片(図24-9~12)黒曜石製の剥片が出土しているが、ここではより大形な剥片を図示した。9や11の穂面の状態を見る限り、亜角縫状の原石が素材となっているようである。

石鏡(図25-13・14)安山岩製の石鏡の断片が2点出土した。13は基部の断片で、推定復元の全長は30cm前後と非常に大形である。両側辺には、顯著ではないが接着時の擦れによると思われる磨耗痕が認められる(2)。折れ方からはどのような状況で折れたか判断できなかった。14は基部断片である。

その他剥片(図25-15~20)打製石錐と同じ安山岩製の剥片3点、黒色頁岩製の剥片2点、頁岩製1点の合計6点が出土した。安山岩製の剥片は石鏡製作時に生じた基部整形剥片と思われる。

砥石(図22-9)砂岩製の砥石が1点出土した。穂面の表面は風化が著しく、剥落を起こしているが、砥石として使用したときに出来る前の角が確認できたため、砥石とした。

磨石(図21-21)やや粗密な砂岩製で、裏面と表面の一部に磨面が認められる。裏面中央の窪みは人為的なものではなく、自然的なものである。

以上のように、出土した石器組成は黒曜石製の小形剥片石器群と安山岩製の石鏡という特徴をもつ。黒曜石製石器群は信州の縄文晩期の遺跡に普通に見られるが、弥生前期段階でも継続して認められることが東五里田の事例から明らかとなつた。

また、東五里田出土のD8号土坑での凹基縫と有茎縫の共伴は、角張氏の指摘する氷遺跡出土の有茎縫の製作技法の特徴を裏付ける事例となる。

なお30cm近くの復原長をもつ石鏡の存在は縄文晩期では現在までのところ知られていない。池谷勝典によると、氷遺跡の打製石斧にもこのような石鏡は認められなかったという(3)。信州では東五里田が初出土例となる安山岩製大形石鏡であるが、実用的に使われたものなのかどうか、今後追及する必要がある。

4. 黒曜石製石器の原産地推定分析

D7・D8号土坑を中心に出土した黒曜石製石器の原産地推定分析を、沼津工業高等専門学校の望月明彦氏に依頼し、表9のような結果を得た(巻末附録参照)。分析方法は沼津工業高等専門学校望月研究室のホームページ(<http://www.busitu.numazu.ct.ac.jp/mochizuki/home.htm>)にて紹介されているので参照していただきたい。

東五里田遺跡は分析点数30点のうち、諭訪星ヶ台産が28点と大半を占め、和田小深沢産ものが1点含まれていた(表9)。佐久平における弥生前期から後期清水式段階の遺跡の黒曜石产地の傾向は、表9の示すとおり諭訪星ヶ台産が中心である。栗林2式段階を中心とする根々井芝宮遺跡や箱清水段階が主体の後家山遺跡でも諭訪星ヶ台産が多く、蓼科冷山産や和田鷹山産は1割~2割程度であった。根々井芝宮遺跡の黒曜石産地分析の対象はY25号住居の壺形土器にストックされていた黒曜石石器群で、報告書の写真を見る限り(4)、中には残核や利用可能な剥片類として石器未成品が含まれている。黒曜石製石器の石器製作とその残滓のリサイクル行為がこの資料から推定でき、興味深い。

なお、少数派の蓼科冷山産と和田鷹山産黒曜石が多数派の諭訪星ヶ台産黒曜石とともにこの佐久平の弥生遺跡にどのような経緯で流通してきたのか興味深い。いずれにしろ佐久平では、弥生前期以降、弥生後期に至るまで黒曜石の产地と流通経路に大きな変化はないことが判明した。星ヶ台・冷山・鷹山産の三つの

产地と流通経路の示す意義については今後の課題である。

なお、望月明彦氏による产地推定報告は、佐久平における弥生遺跡の初の产地分析結果であり、今後も継続的な黒曜石产地分析が必要である。その際には产地推定結果を石器の器種ごとに検討し、器種ごとに偏りはないのかなど、その傾向を把握することも視野に入れた分析が必要である。

最後に、依頼されたAMSによるC14年代の測定結果(測定:加速器分析研究所)を付記する。

(株式会社アルカ 馬場伸一郎)

(注)

- (1) 角張淳-2000「長野県水遺跡出土の剥片石器の分析」『東京考古』第18号
- (2) 池谷勝典氏のご教示による。
- (3) 池谷勝典2000「打製石斧研究序論-水遺跡の打製石斧について-」『東京考古』第18号
- (4) 佐久市教育委員会1998『根々井芝宮遺跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書 第49集

【参考文献】

- 角張淳-2002「石器研究の展望」『利根川』23
水峰光-1968「水遺跡の調査とその研究」『石器時代』9
小諸市教育委員会1994『石神遺跡』
馬場伸一郎2003「石材・技法・石器の種類からみた長野の弥生時代石器」『中部弥生時代研究会第7回例会発表要旨集』

東五里田遺跡D 7号土坑 炭化物C14年代測定結果報告

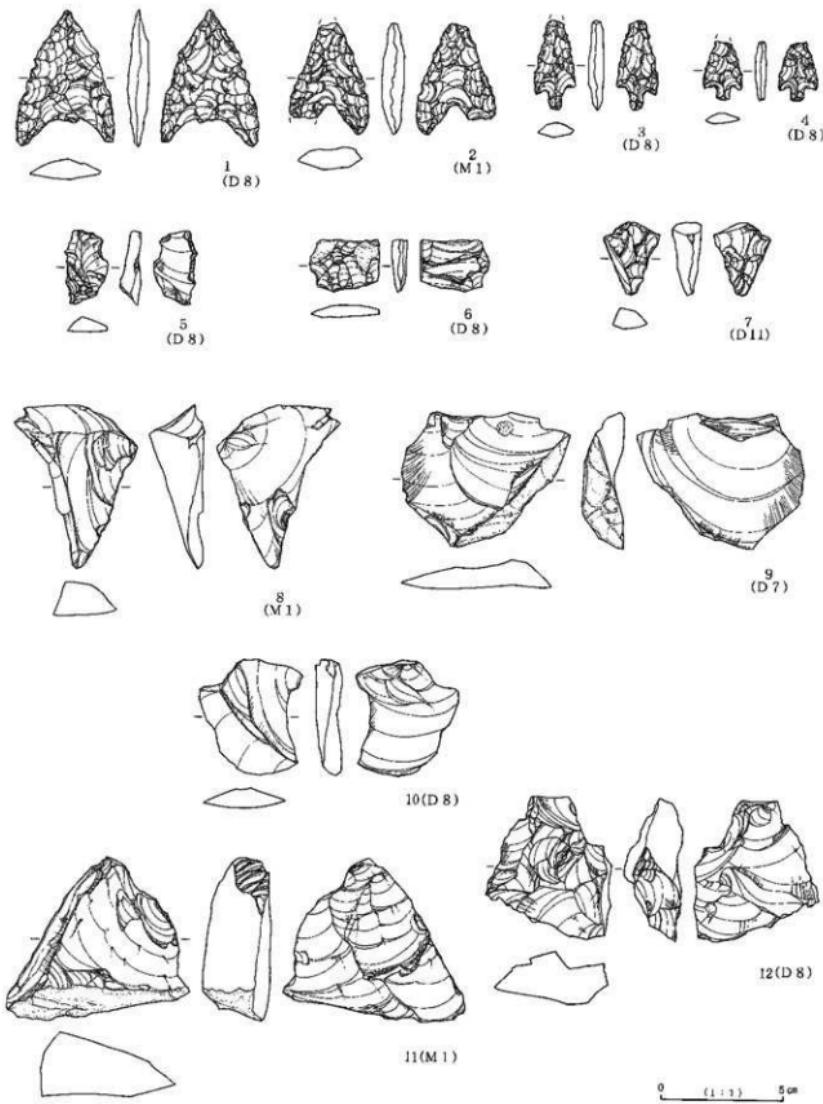
IAA: 加速器分析研究所

IAA Code No.	試 料	BP年代および炭素の同位対比
IAAA-31970	試料採取場所: 東五里田遺跡 D 7号土坑 試料形態: 炭化物 試料名(番号): 1 (参考) δ ¹³ C補正無し	Libby Age(yrBP) : 2,370 ± 40 δ ¹³ C(‰) (加速器) = -24.27 ± 0.75 Δ ¹³ C(‰) = -255.8 ± 3.3 pMC(‰) = 74.42 ± 0.33 δ ¹³ C(‰) = -254.7 ± 3.1 pMC(‰) = 74.42 ± 0.33 Age(yrBP) : 2,360 ± 30

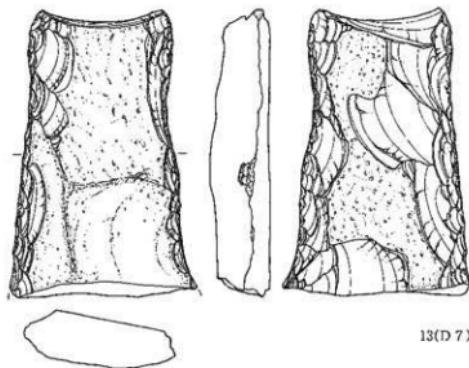
- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用しています。
- 2) BP年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表しています。
- 3) 付記した誤差は、標準偏差(1σ)に相当する年代で、次のように算出しています。
複数回(通常は4回)の測定値について \bar{x} を検定を行い、測定値のばらつきが小さい場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、ばらつきが大きい場合には不偏分散の平方根(標準偏差)と統計誤差から求めた値を比較して大きい方を誤差としています。
- 4) δ¹³Cの値は、通常は質量分析計を用いて測定しますが、AMS測定の場合に同時に測定されるδ¹⁵Nの値を用いることもあります。

δ¹³C補正をしない場合の同位対比および年代値も参考に掲載しております。

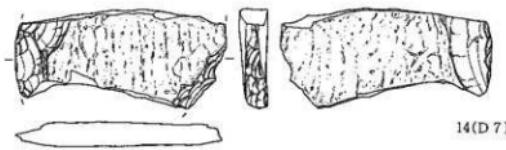
※分析試料はD 7号土坑1層中より出土し、弥生前期遺物群と同じ層中である。(担当者)



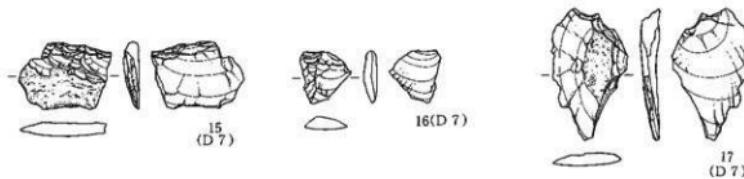
第24图 弥生前期石器类测图(1)



13(D 7)



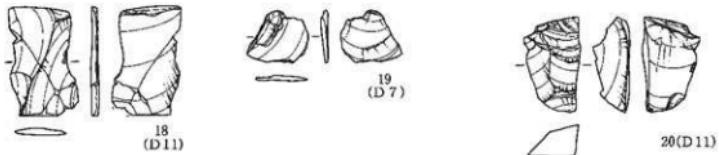
14(D 7)



15(D 7)

16(D 7)

17
(D 7)



18
(D 11)

19
(D 7)

20(D 11)

$\frac{1}{(1:3)}\text{cm}$

第25図 弥生前期石器実測図 (2)



写真1 図版番号1



写真2 図版番号2



写真3 図版番号3



写真4 図版番号4

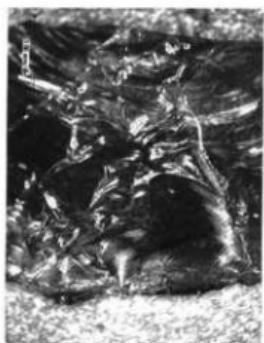


写真5 図版番号5



写真6 図版番号7

第9表 猪路洞風化石产地組成 (国立洞跡工業高等専門学校 塚月明彦氏 分析)

遺跡名(遺跡記号)	時期	SWHD	TSTY	WDTY	WDKB	WDTK	WDTN	WOTM	推定不可	総計
東五畠田(CNHG)	弥生前中期式	28			1				1	30
根々井芝宮(MNS)	弥生中期後半	47	13							60
後家山(HCO)	弥生中期後半～後期後半	195	3	10		3	1	1	1	214
東久保(GHKG)	弥生後期後半	4		2						6
總計		274	16	12	1	3	1	1	2	310

第5節 溝址

1) M1号溝址 (第24~26図、巻頭図版八~十二、図版九、十一、十二)

調査区中央にあり、南北方向に約130m伸びている溝である。B-Bセクション図に示したが溝の西端は近代の暗渠と重なっていた。溝幅はⅠ区の北端で幅220cm、深さ21cmの箱形断面形を呈す。ⅣからⅦ区で幅を広げ、幅は近代の暗渠も含め695cm、深さ47cmを測る。南端のⅧ区では幅215cm、深さ16cmと北端と同規模である。覆土は褐灰色を呈し、砂礫を含むものである。Ⅰ区とⅦ区の溝底面の高低差は約1mで北に低くなっている。

出土遺物は、土師質皿・土鍋・陶器・磁器・古銭・板碑など中世~近世遺物を含んでいた。

1. 中世

1) 上層質皿

4点は小破片で全容は明確でないが、口縁部形は内湾している (13~14C)。

2) 土鍋

小片である。

3) 陶磁器

中世の陶磁器は43点を示したが、図版に掲載のみの未実測資料をくわえると64点である。

白磁 (中国)

白磁碗 (11C後半~12C前半)、白磁口禿皿 (13C末~14C)、白磁皿か杯 (15C 重ね焼き)

青白磁 (中国)

青白磁小型合子か蓋 (13C~14C前半 手すべり壓押し)、青白磁梅瓶 (13~14C前)、

青磁 (龍泉窯)

青磁刻文碗 (12C後半)、青磁蓮弁文碗 (13C~14C前半)、青磁連弁文碗 (15C)、青磁碗 (15C前半)、

青磁鉢 (13C末~14C前半)

古瀬戸 (瀬戸)

灰釉折線深皿 (14C中頃)、灰釉瓶子 (13C後半 ハケ塗り)、灰釉瓶子 (14C 漬け掛け)、灰釉仏花瓶 (14C中頃) 灰釉仏花瓶 (14C) 灰釉瓶類 (14C?)、釉皿 (中世)

東海系陶器

瓶類 (中世)

山茶碗 (中世)

常滑

甕・壺 (14C)

甕・壺 (中世)

須恵器 (在地)

描鉢 (13C後半~14C)

舶載品では青磁蓮弁文碗が点数では多く、時期的には13~14Cが主体である。国産品は古瀬戸で、14C代が多い。

4) 古銭

中世の波来銭が8枚出土し、唐銭1枚、北宋銭6枚、明銭1枚が出士している。

5) 板碑

絆配片岩製の板碑基部である。残長16cm未満、厚さ16cmを測る。蓮台がわずかに残っている。

2. 近世

近世の遺物は陶磁器と古銭「寛永通寶」がある。

青磁 (伊万里)

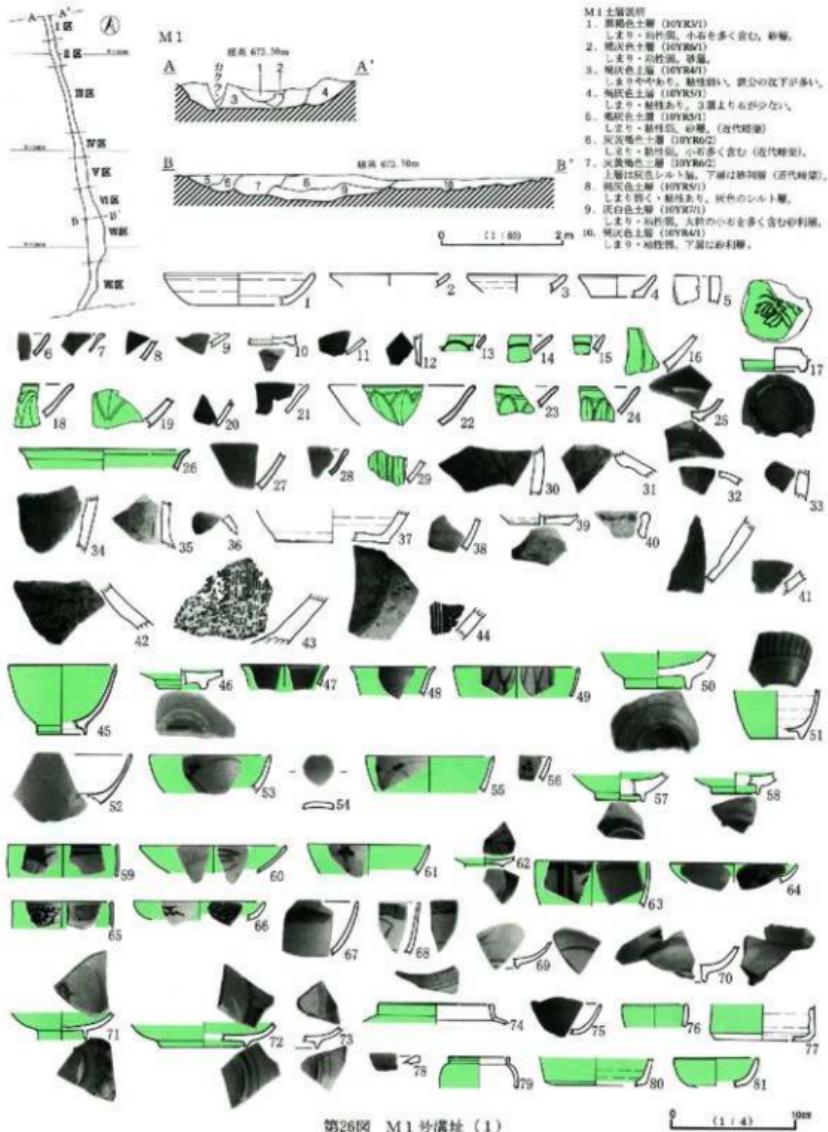
青磁碗 (17C)、青磁香炉 (近世)

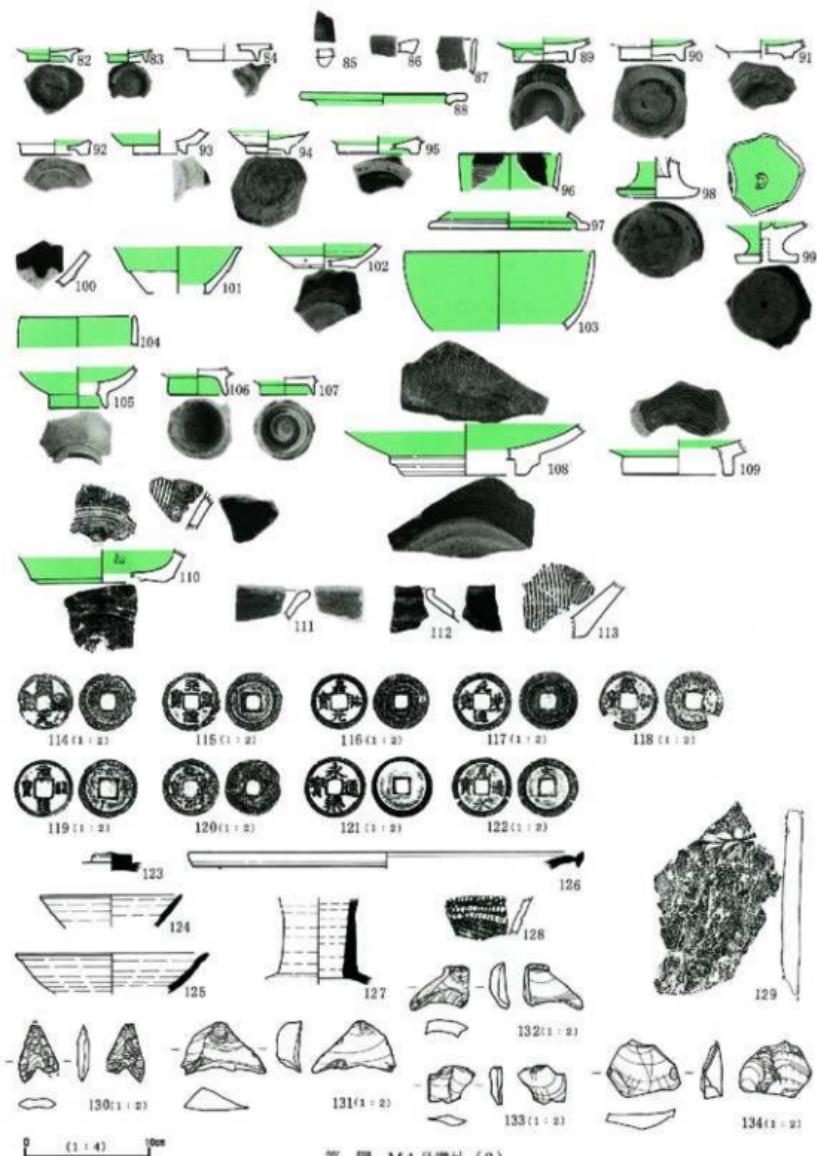
染付 (伊万里)

染付碗 (17C後半)、染付網手碗 (17C)、染付碗 (18C前半 コンニャク版)、陶胎碗 (18C後半)、蛸唐草瓶子 (18C 後半~19C前半)、染付梅花碗 (18C)、染付壺 (19C)

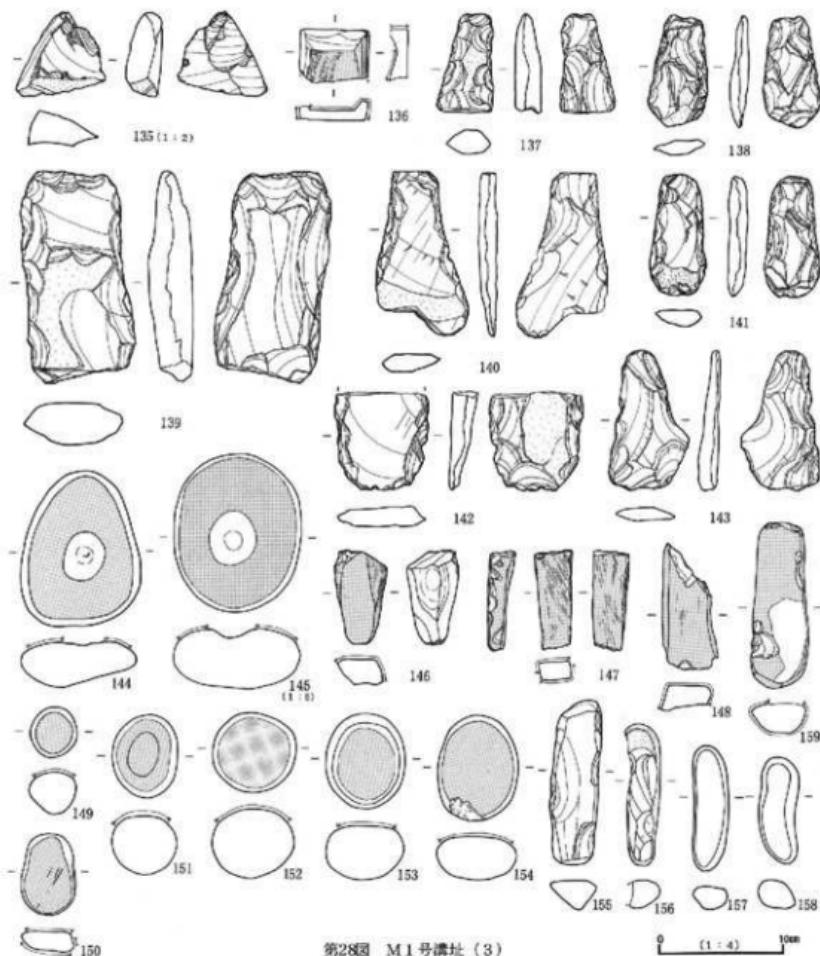
染付 (瀬戸・美濃)

染付壺 (19C)





第 図 M1 号墳址 (2)



第28图 M1号溝址 (3)

0 (1:4) 10mm

				内外(地)7.5Y6/1(灰)	口縁 10Y6/1 内側10Y6/1(明緑)外 7.5GY7/1(明緑)	腰片	腰足裏	12C後半-割烹文あり	Ⅶ区
15	青磁瓶	-	-	-	-	-	-	-	
16	青磁蓮弁文瓶	-	-	-	-	-	-	-	
17	青磁瓶	-	4.9	(1.9)	5Y7/2(灰)	-	腰片3/4	腰足裏 13C (文様)内側みこみ部に墨書文あり	1区
18	青磁蓮弁文瓶	-	-	-	内外(地)7.5Y6/2(灰オリーブ)	口縁一部	腰足裏	13C	Ⅷ区
19	青磁蓮弁文瓶	-	-	-	内外(地)7.5Y5/2(灰オリーブ)	腰片	腰足裏	13C	V区
20	青磁蓮弁文瓶	-	-	-	5Y5/2(灰オリーブ)	腰片	腰足裏	13C	VI中略
21	青磁蓮弁文瓶	-	-	-	5Y6/3(オリーブ)	口縁一部	腰足裏	13C	ⅧV-V区
22	青磁蓮弁文瓶	(12.0)	-	(3.3)	内外(地)10GY7/1(明緑)	口縁1/7	腰足裏	13C～14C前半	Ⅷ区
23	青磁蓮弁文瓶	-	-	-	内外(地)10GY7/1(明緑)	口縁一部	腰足裏	13C～14C前半 内外に貫入る	Ⅸ区
24	青磁蓮弁文瓶	-	-	-	内外(地)10GY7/1(明緑)	口縁一部	腰足裏	13C～14C前半	Ⅸ区
25	青磁瓶	-	-	-	内外(地)5G7/1(明緑)	腰片	腰足裏	13C～14C前半	VI中略
26	青磁瓶	(14.0)	-	(1.8)	内外(地)5GY7/1(灰オリーブ)	口縁1/12	腰足裏	13C後半	Ⅸ区
27	青磁瓶	-	-	-	5G7/1(明緑)	腰片	腰足裏	13C～14C前半	Ⅸ区
28	青磁瓶	--	-	--	内外(地)7.5Y7/2(灰)	口縁一部	腰足裏	13C前半 内外に貫入る	Ⅸ区
29	青磁蓮弁文瓶	-	-	-	5GY6/1(オリーブ)	腰片	腰足裏	15C	Ⅹ区
30	古瀬戸瓶子	-	-	-	内(地)2.5Y7/2(灰オリーブ) 外(地)5Y7/2(灰オリーブ)	腰片	腰足裏	13C後半	Ⅹ区
31	古瀬戸瓶子	-	-	-	10Y6/2(オリーブ)	腰薄く、ハケぬり	-	-	
32	古瀬戸瓶子	-	-	-	内(地)2.5Y8/1(灰)	腰片	腰足裏	13C後半	Ⅹ区
33	古瀬戸瓶子	-	-	-	外(地)5Y8/1(灰)	腰薄く、ハケぬり	-	-	
34	古瀬戸瓶子	-	-	-	内(地)2.5Y8/2(灰)	腰片	腰足裏	14C	Ⅺ区
35	古瀬戸瓶子	-	-	-	外(地)2.5Y7/2(灰)	腰片つけ付け	-	-	
36	古瀬戸瓶子	-	-	-	内(地)2.5Y8/1(灰)	腰片	腰足裏	14C	Ⅺ区
37	古瀬戸瓶子	-	(9.4)	(2.7)	内 2.5Y8/1(灰)	腰片1/4	腰足裏	14C?	Ⅺ区
38	東海系瓶	-	-	-	内 2.5Y8/0(灰)	腰片	腰足裏	中世	Ⅺ区
39	山廬か藤箱小皿	-	(4.9)	(0.9)	N8/0(灰)	腰部2/7	腰足裏	中世	Ⅺ区
40	青磁	-	-	-	内(地)5YR3/3(煙赤)	口縁腰片	常滑	中世	Ⅻ区
41	青磁	-	-	-	外(地)5.5Y4/2(灰オリーブ)	腰片	常滑	中世	Ⅺ中略
42	青磁	-	-	-	内外(地)2.5Y8/4(灰) 内(地)2.5Y7/1(灰)	腰片	常滑	中世	Ⅺ区
43	須恵質掛	-	-	-	5.5/0灰	腰片	伊万里	13C後～14C前半	Ⅴ区
44	須恵質掛	-	-	-	10YR7/1(灰)	腰片	伊万里	13C後～14C前半	Ⅵ区
45	青磁瓶	(8.9)	(4.0)	5.8	内外(地)5G7/1(明緑)	腰片4脚1/7	伊万里	17C	IV区
46	染付瓶	-	(4.2)	(1.6)	(地)灰 (地)10GY8/1(明緑)	武部1/4	伊万里	17C後半	IV区
47	染付瓶	-	-	-	内外(地)7.5GY8/1(明緑)	口縁1/5	伊万里	17C後半	Ⅴ区
48	染付瓶	(7.0)	-	(2.4)	10GY8/1(明緑)	腰片1/7	伊万里	17C	Ⅴ区
49	染付扇形	(10.4)	-	(2.4)	N8/0(灰)	腰片1/1	伊万里	17C	IV区略
50	陶胎瓶	-	(5.4)	(3.2)	内 2.5GY7/1(烟オリーブ) 外 7.5GY8/1(明緑)	腰片1/8	伊万里	18C後半	

S1	柴付地利	—	(4.3)	(4.0)	内地(2) 5Y8/1(灰白) 外 7. 5GY8/1(明綠灰)	面部1/4 口輪 1/4	少万里 伊万里	18C	Ⅳ区
S2	柴付堀	—	—	—	白	口輪 1/4 口輪2/13	伊万里 伊万里	18C	Ⅳ区 Ⅴ区
S3	柴付堀	(10.0)	—	(3.1)	10GY8/1(明綠灰)	口輪2/13	伊万里	18C	Ⅳ区 Ⅴ区
S4	柴付堀	2.7	2.6	0.6	7. 5GY8/1(明綠灰)	口輪2/13	伊万里	18C	Ⅳ区
S5	柴付堀	(10.5)	—	(2.9)	7. 5GY8/1(明綠灰)	口輪1/8 口輪2/13	伊万里 伊万里	18C	Ⅳ区 Ⅳ区
S6	柴付堀	—	—	—	10GY8/1(明綠灰)	口輪1/8 口輪2/13	伊万里 伊万里	18C	Ⅳ区 Ⅳ区
S7	柴付堀	—	(4.1)	(2.4)	7. 5GY8/1(明綠灰)	近部1/4 口輪1/8	伊万里 伊万里	18C	Ⅳ区 Ⅳ区
S8	柴付堀	—	(4.0)	(1.8)	10GY8/1(明綠灰)	近部1/4 口輪1/11	伊万里 伊万里	18C	Ⅳ区 Ⅳ区
S9	柴付堀	(9.0)	—	(2.7)	10Y8/1(灰白)	口輪1/11	伊万里	18C	Ⅳ区
S10	柴付堀	(12.0)	—	(2.3)	7. 5GY8/1(明綠灰)	口輪1/14 口輪1/10	伊万里 伊万里	18C 18C末	Ⅳ区 Ⅳ区
S11	柴付堀	(10.0)	—	(2.5)	7. 5GY8/1(明綠灰)	口輪1/10	伊万里	18C	Ⅳ区
S12	柴付堀	—	—	—	白	近部1/20 口輪1/10	伊万里	18C末	Ⅳ区
S13	柴付堀	(9.4)	—	(3.7)	7. 5GY8/1(明綠灰)	口輪1/9 口輪1/1	伊万里 伊万里	18C末	Ⅳ区
S14	柴付堀	(10.5)	—	(1.6)	10GY8/1(明綠灰)	口輪1/9 口輪1/1	伊万里 伊万里	18C末	Ⅳ区
S15	柴付堀	(8.2)	—	(2.2)	白	口輪1/8 口輪1/1	伊万里 伊万里	18C末	Ⅳ区
S16	柴付堀	(10.8)	—	(1.5)	内 白 外 7. 5Y8/1(灰白)	口輪1/8 口輪1/1	伊万里 伊万里	18C末	Ⅳ区
S17	柴付堀	—	—	—	白	碎片(山崎切)	伊万里	18C末	Ⅳ区
S18	柴付堀	—	—	—	白	碎片(山崎切)	伊万里	18C末	Ⅳ区
S19	柴付堀	—	—	—	10GY8/1(明綠灰)	碎片(山崎切)	伊万里	18C末	Ⅳ区
S20	柴付堀	—	—	—	白	碎片(山崎切)	伊万里	18C末	Ⅳ区
S21	柴付堀	—	—	—	白	碎片(山崎切)	伊万里	18C末	Ⅳ区
S22	柴付堀	—	(7.1)	(2.1)	7. 5GY8/1(明綠灰)	近部1/7 碎片(山崎切)	美濃 伊万里	19C	Ⅳ区
S23	柴付堀	—	—	—	10GY8/1(明綠灰)	碎片(山崎切)	伊万里	19C	Ⅳ区
S24	柴付堀	(9.6)	—	(1.7)	内地(2) N7/0(灰白)	口輪1/6 碎片(山崎切)	伊万里 伊万里	近世	Ⅳ区
S25	柴打田	—	—	—	10Y8/1(灰白)	碎片(山崎切)	伊万里	17C	Ⅳ区
S26	灰輪輪	(5.4)	—	(1.9)	内地(2) 10Y8/1(灰白)	口輪1/8 碎片(山崎切)	伊万里 伊万里	近世	Ⅳ区
S27	灰輪輪	—	(7.8)	(2.9)	内地(2) 2. 3Y8/2(灰白) 外輪 5Y8/2(灰白)	口輪1/4 碎片(山崎切)	伊万里 伊万里	近世	Ⅳ-Ⅴ区
S28	灰輪輪	—	—	—	10Y8/1(灰白)	碎片	伊万里	近世	Ⅳ区
S29	灰輪輪	(5.0)	—	(2.6)	内地(2) 2. 5Y8/2(灰白) 外輪 7. 5Y7/1(灰白)	口輪1/4 碎片(山崎切)	伊万里 伊万里	近世	Ⅳ区
S30	志野組	—	(8.4)	(2.3)	内地 10YR7/2(赤い黄緑) 外輪 10YR8/2(灰白)	近部1/8 碎片(山崎切)	美濃 伊万里	17C	Ⅳ区
S31	灰輪伝型	(7.0)	—	(2.3)	内地 5Y8/3(灰黃) 外輪 5Y8/2(灰白)	口輪1/8 碎片(山崎切)	伊万里 伊万里	18C	Ⅳ区
S32	灰輪傳	—	3.6	(1.2)	7. 5Y8/2(灰白)	近部2/3 碎片(山崎切)	伊万里 伊万里	18C~18C末	Ⅳ区
S33	灰輪傳	—	3.2	(1.0)	内地 7. 5Y7/1(灰白) 外輪 2. 5Y7/1(灰白)	碎片1/2 碎片(山崎切)	伊万里 伊万里	18C~18C末	Ⅳ区
S34	灰輪傳	—	(5.6)	(1.4)	内地 7. 5GY8/1(明綠灰) 外輪 2. 5GY8/1(灰白)	碎片1/6 碎片(山崎切)	伊万里 伊万里	18C~18C末	Ⅳ区
S35	灰輪傳	—	—	—	内地 7. 5Y7/1(灰白) 外輪 5Y8/1(灰白)	碎片	伊万里	18C~18C末	Ⅳ区
S36	灰輪傳	—	—	—	2. 5Y8/1(灰白)	碎片(山崎切)	伊万里	近世	Ⅳ区
S37	灰輪傳	—	—	—	5GY8/1(灰白)	碎片(山崎切)	伊万里	近世	Ⅳ区
S38	灰輪傳	(13.6)	—	(1.0)	5Y8/2(灰白)	口輪1/2 碎片(山崎切)	伊万里 伊万里	18C	Ⅳ区
S39	灰輪傳	—	(4.8)	(2.0)	内地(2) 5YR5/4(赤い黄緑) 外輪 10YR8/2(灰白)	口輪1/2 碎片(山崎切)	伊万里 伊万里	18C	Ⅳ区
S40	灰輪傳	—	5.3	(1.7)	内地 10YR5/6(明小窓) 外輪 5YR5/6(明小窓)	高台光存 高台光存	伊万里 伊万里	18C	Ⅳ区
S41	灰輪傳	—	—	—	内地 2. 5Y8/3(灰黃) 外輪 10YR6/6(明黃)	内部1/3 高台光存	伊万里 伊万里	18C	Ⅳ区
S42	灰輪傳	—	(5.6)	(1.2)	内地 5Y8/2(灰白) 外輪 5Y8/2(灰白)	碎片 碎片(山崎切)	伊万里 伊万里	18C~以前	Ⅳ区

93	鐵地鏡	-	(4.2)	(2.0)	外(地) 5 YR 8/2 (灰白) 内外(地) 7, 5 YR 2/2 (黒褐)	近部 1/10 鏡面・表面 18C末以前	Ⅳ区
94	鐵地鏡	-	(3.4)	(2.0)	外(地) 2, 5 YR 2/2 (灰白) 内外(地) 7, 5 YR 1/4 (黒) 外(地) 2, 5 YR 2/2 (灰白)	近部 1/10 鏡面・表面 18C末以前	Ⅳ区
95	鐵地鏡	-	(6.6)	(1.5)	(鉄地) 5 YR 4/4 (にぶい赤色) 内(地) 5 YR 7/2 (灰白) 内(地) 2, 5 YR 3/2 (暗赤)	底部 2/11 鏡面・表面 18C末以前	Ⅳ区
96	よろい手鏡	(8.4)	-	(3.1)	外(口) 2, 5 YR 3/2 (暗赤) 外(地) 10 YR 5/6 (黒褐色) (鉄地) 10 YR 5/6 (黒褐色)	口縁 1/10 鏡面・表面 18C後半	Ⅳ区
97	鐵地小瓶蓋	(13.2)	-	(1.4)	内(地) 2, 5 YR 4/3 (にぶい赤色) 外(地) 7, 5 YR 6/4 (にない赤) (鉄地) 2, 5 YR 8/1 (灰白)	口縁 1/8 鏡面・表面 18C末~19C前半	Ⅳ区
98	鐵地仏花瓶	-	(6.7)	(3.4)	内外(地) 2, 5 YR 8/2 (灰白) 外(地) 7, 5 YR 3/4 (黒)	虎部 1/2 鏡面・表面 18C末~19C前半 武器刃軸赤切刃	Ⅳ区
99	鐵地打明皿	--	4.9	(3.4)	外(地) 2, 5 YR 1/1 (灰白) 内外(地) 2, 5 YR 4/2 (灰白)	底座光面 鏡面・表面 18C末~19C前半 武器刃軸赤切刃	Ⅳ区
100	天口茶碗	-	-	-	外(地) 2, 5 YR 8/2 (灰白) 内外(地) 7, 5 YR 3/2 (黒)	鏡片 鏡面・表面	Ⅲ区
101	天口茶碗	-	(5.2)	(3.8)	外(地) 10 YR 7/2 (にぶい黄褐色) 内外(地) 3 YR 4/4 (にぶい黄褐色)	体部 1/6 鏡面・表面	Ⅴ区
102	鐵地瓶	-	(7.0)	(2.0)	外(地) 7, 5 YR 4/4 (黒) 内外(地) 10 YR 5/2 (オーリーブ灰)	底部 1/3 鏡面・表面	Ⅲ区
103	灰地刷毛口瓶蓋(?)	(15.6)	-	(6.5)	外(地) 10 YR 7/1 (灰白)	武器 1/1 鏡面・表面 18C	Ⅳ区
104	灰地手鏡	(9.5)	-	(2.5)	内外(地) 10 YR 7/3 (にぶい黄褐色)	口縁 1/11 鏡面・表面 17C	Ⅴ区
105	灰地手鏡	-	(4.8)	(3.4)	(内外) 2, 5 YR 8/2 (灰白)	虎部 1/8 表面 17C	Ⅳ区
106	灰地手鏡	-	4.9	(2.2)	外(地) 10 YR 7/3 (にぶい黄褐色)	高台光面 表面 17C	Ⅳ区
107	ホタル手鏡	-	(4.0)	(1.5)	内外(地) 10 YR 5/3 (にぶい黄褐色)	高台部光面 表面 18C	Ⅳ区
108	錦	-	(10.0)	(4.2)	内(地) 2, 5 YR 4/2 (灰白) (地) 2, 5 YR 2/2 (織物赤地)	高部 1/6 表面 18C	Ⅳ区
109	錦	--	(9.0)	(2.8)	内(地) 5 YR 3/2 (暗赤) 外(地) 5 YR 6/1 (にぶい赤)	表部 1/4 表面 18C	Ⅳ区
110	鐵地捲絲	-	(10.4)	(2.7)	内(地) 7, 5 YR 4/1 (黒) 外(地) 5 YR 3/3 (薄赤)	底部 1/6 鏡面・表面 17C前半	Ⅳ区
111	鐵地捲絲	-	-	(2.5)	内外(地) 5 YR 2/3 (暗赤)	底部(口縁部分) 鏡面・表面 18C末~19C前半	Ⅳ区
112	鐵地鏡	-	-	-	内(地) 2, 5 YR 2/2 (暗赤) 外(地) 2, 5 YR 4/3 (オーリーブ灰) 内外(地) 7, 5 YR 4/3 (黒)	底部(口縁部分) 近代 近世末から近代	Ⅳ区
113	鐵地捲絲	-	-	-	底部	近代	Ⅳ区
番号	銘文	外径(cm)	内径(cm)	重さ(g)	記録	参考	出土位置
114	元開通寶	2.4	0.6	2.4	6.21(総)	厚さ	厚さ
115	天聖元宝	2.4	0.6	1.9	1.023(北)	裏面	裏面
116	嘉祐元宝	2.3	0.6	2.7	1.056(北)	裏面	裏面
117	元豐通寶	2.4	0.7	3.4	1.078(北)	裏面	裏面
118	元祐通寶	2.4	0.7	1.3	1.056(北)	裏面	裏面
119	元祐通寶	2.4	0.7	3.1	*	裏面	裏面
120	熙寧元宝	2.4	0.6	2.4	1.058(北)	裏面	裏面
121	永定通寶	2.5	0.6	3.2	1.405(南)	裏面	裏面
122	建炎通寶	2.5	0.6	2.4	1.658~1.683	文鏡	Ⅳ区
番号	銘文	法量	成形	裏面	裏面	裏面	出土位置
123	崇寧通寶	-	ロクロナゲ	ロクロナゲ	羅石英・0.3mmの長石・2mm以下の黒色斜長石、 褐色斜長石含む。 つまり1/2	羅石英・0.3mmの長石・2mm以下の黒色斜長石、 褐色斜長石含む。 つまり1/2	Ⅳ区
124	崇寧通寶	(11.6)	ロクロナゲ	ロクロナゲ	羅石英・1mm以下の折石・黒色斜長石含む 口縁 1/13	羅石英・1mm以下の折石・黒色斜長石含む 口縁 1/13	Ⅳ区

	須恵器	(15.8)	ロクロナデ	ロクロナデ		
125	杯	—	灰色(N6/0)	灰色(10Y6/1)	雑石英・0.5mmの長石・1mmの黒色粒子含む。 口縁1/1.2	VII区
	須恵器	(32.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	雑石英・1mm以下の長石・0.5mmの黒色粒子含む。 外面に自然釉付着。	VII区
126	實	—	(1.4) 灰色(N4/1)	褐色(7.5YR6/1)	口縁1/20	VIII区
	須恵器	—	1面ロクロナデー・脇部ヘラナデ	ロクロナデ	細石英・0.5mm以下の黒色粒子、赤褐色粒子を少量含む。きめこまかい、外面に自然釉付着。	VII区・VIII区
127	長颈壺	—	(7.1) 灰白色(2.5Y8/1)	灰白色(2.5Y8/2)	破片	
128	縄文 深鉢	—	にびい色(7.5YR6/4)	橙色(7.5YR6/6)	無密 細長石・赤褐色粒子含む、縄文前期(有地)	I区
番号	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
129	板鏡	(17.5)	(10.5)	1.5		縫隙片付、蓮台あり
130	石盤	2.4	1.6	0.4	1.28	黒曜石
131	剝片	—	3.5	1.0	4.85	黒曜石
132	剝片	1.9	2.4	0.7	2.38	黒曜石
133	剝片	1.5	1.9	0.5	0.84	黒曜石
134	剝片	2.4	3.0	0.8	4.90	黒曜石
135	剝片	3.4	3.7	1.4	13.75	黒曜石
136	刷	(4.3)	5.6	1.6	60	黒岩
137	打製石斧	8.1	4.6	2.1	90	黒色鍍金安山岩
138	打製石斧	9.2	4.9	1.2	60	黒色鍍金安山岩
139	打製石斧	(17.3)	9.6	3.7	720	安山岩
140	打製石斧	13.4	7.6	1.5	160	黒色鍍金安山岩
141	打製石斧	9.9	4.7	1.4	100	黒色鍍金安山岩
142	打製石斧	(8.1)	7.7	1.7	160	安山岩
143	打製石斧	11.5	6.6	1.2	100	黒色鍍金安山岩
144	円石	12.7	9.8	3.7	630	安山岩
145	円石	19.8	15.7	7.5	3,040	安山岩 上面にスリ面あり
146	砾石	7.7	4.2	2.1	80	凝灰岩
147	砾石	(8.1)	2.9	1.6	70	凝灰岩 西端欠損
148	石	(10.4)	4.6	2.1	120	黒色鍍金安山岩
149	スリ石	4.1	3.8	3.4	50	安山岩 スリ面1
150	スリ石?	6.7	4.4	1.6	70	真岩?
151	スリ石?	6.8	5.3	4.8	220	安山岩 スリ面1
152	スリ石	6.5	6.8	5.7	310	安山岩
153	スリ石	7.8	6.5	4.4	310	安山岩 スリ面1
154	スリ石	8.7	6.5	3.6	250	安山岩 打痕あり
155	編物石	13.1	4.1	2.7	220	全体に磨耗、打痕なし
156	編物石?	11.6	2.7	2.2	130	剥離あり、下端スリ面あり
157	編物石?	10.2	3.0	1.9	90	両端にわずかに打痕あり、全体に糸紋付着。
158	編物石?	8.7	3.3	2.4	90	自然礫か、顯著なスリ面なし
159	編物石	13.5	4.8	2.4	240	チャット磨耗、顯著なスリ面なし、打痕なし
						VII区
						II区

2) M2号溝址(全体図・第27図、図版九)

柵立区北東、て10グリッドで検出された。検出長11.88m、幅1.78m、深さ41cmを測る。断面形は台形を呈す。覆土は黒色土が堆積している。

出土遺物は上部と須恵器の破片がある。須恵器は底部が丸みを持つヘラ切り底の杯である杯片、外側平行タスキの裏、土師器は片端で内面黒色処理されるもの、武藏壹片がある。

これらより、奈良時代または以降の溝であろう。

M2



横幅 67.30m

A A'

2 m

第29図 M2号溝址

M2号溝跡

1. 蓋台上面(10YR2/1)

しまり・泥付やあります。遺物を少々含む。

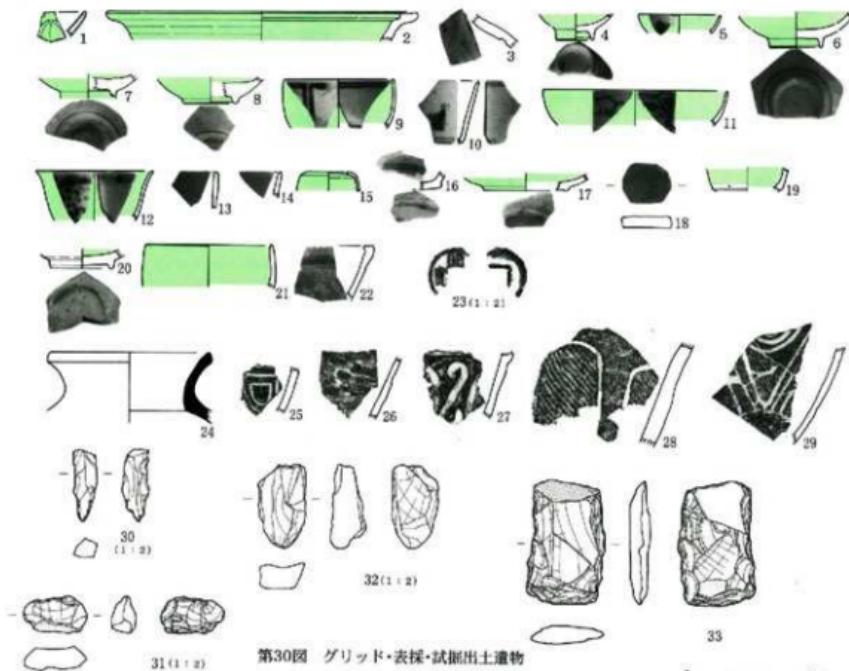
2. 褐色土層(10YR4/0)

しまり・泥付あります。赤色シルトと黄色土層が層状。

3. 黃色粘土層(10YR4/2)

しまり・泥性あります。下層は水が浸透した多孔化し、ガリガリしています。

第6節 グリット・表探・試掘出土遺物 (全体図・第30図、図版十二)



第30図 グリット・表探・試掘出土遺物

0 (1 : 4) 100cm

第11表 グリット・表探・試掘出土遺物一覧表

番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調	保存・実地・年代・備考	出土位置
1	青銅鏡外文鏡	—	—	—	内外(縁)10G Y 7 / 1 (明緑)	口縁一部 縫合痕	13C
2	古墳式新種深鉢	(25.6)	—	(2.4)	内外(縁)2.5Y 8 / 3 (浅緑)	口縁1 / 11 縫合痕	14C中頃
3	古墳式瓶	—	—	—	内縁10Y 7 / 3 (赤・黄緑) 外(縁)N 8 / 0 (赤白)	縫合痕	13C後半
4	染付瓶	—	—	—	内(縁)7.5Y 8 / 2 (赤オリーブ)	角溝なし	染付
5	染付瓶	(6.8)	—	(1.6)	7.5G Y 8 / 1 (明緑)	直縁3 / 4 縫合痕	伊万里
6	染付瓶	—	4.4	(2.8)	内(縁)7.5G Y 8 / 1 (明緑)	底部3 / 4 縫合痕	伊万里
7	染付瓶	—	—	—	内(縁)7.5G Y 8 / 1 (明緑)	底部1 / 3 縫合痕	伊万里
8	染付瓶	—	(4.5)	(2.2)	内(縁)10G Y 8 / 1 (明緑)	底部1 / 7 縫合痕	伊万里
9	染付瓶	(9.0)	—	(4.9)	内(縁)白	口縁1 / 6 縫合	伊万里
10	染付瓶	—	—	—	内(縁)白	縫合(口縁含む)	伊万里
11	染付瓶	(15.2)	—	(2.9)	内(縁)7.5G Y 8 / 1 (明緑)	口縁1 / 14 縫合	伊万里
12	染付瓶	(9.6)	—	(4.1)	内(縁)N 8 / 0 (赤)	口縁1 / 9 縫合	伊万里
13	灰陶瓶	—	—	—	内(縁)10Y 7 / 1 (赤)	破片(口縁) 底部・支足部	近世
14	灰陶瓶	—	—	—	内(縁)10Y 7 / 1 (赤)	破片(口縁) 底部・支足部	近世
15	灰陶小壺	(2.9)	—	(1.6)	内(縁)2.5Y 8 / 3 (赤)	口縁1 / 6 外(縁)2.5Y 8 / 2 (赤)	底部・支足部
16	灰陶香炉	—	—	—	内(縁)7.5YR 5 / 6 (黒緑) 外(縁)2.5Y 8 / 3 (赤)	破片 底部	19C前半
17	志野紋	—	(6.8)	(1.4)	内(縁)2.5Y 8 / 2 (赤)	直部1 / 7 重ね焼合の様あり	17C
18	冠珠	3.5	4.2	0.9	内(縁)2.5Y 8 / 2 (赤白) 外(縁)2.5Y 8 / 2 (赤白)	元存 灰陶体の二次利用	染付

19	灰陶軸	-	(5, 7)	(2, 0)	内外(軸) 2.5Y7/3(浅黄) 外(軸) 2.5Y7/1(灰白)	武部1/6	瀬戸・美濃	近世	昭和
20	鐵輪軸	-	(5, 1)	(1, 6)	内(軸) 5YR 4/3(にせい赤褐色) 外(軸) 2.5Y8/2(灰白)	底部1/2	瀬戸・美濃	18C A.D. - 19C E.P.	昭和
21	灰陶軸(川越石燈り?)	(10, 4)	-	(3, 5)	内(軸) 5Y7/1(灰白) 外(軸) 2.5Y6/4(にせい黄)	上部1/5	瀬戸・美濃系	18C	昭和
22	灰陶片の軸	-	-	-	内(軸) 2.5Y6/4(にせい黄)	破片	近江	近江木	昭和
番号	鉢骨名	外径(cm)	内径(cm)	底さ(g)	初開年	春作	御名	出土位置	
23	前元鑿質	2.4	-	0.8	6.21(例)			山上位置	埋区
番号	器種	底量	式形	断面	色調		底上・残存・焼		
24	灰陶 甕	(13, 6)	ロクロナギ	ロクロナギ	底面 灰褐色(7.5YR 5/3)	底面 灰褐色(7.5YR 4/1)	底面 長石・鐵石共合む。		出土位置
		-	(5, 8)	にせい赤褐色(5YR 5/3)			11件 1/3		更細部判明
25	罐文 深鉢	-	にせい褐色(5YR 6/4)	にせい褐色(5YR 6/4)		底面 鐵石・鐵石共合む。			試掘
26	罐文 深鉢	-	にせい褐色(10YR 6/3)	にせい褐色(7.5YR 5/3)		底面 鐵石・石英共合む。赤褐色斑多く含む。			み透クリップ
27	罐文 深鉢	-	にせい赤褐色(5YR 5/3)	にせい赤褐色(8YR 5/4)		底面 長石・長石共合む。			試掘
28	罐文 深鉢	-	褐色(7.5YR 4/3)	褐色(7.5YR 5/6)		底面 鐵文中期簡單(加賀利口)			み透クリップ
29	罐文 深鉢	-	にせい褐色(5YR 6/4)	褐色(5YR 6/6)		底面 長石・黑色粒子共合む。 鐵石・1~2mmの長石・黑色粒子共合む。			試掘
番号	種類	底さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	底さ(g)	石質・ストリ面		織考	出土位置
30	火打石	3.0	1.1	0.8	2.46	チャート			昭和
31	火打石	3.4	2.0	1.1	12.18	チャート			昭和
32	火打石	2.0	2.6	1.0	4.11	水晶			昭和
33	打脱石等	10.3	6.4	3.8	140	鐵石安山岩			昭和

第5章 総 括

東五里田遺跡では竪穴住居址2棟、掘立柱建物址21棟、土坑16基、溝址2本、単独ピット122個を検出した。

第1節 奈良時代

本遺跡の竪穴住居址は奈良時代のみで他の時代はない。奈良時代の掘立柱建物址は11棟である。重複もなく複数・規模などから奈良時代と推定するにとどまる。しかし、古代から平安時代にいたるまでの間に奈良時代以外の遺物が検出されておらず竪穴住居址と掘立柱建物址はほぼ同時期とみられる。両者の関連についてみてみるのに良好な資料である。

1. 竪穴住居址

2棟検出されているが形態はH1住が長方形で27.3m²とH2住が方形で32.7m²を測る。形態は異なるが柱の間H1は同じで336cmの東西柱間を測る。南北柱間はH1住が336cm、H2住が297cmを測り、H1住は東西・南北柱間が均規模である。住居址形態が長方形を呈すものが主柱穴は方形になる。北東隣の薊沢遺跡(野沢北高等学校、注1)において奈良時代の竪穴住居址2棟が検出され、H6住は東五里田H1住に近い形態規模で大型である。薊沢H12住の規模は小さく15.4m²を測る。同時期で住居址の規模に大小がある。本遺跡では規模の大きい竪穴住居址のみで、小規模なものはない。北にある寺迹遺跡・宮添遺跡(注2)では30m²近い大型の住居址(寺添H8)と10m²(宮添H4、寺添H5)以下、15~20m²前後の中規模の竪穴住居址と共に存在している。

本遺跡では2棟ともに奈良時代の竪穴住居址としては規模が大きく、H2住は最大規模のものであろう。佐久市では寺添遺跡H8住・上型端廻跡H21住(注3)、堺原遺跡H131・H252住(注4)、下型端廻跡H1住(注5)が同規模である。これらの竪穴住居址は各遺跡で最大規模かつ少數な存在である。

2. 掘立柱建物址

掘立柱建物址は21棟検出された。掘立柱建物址は2大別され、径の大きい柱穴持つもの(短径の最大値35~70cm)と、小規模な柱穴の掘立柱建物址とである。奈良時代に比定できるピットは覆土が黒色ないし黒褐色土、大きな怪の掘立柱建物址11棟であろう。

1). 1間×1間の掘立柱建物址

F2 (2間×1間) 2.72×2.64m F7 2.2×2.04m

F9 2.4×2.4m F11 2.56×2.4m F15 3.72×2.64m

F7の規模が小さいがF2・F9・F11はほぼ同規模である。H1・H2住の竪穴住居址の北方向にF2とF7

が、F11とF15が横に並び、12~15m離れて位置している。

2). 2間×2間の掘立柱建物址

F3 4.92×3.76m

3). 3間×2間の掘立柱建物址

F4	4.8×3.44m	F10	-×3.52m
F12	4.8×3.6m	F13	4.8×4.16m
F14	6×4.16m		

F4・F10・F12はほとんど同規模である。この3棟よりF13・F14は規模がいくらくらい大きい。

これらよりH1住の周辺にF2・F3・F4・F7の4棟、H2住の周辺にF10・F11・F12・F13・F14・F15の6棟の掘立柱建物址が配置されており、1)群の1間の倉庫機能が推定される掘立柱建物址を伴い、2)群と3)群の掘立柱建物址はその堅穴住居の規模によって異なるようである。

本調査で検出された堅穴住居址は奈良時代では規模が最大に近く、伴う掘立柱建物址は1棟ではなく複数伴うようである。しかしながら掘立柱建物址の時期については推測の域を出ていないので、堅穴住居址1棟に1棟の掘立柱建物址という関連のみではなく、堅穴住居址の規模によって、伴う掘立柱建物址の数量・規模が異なる可能性を指摘しておきたい。

3. 土器様相

本調査で出土した奈良時代の遺物は大半が堅穴住居址からであり、2棟の内のH1住からである。須恵器は漆物質を伴う可能性のある壺と底部回転ヘラ切り離し後わずかにヘラケズリされ、底部はまだ丸みを帯びている杯である。小型壺は武藏窯ではなく古墳時代からの厚手のものである。土師器壺は薄手の武藏窯で口縁部「く」字形態である。土師器杯は外面底部が手持ちヘラケズリされ、丸みを持っている。これより奈良時代第2四半期の土器群であろう(注6)。奈良時代では古い様相がみられることから第1四半期に近い時期とみられる。

第2節 中世・近世

中世とみられる遺構はM1号溝址と掘立柱建物址がある。

1. 掘立柱建物址

中世とみられる掘立柱建物址は6棟である。覆土または柱穴の規模などからの推定であるが中世以降であるかもしれない。

1). 2間×1間

F19 3.36×3.24m

2). 3間×2間

F1 6.4 × 3.4m F16 4.92 × 3.6m(総柱式) F18 3.84 × (1.72)m F21 - × 3.36m

3). 4間×3間

F6 7.44 × 5.88m(総柱式)

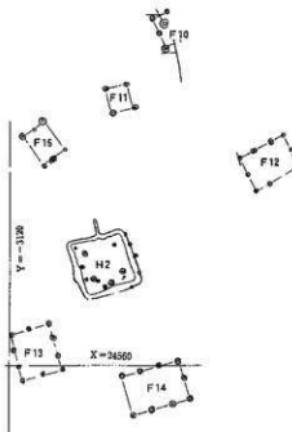
3分類され同一規模のものはない。桁行き柱間はF1が1.8mをこえ、F6・F19・F21は1.6m前後である。柱穴間距離は掘立柱建物址内でも異なり、様々な間取りがなされたようである。

F16・F6など総柱式の掘立柱建物は主屋であろう。総柱の掘立柱建物址は中世前半(12C中頃~14C代)に多く、側柱式は中世後半(15~16C)に多いという(注7、2001、服部)。またF1のような桁行の長い間仕切柱を持つ「梁間一間型」に近い掘立柱建物址がある(中世後半にみられるという。注7に同じ)。

中世の掘立柱建物址は調査区北東、南東にブロックで存在し、屋敷地を形成していたものと思われる。

2. 溝址

調査区中央に南北にみられる溝は、砂礫質の礎土から流跡路であろう。検出した規模・形態は近世の遺構であるが、M1は近世の遺物を出土するが、明確なラインは引けないものの中世の遺物のみを含む層が底面にみられる地点もあり、中世から機能していたようである。中世の掘立柱建物址群と関連し、屋敷地を形成していたものとみられる。



第31図 堅穴住居址と掘立柱建物址の配置

中世の出土遺物には上師質皿・陶磁器・渡来鏡・板碑がある。土師質皿は小片で完形のものはないが、口縁部が内湾する器形などから13～14C代の年代であろう。磁器では白磁・青白磁・青磁があり、碗・皿・瓶類がある。12C～15Cの年代である。陶器は古瀬戸・東海系陶器・常滑・須恵器があり、13～14Cの年代のものが多い。陶器は時期が集中しており、室町時代前半に集中している。これは東方の野沢鉱跡では延喜～正平年間(1335～1353)ころ作野氏が再興したとされるが、東五里田に関連するであろうか。權威の象徴として「古瀬戸・青白磁・常滑・瀬美袋物」志向が武家政権の中で江戸時代初期まであったことが指摘されている。(注8 1994. 矢部)本遺跡の中世陶磁器の構成も同様であり、武家また罐倉との関連が窺える。

M1号溝址の東に野沢中学校グランド造成前は「梨ノ木用水」が南北に設けられ(第3図参照)、水路からは近代の陶磁器片が出土する。梨ノ木用水は近代になって設けられた水路であろう。

(注)

- 注1. 佐久埋蔵文化財センター－1988『蘿沢・嵩石』
1989『蘿沢II・琵琶坂VI・梨の木II・宮のヒII』の内から蘿沢II
- 注2. 佐久市教育委員会 1996『寺添遺跡』
佐久市教育委員会 2001『宮添遺跡』
- 注3. 佐久市教育委員会 1993『上堀端遺跡』
- 注4. 佐久市教育委員会 2002『聖原第1分冊』
- 注5. 佐久市教育委員会 2000『下堀端遺跡IV』
- 注6. 佐久市教育委員会 1999『西一本柳III・IV』
- 注7. 服部良喜 2001『埋もれた中近世の住まい』同成社
- 注8. 矢部良明 1994『日本陶磁の一萬二千年』平凡社
引用参考文献
1971 田辺昭三『須恵器大成』角川書店
1981 中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房
1991 雄山閣『古墳時代の研究第6巻 上師器と須恵器』

第3節 弥生前期の遺物について

本遺跡調査の成果として、弥生時代前期水II式土器が一定量まとまり、また該期の石器に見通しがたった点が挙げられる。

水II式については1955年の永峯光一らによる小諸市水遺跡調査を経て、翌年に水式が型式設定、1965年に水式を浮線文精製浅鉢や細密条痕の粗製甕・深鉢を指標に水I式、変形工字文(三角連繋文)の浅鉢、多様な沈線文上器「条痕文上器」をもって水II式に細分。それぞれを大洞A式・大洞A'に対比され、中部高地の綱文式最終末土器型式と接続がある。1980年代以降は浮線文土器細分と広城編年が再編される過程で水I式が綱文時代晩期末、水II式は弥生時代前期とする見解が一般的となる。ただし水II式はその型式構成を明確にする点が課題とされており、また、佐久市内では仲田遺跡D6号土坑の2条突帯をもつや、瀬の下遺跡での断片的な資料以外にこれまでその出土例がなかった。本遺跡出土資料はその意味で極めて重要な情報を提供する。また、D7・D8と遺構一括資料のため今後の編年基準資料にもなりうる。

D7・D8出土遺物は第1層と上層部でそれぞれまとまって出土し、またD7・D8出土の土器が接合した。遺構D7・D8が出土遺物の時期か否かは検討を要するが、D7・D8出土遺物は一括性が高く、かつ同時期の資料と考えられる。ここではそれを前提に議論する。

本遺跡で特筆すべきはまずD8-1・2の変形工字文浅鉢である。既に触れたとおり、水遺跡出土の変形工字文と比較すると、いずれも変形工字文である点、三角形が扁平気味である点、多段構成である点、変形工字文の単位文が交点で接する点、交点の位置が段ごとにずれる点などが共通する一方、東五里田遺跡例の変形工字文の斜線が2本の沈線である点、水遺跡の変形工字文が2段構成なのに対して東五里田遺跡例は3段か4段構成となる点、水遺跡例の浅鉢の器形は直線的に聞くのに対して、東五里田遺跡例は口縁部付近が内湾気味、底部付近は直立気味である点が差異となる。

また水遺跡例は変形工字文の下位にL字単節横方向の綱文が施されるが、東五里田遺跡例は断定できないが文様がより多段で文様帶が幅広い分、純文が施される可能性は低そうだ。東五里田遺跡例の変形工字文が2本一単位の沈線で描出される点も水遺跡例との差といえるが、この点については長野市春山B遺跡SK121号土坑出土の変形工字文浅鉢とは共通しよう。変形工字文が多段化する現象は大洞A'式後半～弥生時代前期末併行時期において、東日本で広く確認されるが、東五里田遺跡の変形工字文もこれに連動したものということができるが、時期的には四

字文のない点を考慮すると弥生時代前期のものと考えたい。また水Ⅱ式を構成する変形工字文土器は水道跡の他、長野市春山B遺跡SK121号土坑、松原遺跡、塙尻市福沢遺跡、五輪堂遺跡などにあるが、東五里田遺跡例は水道跡もある佐久地方での水Ⅱ式の変形工字文のあり方を考える上で重要な資料といえる。

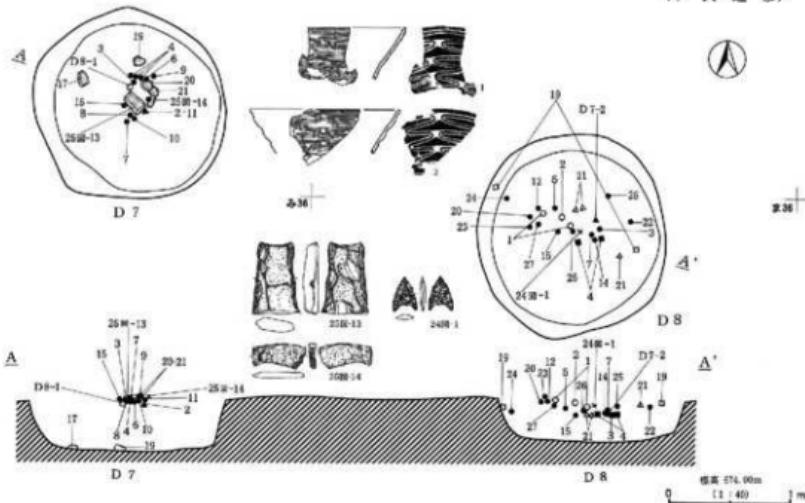
D 8-23などの甕では整った細密条痕が施されている。水Ⅱ式の甕や壺では植物束、柳状工具、竹管などが原体と推定される条痕が施されることが一般とされるが、水Ⅰ式粗製甕などで一般的な、原体が板材と推定される整った細密条痕もその系統として、水Ⅱ式甕でも組成することができよう。

水Ⅱ式を構成する「在地型突縫」、もしくは「水式突縫」の例はD 8-16のみであった。D 8-16は胴部に突縫をもち、胴下部は縦方向の細密条痕をもつ。小破片資料だが、おそらく口縁部にも突縫をもつであろう。佐久市では仲田遺跡D 6号土坑の2条突縫をもつ甕も出土しているが、その資料蓄積をしばらく待つ必要があろう。

水Ⅱ式期の石器の知見が得られた点も重要である。石鎚では小型有茎鐵の形態、「三角形のプランクをつくり凹基盤の要領で底部側に押圧剝離を入れ、茎を作り出す」技法による点、黒曜石製である点、劍齒状の押圧剝離痕をもつ点など水Ⅰ式期の石鎚からの伝統が確認できた。安山岩製の「石鎚」の復元長は30cm近くで大型である。これについては類例の蓄積を待ちたい。

なお今回、D 7号土坑出土の炭化物を加速器分析研究所で年代測定を行ったところ、 $2,370 \pm 40$ 年の測定値が得られた。近年、AMS(加速器質量分析)法によるC14年代測定に基づいた弥生時代層年代の議論が賛否両論を含み活発なだけに、重要なデータを示すことができよう。

(中 沢 道 彦)



第32図 弥生前期遺物分布図(D 7・D 8号土坑)

【参考文献】

- 永峯光一 1969 「水道跡の調査とその研究」『石器時代』第9号 石器時代文化研究会
- 前田清彦 1985 「『室の前・福沢・青木沢』塙尻市教育委員会
- 中沢道彦 1991 「長野県の概要」『東日本における稻作の受容』 東日本埋蔵文化財研究会
- 鈴木正博 1992 「水が解けるとき」『利根川』13 利根川同人
- 中沢道彦 1998 「『水Ⅰ式』の細分と構造に関する試論」『水道跡発掘調査資料図譜 第三冊 一縄文時代晚期終末期の土器群の研究』 水道跡発掘調査資料図譜刊行会
- 長野県埋蔵文化財センター 1999 「春山遺跡・春山B遺跡」
- 角張淳一 2000 「長野県水道跡出土の薄片石器の分析」『東京考古』第18号 東京考古学会

東五井山遺跡 単独ピット一覧表

No.	検出位置 形態	規格 (cm)	備考	No.	検出位置	形態	規 格 (cm)	備考
							長径×短径×深さ	
1	ま9 楊円形	81×66×39		62	*	楕円形	24×21×7	
2	は8 円形	25×24×14.5		63	~30	円形	18×17×15.5	
3	は9 *	33×30×24		64	~31	楕円形	19×17×11.5	
4	の8 楊円形	26×23×24		65	も27	円形	40×36×18	
5	ね9 円形	26×26×27		66	*	*	35×34×14	
6	ぬ7 楊円形	21×18×12.5		67	*	方形	20.5×19×14	
7	*	35×33×15		68	~28	楕円形	24×17×13	
8	と13 円形	34×33×18		69	*	円形	37×36×10	
9	に12 円形	34×34×17		70	*	方形	30×28×14	
10	に13 楊円形	29×23×14		71	も28	*	18×17×1	
11	ね14 円形	18×18×9		72	*	*	18×18×13	
12	の14 *	16×15×3.5		73	*	円形	26×24×21	
13	へ14 不整形	76×52×16.5		74	め28	楕円形	28×26×22	
14	ほ15 *	47×32×25		75	*	*	46×38×13	
15	へ~ほ15 円形	40×42×36		76	も28	*	20×16×8	
16	~15 *	36×35×25		77	も29	長方形	18×15×5	
17	ふ~ほ15 *	40×38×31		78	*	円形	24×23×13	
18	ふ16 *	30×28×32		79	*	*	27×25×11	
19	ほ16 *	19×18×20		80	*	楕円形	20×17×3	
20	む20 *	47×46×13		81	め~も29	楕円形	34×29×18	
21	*	44×43×18		82	も29	円形	24×22×8	
22	み21 楊円形	54×47×-		83	*	楕円形	32×27×8	
23	み21~22 円形	36×36×31		84	も29	円形	30×28×8	
24	ふ20 *	24×24×19		85	*	楕円形	38×31×18	
25	ふ20~21 *	33×32×18		86	*	*	20×17×12	
26	ど20 *	31×30×32		87	*	*	19×16×5	
27	*	28×26×28		88	め~も29	*	26×22×14	
28	ひ21 楊円形	20×17×6		89	め29	*	18×16×9	
29	の23 円形	38×37×28		90	め~も30	*	24×20×10	
30	の~ま23 *	49×48×47		91	も30	*	18×16×15	
31	ま23 楊円形	36×32×35		92	*	不整形	44×26×9	
32	ぬ23~24 円形	58×55×47		93	み29	楕円形	27×24×19	
33	ぬ25 楊円形	42×28×20.5		94	み30	*	34×25×20.5	
34	ね25 *	46×42×24		95	み29	*	16×13×7	
35	*	円形	34×33×26.5	96	*	*	12×10×11	
36	ね26 *	16×16×11		97	*	*	23×17×9.5	
37	*	楕円形	16×14×8.5	98	*	円形	24×22×30	
38	に27 *	20×16×7		99	め29-30	楕円形	20.5×15×12	
39	に28 円形	21×20×13.5		100	め29-30	*	20.5×18×11.5	
40	*	楕円形	18×16×7.5	101	め30	*	30×26×17	
41	と~な28 円形	16×16×14		102	*	円形	24×23×15.5	
42	な28 *	20.5×19×6.5		103	*	*	28×26×11	
43	な29 *	20×20×6		104	*	楕円形	30×26×15	
44	と29 楊円形	19.5×17×13		105	め30	*	22×16×6	
45	た28 *	30.5×28×20.5		106	め29-30	不整形	102×55×53.5	
46	ち28 円形	56×52×8.5		107	め29	楕円形	16×14×6.5	
47	た29 *	17×16×7.5		108	め31	円形	22×22×11	
48	ち29 *	18×46×85		109	め30	*	32×28×16	
49	*	不整形	68×56×24	110	め31	*	32.5×30×14	
50	*	楕円形	46×40×10.5	111	*	不整形	39×30×9	
51	そ29 円形	32×32×11.5		112	も31	楕円形	21×17×4	
52	た30 楊円形	32×28×12.5		113	め32	方形	20×18×11	
53	ち32 方形	27×25×15.5		114	め33	楕円形	66×30×5	
54	*	円形	30×28×14.5	115	め36	*	20×17×19	
55	*	方形	26×25×17	116	め36	不整形	62×45×11.5	
56	つ32 楊円形	26×21×10		117	*	円形	23×21×9	
57	*	円形	20×18×13	118	め37	楕円形	22×18×7	
58	て32 *	26×25×4		119	~ほ17	円形	28×26×27	
59	*	楕円形	33×25×19.5	120	め22	*	30×28×30	
60	~29 円形	22×20×11.5		121	め22	楕円形	14×11×4.5	
61	ほ30 *	20×18×7		122	め23	*	20×17×14	

付編

佐久市内遺跡 出土黒曜石産地推定結果

沼津工業高等専門学校 望月 明彦

分析法	エネルギー分散蛍光X線分析法(EDX)
分析装置	セイコーアンスツルメンツ卓上型蛍光X線分析計 SEA-2110L
分析条件	管電圧 50kV 管電流 自動設定
測定時間	240sec 空気圧 真空
照射径	10mm
検出器	Si(Li)半導体検出器
測定元素	Al(アルミニウム), Si(シリカ), K(カリウム), Ca(カルシウム), Ti(チタン), Mn(マンガン), Fe(鉄), Rb(リビウム), Sr(ストロンチウム), Y(イットリウム), Zr(ジルコニウム)

分析法の特徴	長所	非破壊分析 多元素同時分析 前処理不要 → 洗浄は必要 迅速分析 操作が簡単
	短所	微量分析は不得意 表面分析 → 試料を破壊せずに測定するため、分析結果は風化を測定したことになり、正確でない。 → そのため、汚れた試料、風化した試料は汚れ、風化を測定したことになり、正確でない。 類似した組成の標準試料が必要

試料の洗浄 5分間(汚れがひどい場合は15分間)超音波洗浄器で洗浄。
さらに汚れを拭き取ってから測定。

試料は破壊せずに分析できますが、以下のような試料は分析できません。

測定不可能な試料

- ・風化した試料 → 割ることが可能ならば、できます。
- ・汚れがとれない試料 →
- ・厚さが1mm以下の試料
- ・大きさ5mm以下の試料
- ・遺物番号などの書き込みで測定できる面がない試料

産地推定可能な石材

- 上記の条件をクリアしていれば、以下の分析ができます。
- ・現在は黒曜石(日本全国)とドロイト
- ・ガラス質安山岩は分類可能。
- ただし、原石データが不足しているため、産地推定は不可能。
- 現在、原石データを収集中
- ・その他の石材(特に堆積岩)は分類不可能。

产地推定法 得られた蛍光X線スペクトル強度を元素記号で表すとする。
二つの方法とも以下の指標を用いる。

指標

Sum=Rb+Sr+Y+Zr とする。
Rb分率 = Rb/Sum
Sr分率 = Sr/Sum
Zr分率 = Zr/Sum
Mn*100/Fe
log(Fc/K)

産地のシートに上げた黒曜石産地から、産地原石を採集し、測定する。
測定結果から上記の指標を算出する。
以上から、産地原石に関するデータベースを作成する。
下記の二つの方法で産地推定を行う。

①判別図法(判別図のシート参照)

用いる指標 図1 横軸:Rb分率、縦軸:Mn/Fe
図2 横軸:Sr分率、縦軸: $\log(\text{Fe}/\text{K})$
特長 簡単な計算であり、誰にでも作成可能
視覚的に確認でき、分かりやすい。
推定方法 遺跡出土試料を蛍光X線分析し、指標を計算。
指標を図にプロットする。
重なった原石産地を推定結果とする。

②判別分析(推定結果表参照)

用いる指標 算出された指標全て
特長 各産地との類似度を距離で算出
既知の産地のどれに類似しているかを判別する方法である。
→ 未知の産地の判別はできない。
推定方法 判別図法では遺跡出土試料と重なっている産地を推定結果とする。
この産地は試料と2次元的に最も距離が近い。
判別分析ではこの距離を数学的にn次元で計算する。
試料と最も距離(マハラノビス距離)が近い産地を推定結果とする。
この距離から、各産地に属する確率を計算する。

推定結果表の見方

推定結果 下記の右の表に判別図法の結果と判別分析の結果を挙げてあります。
左の表は二つの方法から導いた推定結果をまとめたものです。

左側の表

分析番号:

遺物番号:

推定産地:

右側の表

判別図判別群： 判別図法によって推定された産地

→ “判別分析と結果が異なるときは”*をつけて示す。”

判別分析： 第1候補産地…判別分析により推定された産地の第1候補

第2候補産地…判別分析により推定された産地の第2候補

判別群 候補産地記号

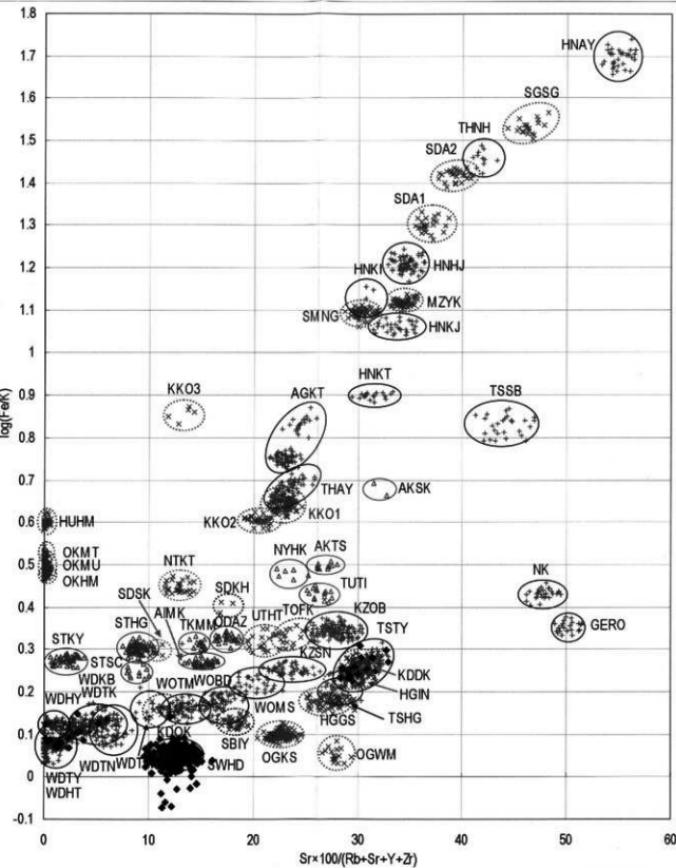
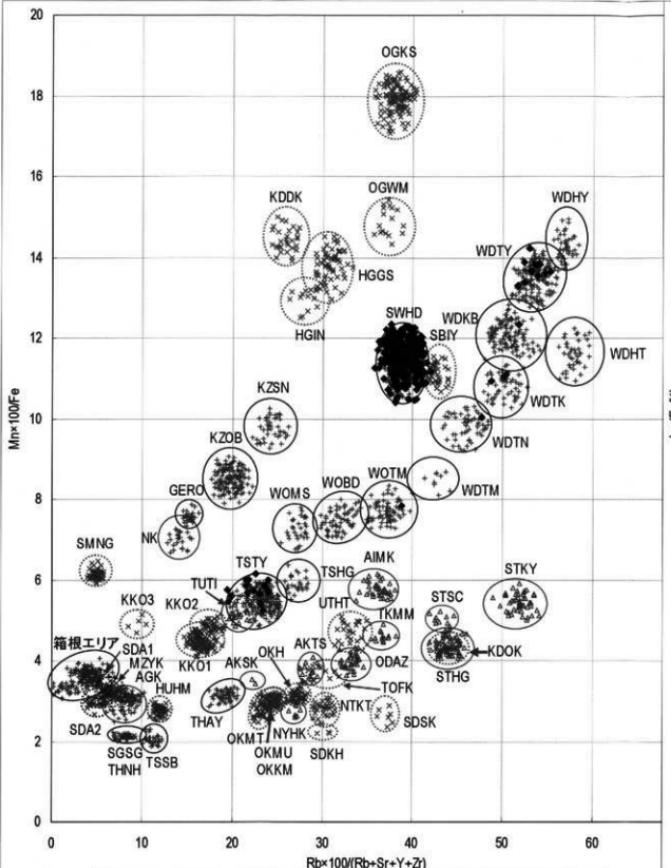
→ 判別図法による産地と通常は一致する。

距離 試料から候補産地までのマハラノビス距離

→ 値が小さいほど候補産地と類似性が高い。

確率 試料が候補産地に属する確率

→ 1に近いほど類似性が高い。



産地別石判別箇(SEIKO SEA-2110L岩質X線分析装置による)

都道府県 地名(No.)	エリア 新潟県群	旧判別箇	新記号 旧記号		原石採取地(分類)
			ST1IG STKY	赤石山脈(19)、八戸沈没層(31)、八戸沢(79)、 黒磯の沢(6)、根加林道(4) 十二ノ沢(16)	
北海道	1 口施	八戸郡 黒磯の沢群	KSSM	KDAZ	安住群(25)、清水ノ沢(9)
	2 上牧	三股郡	AIKTS		高砂台(6)、雨翁台(5)、春光台(5)
	3 宮戸	安住郡	NVYH		布川(10)
	4 舟川	春光台群	STSTD		根川(6)
	5 名寄	布川郡	AIMK		曲川(25)、土木川(15)
	6 新津川	須田郡	TUTI		覺川(16)
	7 道井川	向川郡	KDDK		出島南岸(34)
	8 豊浦	豊足郡	HUH4		八戸山公海(8)、舟角(8)、岡崎園(40)
	9 木造	出来津郡	OGKS		金合(細崎川(37)、藤本海岸(98))
	10 淀浦	八幡郡	OGWM		豊浦海岸(8)
秋田	11 男鹿	金木・境川群			
		籠本郡			
	12 月山	羽黑郡	HGGS		月山山頂(1)、朝日町田代沢(18)、郷引町中沢(18)
新潟	13 今里	今里郡	HGIN		今里(9)、大瀬川(6)
	新津	金津郡	NTKT		金津(29)
栃木	14 新荒川	板山村	SRIV		板山(40)
	15 高原山	甘利郡	THAY	TKH1	甘利郡(60)、板山(20)
		寒風山	TIINI	TKI12	七里沢(9)、自然の家(9)
		黒川郡	WDTY	WDT1	
		七斗ヶ原	WIKB	WDT2	
	16 和田 (WID)	上野原北郡	WDTK	WDT3	黒木(53)、小瀬谷(54)、東御原(36)、芙蓉谷(87)、 十勝原内沢 和田原1群
長野		上野原西郡	WDTN	WDT4	吉松(60)、土屋脇北(83)、土屋脇西(29)、土屋脇南(68)、 上野原南郡
		和田原5群	WDTM	WDT5	丁字原(8)
		美深谷1群	WUDY		
		内沢郡	WUDT		
	17 調説	男女森1群	WGHD	OMG1	ブドウ沢(36)、ブドウ沢右岸(18)、牧ヶ沢上(33)、
	牧ヶ沢群	男女森2群	WOMS	OMG2	牧ヶ沢(36)、高松沢(40)
群馬	18 群馬	男女森3群	WGTM	OMG3	
		星ヶ台郡	SWHD	KRM	星ヶ台第1航跡(36)、星ヶ台第2航跡(36)、星ヶ台入(36)、 星ヶ台B1群
	19 冷山郡	蓼科系	TSTY	TTA	星ヶ台(34)、木川(26)、木谷(26)、木谷分航(13)、見ヶ原のりこし(36)、 山川(39)、吉貴村(36)、支那輸来(33)、酒(29)、 美し森(1)、ハケ岳7(17)、ハケ岳8(1)、双子池(26)
静岡	20 箱根	芦之湖	TSHG		
	21 小笠郡	芦之湖	TSSB	ASY	芦之湖(34)
	22 天城	和田郡	HNNY	HTJ	御殿山(31)、鬼甲池(8)
東京	23 神津島	恩島	HNNH	HTJ	御殿山(71)、
		神津島1群	HNNK	HKN	黒川原(9)、
		神津島2群	HNNK	KIV	御殿山(30)、
鳥取	24 鳥取	久見郡	HNNK	KMT	上多賀(18)、
		和田郡	AGKT	KSW	和田郡(80)
		恩島	OKHM		恩島(100)、大浜(43)、波尻沢(6)
		神津島	KZSN	KOZ2	砂礫崎(40)、長瀬(5)
その他	久見郡				久見バラード(430)、久見様醜利場(18)
		真珠郡	OKHM		宍道湖(30)、加茂(19)、岸底(35)
		網野郡	OKMT		神道原(16)
		NK群	NK		中ヶ原(1)、SG(透視試料)、原石產地は未見観

佐々木勘吉氏提供資料 (まだ地図には入れていません)

百合 小泊	折橋内郡	KDOK	小泊市所内(8)
岩手 北上川	北上郡1群	KKO1	水利市折橋(36)、花巻日影所(43)、鳴石(36)、鳴石小糸(22)
	北上折2群	KKO2	水利市折橋(23)、花巻日影所(43)、鳴石小糸(22)
	北上折3群	KKO3	水利市折橋(20)
宮城 宮城	第1・象郡	MZYK	宮城町沼ノ沢(54)
鹿児島	根岸郡	SMNG	色葉町根岸(48)
	秋保1群	SDA1	仙台市秋保1歳(17)
	秋保2群	SDA2	仙台市秋保上屋(35)
福島 塙鶴群	塙鶴群	SMSG	塙鶴市塙鶴塙原(22)



● 黒曜石產地

佐久市内遺跡出土黒曜石产地組成

エリア	判別群	記号	試料数	%	エリア	判別群	記号	試料数	%	
和田(WO)	ブドウ沢	WOBD	0	0	北上川	折居1群	KKO1	0	0	
	牧ヶ沢	WOMS	0	0		折居2群	KKO2	0	0	
	高松沢	WOTM	1	0.32		折居3群	KKO3	0	0	
和田(WD)	芙蓉ライト	WDHY	0	0	宮崎	湯ノ倉	MZYK	0	0	
	鷹山	WDTY	12	3.9	仙台	秋保1群	SDA1	0	0	
	小澤沢	WDKB	1	0.32	色麻	根岸	SMNG	0	0	
諏訪	土屋橋北	WDTK	3	0.97	塙電	塙電港群	SGSG	0	0	
	土屋橋西	WDTN	1	0.32	小泊	折腰内	KDOK	0	0	
	土屋橋南	WDTM	0	0	魚津	草月上野	UTHT	0	0	
蓼科	古峰	WDHT	0	0	高岡	二上山	TOFK	0	0	
	星ヶ台	SWHD	274	88.96	佐渡	真光寺	SDSK	0	0	
	冷山	TSTY	16	5.19		金井二ツ坂	SDKH	0	0	
天城	双子山	TSIG	0	0	諏岐	久見	OKHM	0	0	
	檜鉢山	TSSB	0	0		岬地区	OKMT	0	0	
	柏崎1	AGKT	0	0		箕浦	OKMU	0	0	
箱根	畠宿	HNHJ	0	0		9号沢	STHG	0	0	
	鍛冶屋	HNKJ	0	0	白滝	黒曜の沢	STKY	0	0	
	黒岩橋	HNKI	0	0		赤石山頂	STSC	0	0	
神津島	上多賀	HNKT	0	0		赤井川	曲川	AIMK	0	0
	芦ノ湯	HNAY	0	0	豊浦	豊泉	TUTI	0	0	
	恩馳島	KZOB	0	0		置戸	Anza	ODAZ	0	0
高原山	砂糠崎	KZSN	0	0		十勝	三股	TKMM	0	0
	甘湯沢	THAY	0	0	名寄	名寄	布川	NYIIA	0	0
	七尋沢	THNH	0	0		旭川	高砂台	AKTS	0	0
新津	金津	NTKT	0	0		春光台	春光台	AKSK	0	0
	板山	SBIY	0	0	不明產地2	NK	NK	0	0	
	深浦	HUHM	0	0		下呂石		GERO	0	0
男鹿	出来島	KDDK	0	0		合計			308	100
	金ヶ崎	OGKS	0	0		不可など			2	
	脇本	OGWM	0	0		総計			310	
羽黒	月山	HGGS	0	0						
	今野川	HGIN	0	0						

遺跡別黒曜石產地組成

遺跡	SWIID	TSTY	WDKB	WDTK	WDTN	WDTY	WOTM	推定不可	総計
後家山(HIGO)	195	3		3	1	10	1	1	214
根々井芝宮(MNS)	47	13							60
水久保(HHK)	4					2			6
東五田(NHG)	28		1		1	12	1	1	30
総計	274	16	1	3	1	12	1	2	310

器種別產地組成

器種	SWIID	TSTY	WDKB	WDTK	WDTN	WDTY	WOTM	推定不可	総計
2次加工剥片	4								4
ナイフ	1								1
凹基石鏹	7		1		1	6			15
原石	14	9							23
原石断片	6			1					7
残核	13							1	14
使用痕剥片	4								4
石核	11							1	12
石核断片	1								1
石錐	4	1				3			8
石鐵	1								1
石礫?	1								1
石鏹断片?	1								1
石鐵未製品	7					1			8
剥片	168	5	1		1				175
有形石鏹	2			1					3
有茎石鏹	14					1			15
両極石核	7								7
両極石核断片	1								1
両極石器	6								6
両極剥片	1								1
(空白)	1					1			2
総計	274	16	1	3	1	12	1	2	310

時代別產地組成

遺構帰属時代	SWIID	TSTY	WDKB	WDTK	WDTN	WDTY	WOTM	推定不可	総計
近世～近代				1					1
古墳最終末	1								1
古墳中期	13	2	1						16
中世	7	1				1			9
中世～近代	4		1					1	6
奈良ないし中世	1					1			1
不明	1								2
平安	1								1
弥生後期	54		1		5	1			61
弥生後期?	1								1
弥生前期	23								23
弥生中期	147	13			3			1	164
(空白)	21				1	2			24
総計	274	16	1	3	1	12	1	2	310

東五里田出土土器の内容物の調査・分析

(財)元興寺文化財研究所
井上美知子

1 分析資料および分析内容

- 東五里田遺跡出土の土器の内容物のマイクロスコープ観察と写真撮影
- 東五里田遺跡出土の土器の内容物のケイ光X線分析による元素分析
- 東五里田遺跡出土の土器の内容物のフーリエ変換型赤外分光光度計による成分分析

2 使用機器及び分析条件

- マイクロスコープ (㈱キーエンス VH-7000)
- エネルギー分散型ケイ光X線分析装置 (以下、XRF) (セイコーインスツルメント㈱製 SEAS230)
試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出することにより元素を同定する。ナトリウムより重い元素が検出可能である。
測定条件—モリブデン管球使用、真空、管電圧45kV
- フーリエ変換型赤外分光光度計 (以下、FT-IR) (日本電子㈱製 JIR-6000)
試料に赤外線を照射し、そこから得られる分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、化合物の種類を同定する。
(測定条件 : KBr 錠剤法 分解能 2 cm^{-1} 、検出器 TGS)

3 方法および結果

- マイクロスコープで内容物を観察後、写真撮影を行なった。その結果、内容物中に紙の繊維は観察されなかった (写真2)。
- 剥落した内容物をXRFで元素分析を行なった。その結果、カルシウム(Ca)、鉄(Fe)、ケイ素(Si)、アルミニウム(Al)、イオウ(S)、カリウム(K)、チタン(Ti)等が検出された。いずれも土壤成分と考えられる (図1)。
- 剥落した内容物をFT-IRで成分分析を行なった。その結果、 $3460, 2630, 1720, 1600, 1440, 1270\text{ cm}^{-1}$ 付近に吸収ピークが見られたことから、漆が含まれている可能性があると考えられたが、硬化した漆に見られる特有の粘りがなく、不純物も多いことから、漆と断定することはできなかった (図2)。

以上の結果より、内容物は漆が含まれる可能性はあるが、漆紙ではないと考えられた。



写真1 土器と内容物

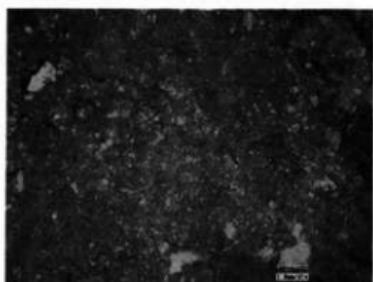


写真2 内容物のマイクロスコープ像

表1 XRF測定条件

測定装置	SEA5230
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	209
試料室空気	真空
コリメータ	φ1.8 mm
励起電圧(kV)	45
管電流(μA)	24
コメント	壺の内容物

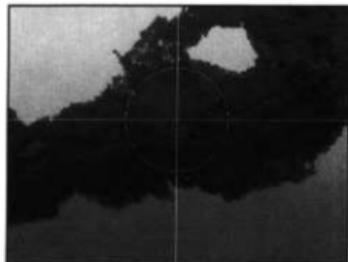


写真3 XRF試料像

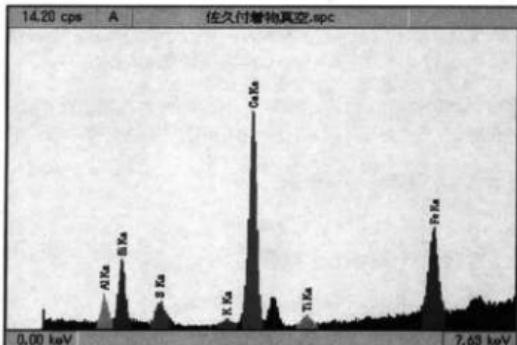


図1 内容物のXRFスペクトル

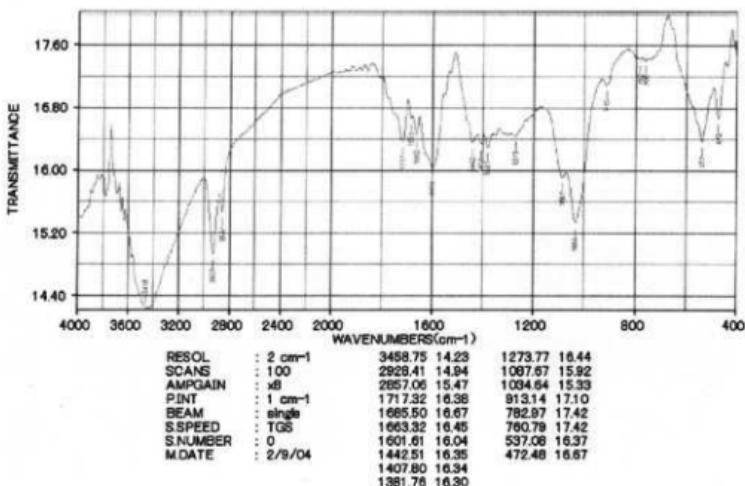


図2 内容物のFT-IRスペクトル



H 1号住居址（南より）



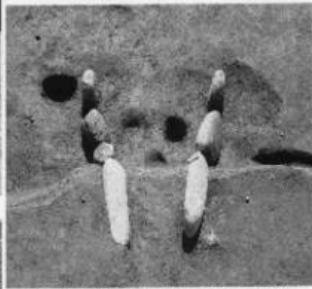
H 1号住居址カマド（南東より）



H 1号住居址カマド袖石（南西より）



H 1号住居址土器（北より）



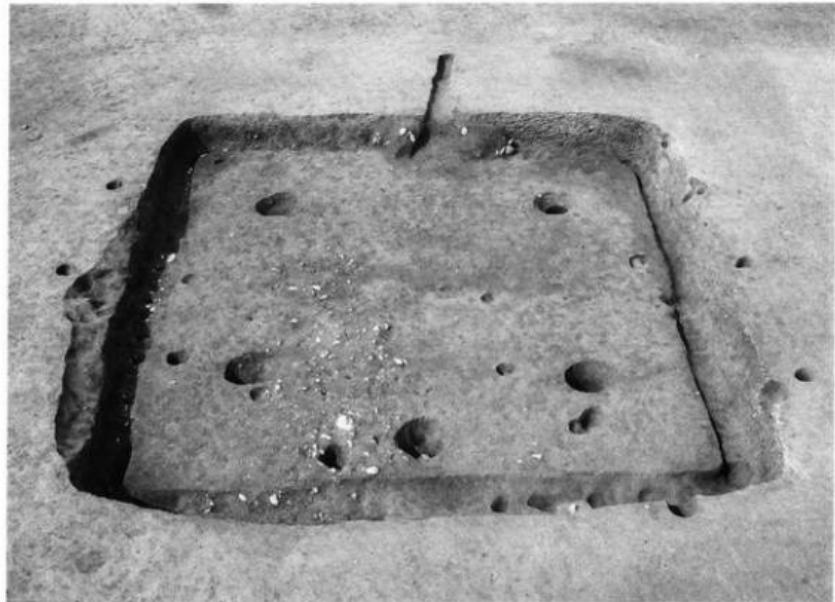
H 1号住居址カマド袖石（北より）



H 1号住居址堀方（南より）



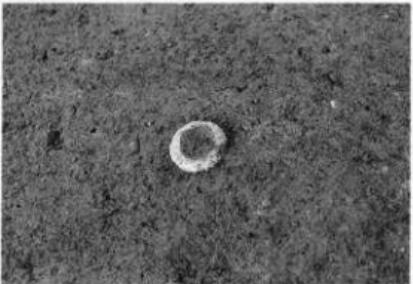
H 1号住居址カマド堀方（南より）



H 2号住居址（南より）



H 2号住居址カマド（南東より）



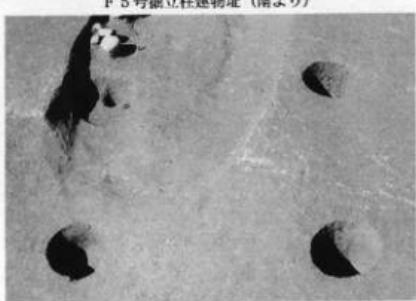
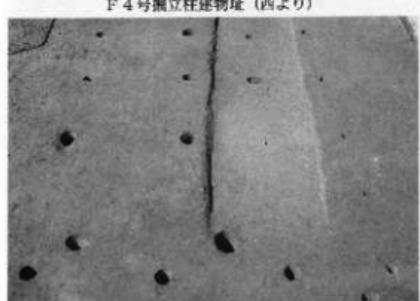
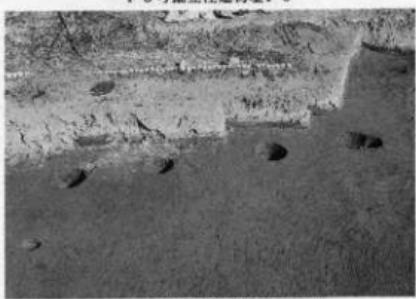
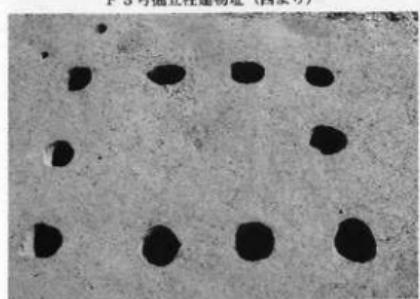
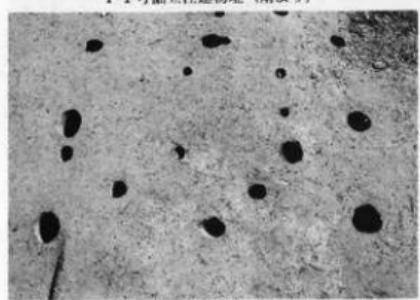
H 2号住居址（金環）

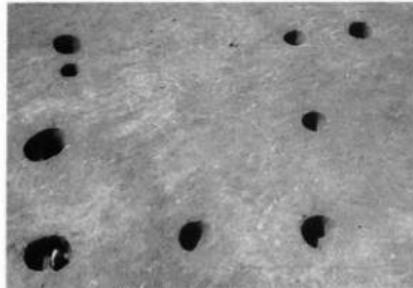


P 5（北より）

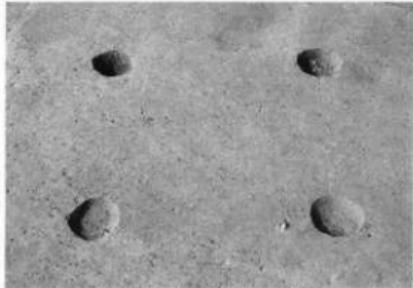


H 2号住居址堀方（南より）

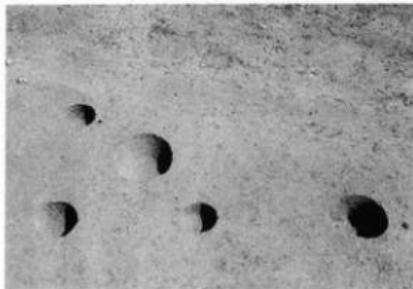




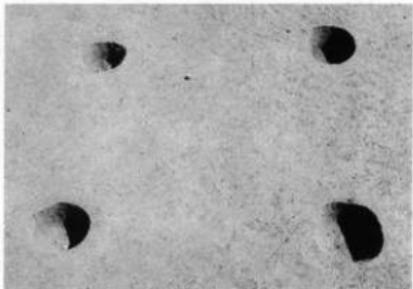
F 8号掘立柱建物址 (東より)



F 9号掘立柱建物址 (東より)



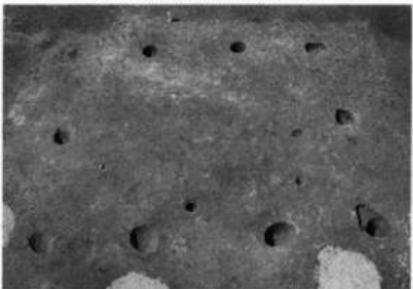
F 10号掘立柱建物址 (西より)



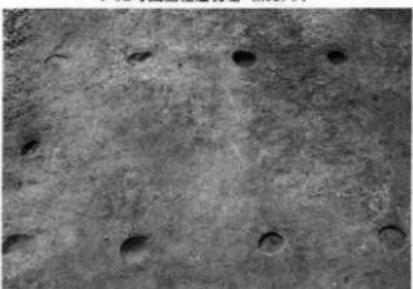
F 11号掘立柱建物址 (南より)



F 12号掘立柱建物址 (東より)



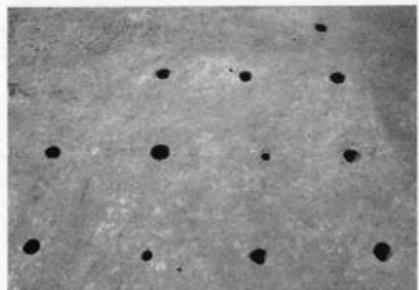
F 13号掘立柱建物址 (東より)



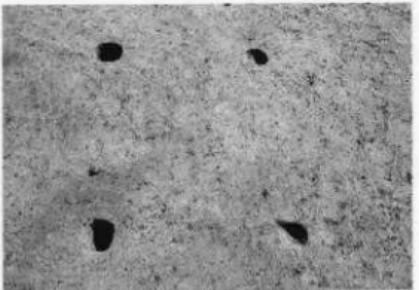
F 14号掘立柱建物址 (北より)



F 15号掘立柱建物址 (北より)



F 16号掘立柱建物址（東より）



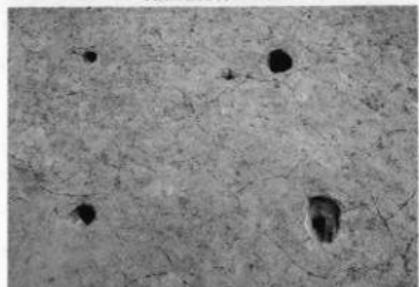
F 17号掘立柱建物址（西より）



F 18号掘立柱建物址（東より）



F 19号掘立柱建物址（西より）



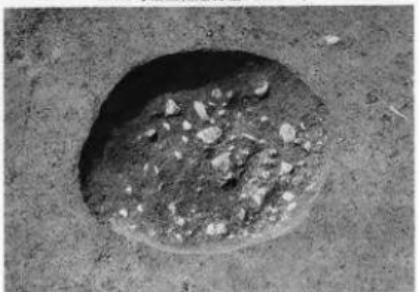
F 20号掘立柱建物址（西より）



F 21号埋立柱建物址（西より）



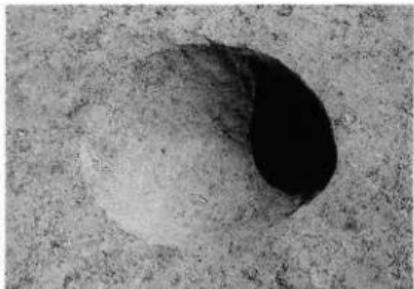
D 1号土坑（東より）



D 2号土坑（東より）



D 3号土坑（南より）



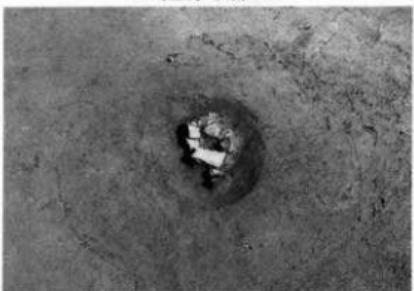
D 4号土坑（西より）



D 5号土坑（西南より）



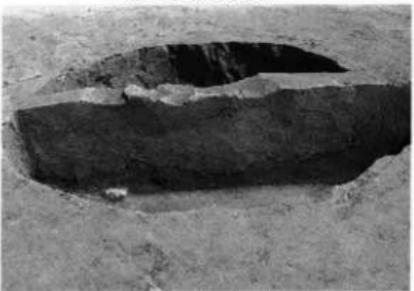
D 6号土坑（南より）



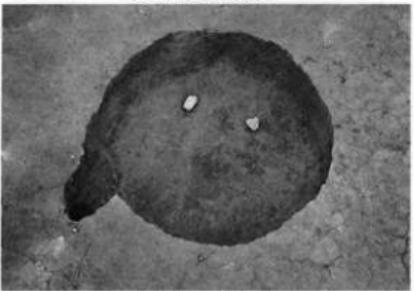
D 7号土坑（南より）



D 7号土坑（西より）



D 7号土坑（東より）



D 7号土坑（南より）



D 8 号土坑（南より）



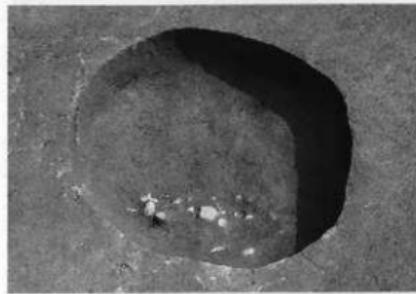
D 8 号土坑（南より）



D 8 号土坑（北より）



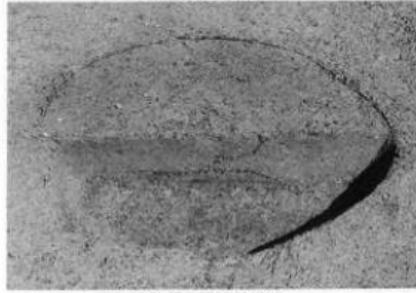
D 8 号土坑（南より）



D 8 号土坑（西より）



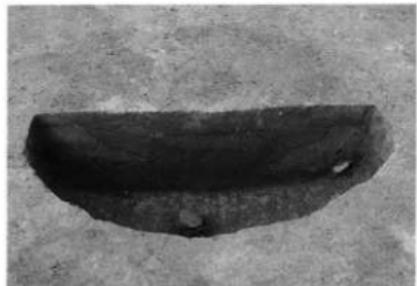
D 9 号土坑（東より）



D 10 号土坑（南より）



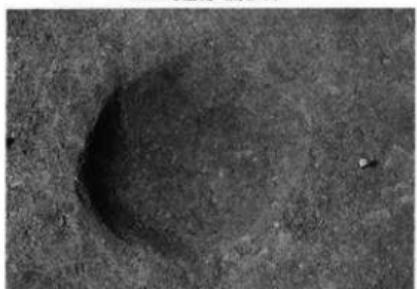
D 10 号土坑（南より）



D11号土坑（南より）



D11号土坑（南より）



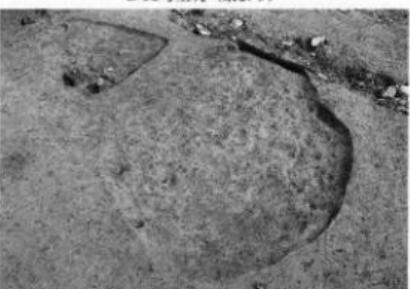
D12号土坑（南より）



D13号土坑（東より）



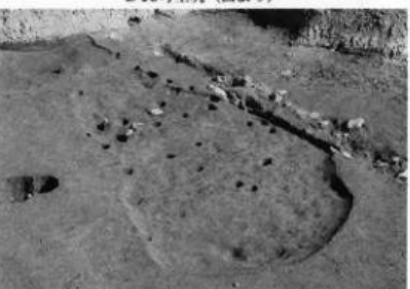
D14号土坑（西より）



D15号土坑（西より）



D16号土坑（西より）



D15・D16号土坑（南より）



M1号溝状遺構（南より）



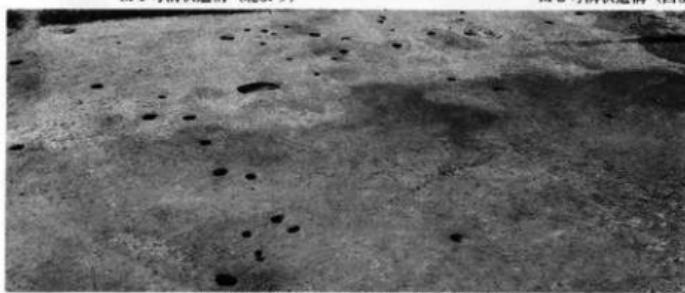
M1号溝状遺構（南より）



M1号溝状遺構（北より）



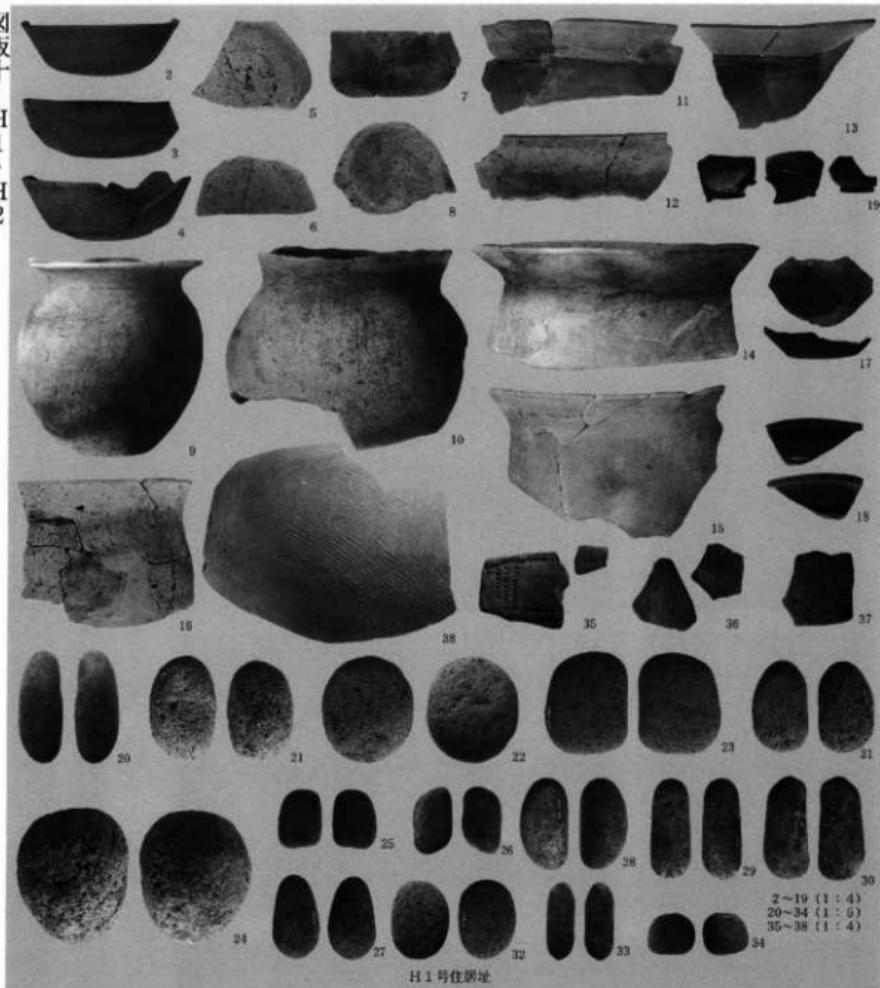
M2号溝状遺構（西より）



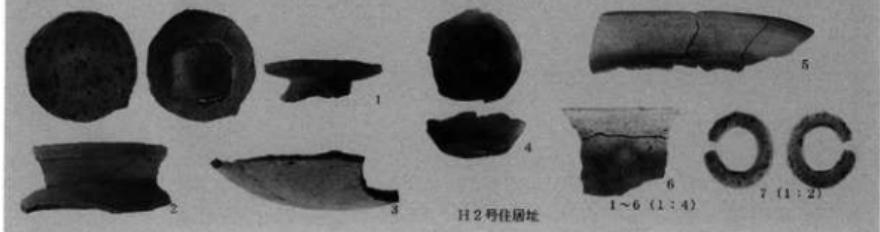
ビット群（みへや・27~30グリット）（東より）



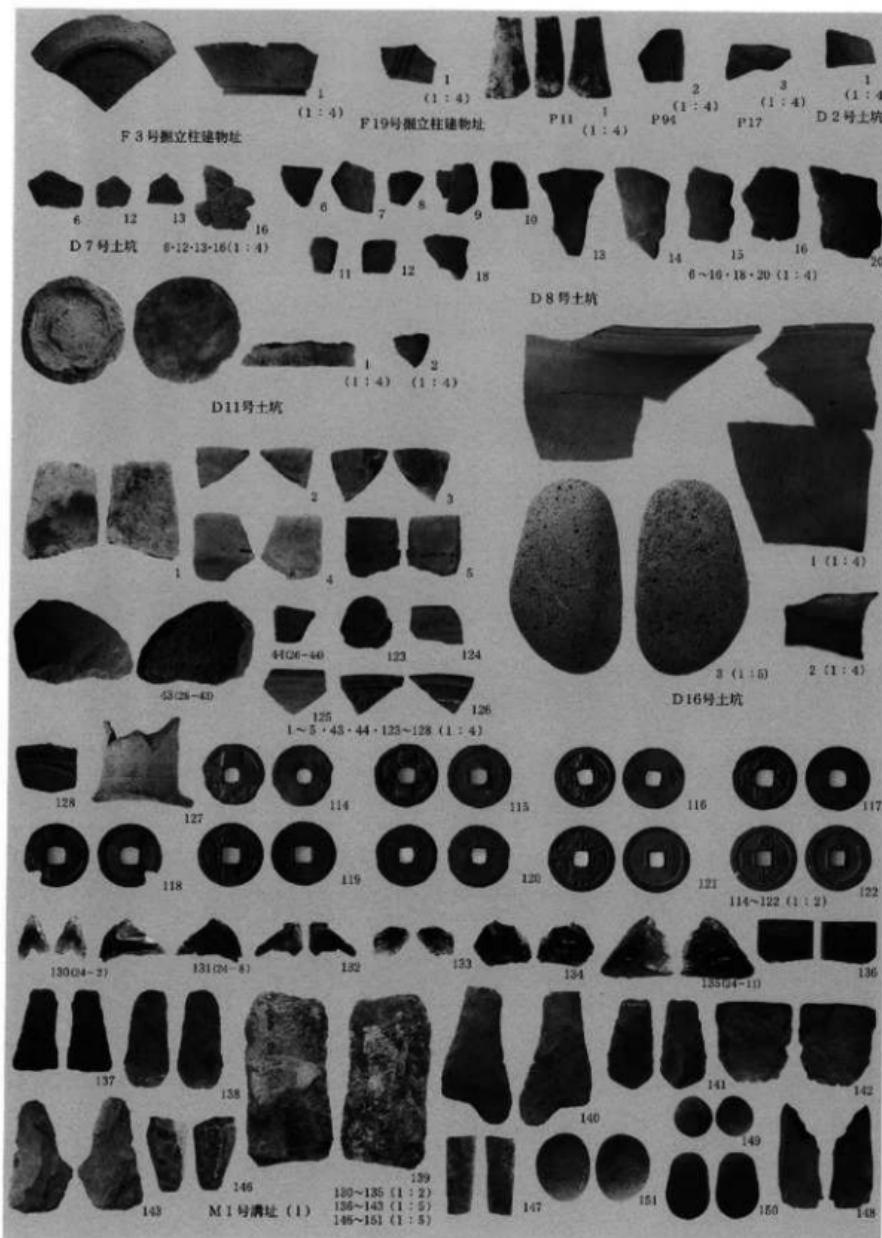
孤立柱建物址群（中世）（北西より）

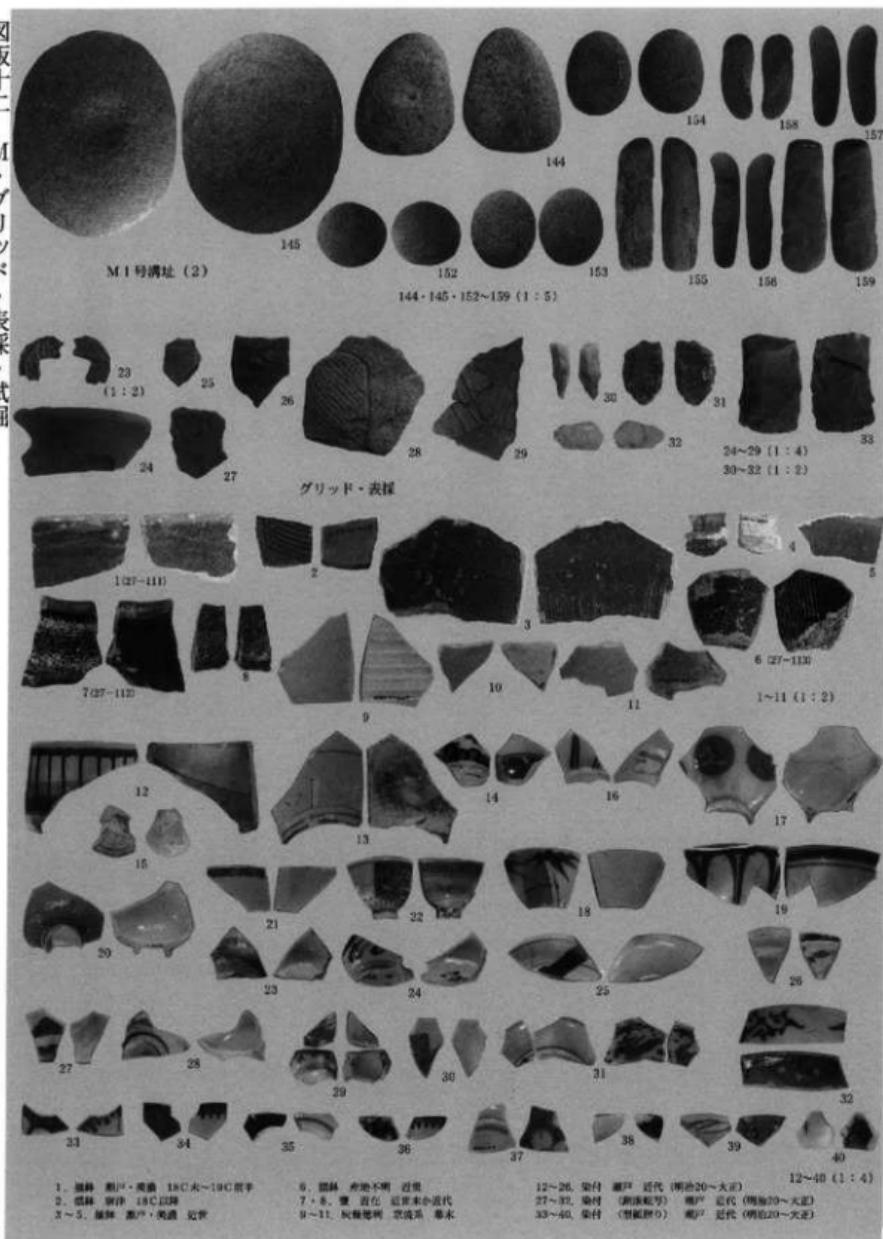


H 1 号住居址



H 2 号住居址





佐久市埋蔵文化財調査報告書

- 第1集 「金井城跡」
第2集 「市内遺跡発掘調査報告書1990」
第3集 「石附城跡Ⅲ」
第4集 「大付け」
第5集 「立科平遺跡」
第6集 「上曾根遺跡」
第7集 「長畠遺跡」
第8集 「龍の下遺跡」
第9集 「田代(41)41世御田代跡」
第10集 「北原遺跡Ⅱ」
第11集 「赤井社外遺跡」
第12集 「若宮遺跡Ⅱ」
第13集 「上高山遺跡Ⅱ」
第14集 「栗毛坂遺跡」
第15集 「野馬久保遺跡」
第16集 「古並城跡」
第17集 「市内遺跡発掘調査報告書1991」
(1月～3月)
第18集 「西曾根遺跡」
第19集 「下吉賀遺跡」
第20集 「下笠崎遺跡Ⅲ」
第21集 「金井城跡Ⅱ」
第22集 「市内遺跡発掘調査報告書1991」
第23集 「南上中京・南下中原遺跡」
第24集 「上里塙遺跡」
第25集 「上久保田遺跡IV」
第26集 「藤原古墳群・藤塚Ⅱ」
第27集 「上久保田遺跡」
第28集 「曾根新城V」
第29集 「阿村遺跡B・山法師遺跡B」
第30集 「市内遺跡発掘調査報告書1992」
第31集 「山法師遺跡A・筒井遺跡A」
第32集 「東ノ町」
第33集 「豊原遺跡」・下曾根遺跡I・
西一本柳遺跡I・
第34集 「市内遺跡発掘調査報告書1993」
第35集 「市内遺跡発掘調査報告書1993」
第36集 「乾谷日出跡Ⅲ」
第37集 「西・本柳遺跡II・中西ノ久保遺跡I」
第38集 「南下中京遺跡II」
第39集 「下里塙遺跡」
第40集 「寺塙遺跡」
第41集 「笠原新城遺跡I・II・III・IV・VI」
「久保田向遺跡I・II・V・VI・VII」
「西曾根遺跡II・III」
第42集 「筑山」
第43集 「椎原平遺跡・池端遺跡」
第44集 「寺塙遺跡」
第45集 「市内遺跡発掘調査報告書1994」
第46集 「築り道跡」
第47集 「上笠原遺跡V」
第48集 「築城跡」
第49集 「築ヶ宮遺跡」
第50集 「豪塙遺跡Ⅲ」
第51集 「中道跡・中尾敷遺跡II」
第52集 「寺塙の内遺跡」
第53集 「門山坊遺跡II」
第54集 「市内遺跡発掘調査報告書1995」
第55集 「寺塙前遺跡I・II」
第56集 「里原遺跡X」
- 第67集 「高師町遺跡II」
第58集 「下穴虫遺跡II」
第59集 「市内遺跡発掘調査報告書1996」
第60集 「青柳城遺跡I」
第61集 「河原遺跡」
第62集 「野馬久保遺跡II」
第63集 「下大久保遺跡Ⅲ」
第64集 「栗の木遺跡IV」
第65集 「中宿遺跡」
第66集 「中西ノ久保遺跡II・仲田遺跡・寺塙遺跡II」
第67集 「伊勢塙遺跡」
第68集 「前郷遺跡」
第69集 「高山遺跡I・II」
第70集 「鶴音堂遺跡」
第71集 「市内遺跡発掘調査報告書1997」
第72集 「市淀遺跡II」
第73集 「内一本柳遺跡III・IV」
第74集 「五里田遺跡」
第75集 「八風山遺跡II」
第76集 「南近林」
第77集 「番屋前番跡」
第78集 「乾塙遺跡・乾塙古墳」
第79集 「四ツ塙遺跡I」
第80集 「四ツ塙遺跡II」
第81集 「名守寺遺跡」
第82集 「市内遺跡発掘調査報告書1998」
第83集 「下生諸塙遺跡IV」
第84集 「樺名平遺跡」
第85集 「勝又遺跡II」
第86集 「市内遺跡発掘調査報告書1999」
第87集 「宮塙遺跡」
第88集 「下曾根遺跡」
第89集 「川原遺跡II」
第90集 「梨の木遺跡」
第91集 「内一本柳遺跡V・VI・中長塙・松の木遺跡」
第92集 「社の木遺跡II・仲田遺跡II」
第93集 「八幡山遺跡」
第94集 「瑞石遺跡」
第95集 「市内遺跡発掘調査報告書2000」
第96集 「上木戸遺跡」
第97集 「久保田遺跡」
第98集 「梨塙・I・V」
第99集 「中通遺跡」
第100集 「野沢遺跡II」
第101集 「長足遺跡」
第102集 「内一本柳遺跡IV」
第103集 「里原・第一分冊一」
第104集 「鶴の木遺跡II」
第105集 「青柳城遺跡III」
第106集 「鶴の木遺跡II」
第107集 「梨塙・第一分冊一」
第108集 「市内遺跡発掘調査報告書2001」
第109集 「西・本柳遺跡VI」
第110集 「佐久市周辺土地地区埋蔵文化財整理事業」
第111集 「上ノ久保遺跡」
第112集 「印原座遺跡」
第113集 「内一本柳遺跡IV」
第114集 「内一本柳遺跡II」
第115集 「梨塙・第三分冊一」
第116集 「東大久保遺跡II」

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第117集

東五里田遺跡

長野県佐久市野沢東五里田遺跡発掘調査報告書

2004年3月31日

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市大字中込3056

文化財課

〒385-0006 長野県佐久市大字志賀5953

TEL 0267-68-7321

印刷所 キクハラインク 有限公司